大和田建樹編

謠曲通解

第七卷

帝國圖書館藏

帝國圖書館藏	
登録番号	〇一九六七
登録年月日	

謡曲通解總目次

第一卷（首卷●總論○歌舞の起原○謡楽の起原○能の大成○能の作者○明和の改正○能の組織○能の興味○謡の文學上價値○通解の由來
●高砂●田村●東北●道成寺●鵜飼●實盛●龍野●卒都婆小町●羽衣●竹生島●歌清●班女●小袖曳●右近●邯鄲●千手●遊行柳●定家●張良●朝長●野宮●仲光●土蜘蛛●小鍛冶●小督●大原御幸●百萬●船弁慶●岩船

第二卷（●老松●八島●江口●望月●紅葉狩●葛城●知章●玉葛●鞍馬天狗●海士●大蛇●夜討曽我●三山●鵜坂●安達原●成瀧宮●忠度●隅田川●鉢木●藤榮●吳服●花月●花筐●剛法師●七騎落●金札

第三卷（●白樂天●盤●楊貴妃●俊寛●瓊風●雛波●放下僧●松風●安宅●攝待●雨月●經政●求塚●天鼓●羅生門●氷室●正尊●宮士太鼓●鉄輪●唐船●四王母●巴●杜若●藤戸●山姥●嵐山

第四卷（●養老●敦盛●井筒●鵜寺小町●石橋●加茂●木曽●嶋丸●鹽竈●殺生石●善界●松虫●三井寺●木賊●鵜●鵜飼●頼政●夕顔●島追船●計電●志賀●清經●砧●阿漕●大江山●春日龍神●四行櫻●大瓶猛々

第五卷（●三輪●鶴●芭蕉●草紙洗小町●烏帽子折●白髭●三笑●竹雪●鵺●捨●粒上●弓八幡●項羽●源氏供養●錦木●大會●皇帝●春榮●龍太鼓●一角仙人●自然居士●放生川●生田敦盛●胡蝶●通小町●當麻●調伏曽我●元服曽我●合浦

第六卷（●龍田●猩々●曽頼寺●葵上●願師曽我●佐保山●通盛●祇王●高野物狂●須磨源氏●邪絹●鵺原與市●蘆●鶏鳴小町●松山鏡●枕慈童●忠信●吉野靜●二人靜●歌占●第六天●船橋●身延●現在七面●鹽竈●東方朔●俊成忠度●梅枝●加茂物狂●車僧●御裳濯●碇潜●浮船●千引●小鍛冶

第七卷（●玉井●橋辨慶●檜垣●東岸居士●國栖●江島●鱗形●佛原●籠祇王●葛城天狗●和布刈●土車●櫻川●飛鳥川●舍利●道明寺●海士●住吉詣●谷行●龍虎●猩々●空崎●六浦●水無月祓●昭君●大社●淡路●雲雀山●謡囃荷●花軍●水無瀬●吉野天人●錦戸●野守

第八卷（●飛雲●久世戸●松尾●落葉●藍染川●松山天狗●鵜祭●源太夫●雲林院●殺生●論議●代主●盛久●梅草●薩●逆鉾●切兼曽我●采女●盛久●猩々

謡曲通解第七卷目次

玉井……一丁
橋辨慶……七丁
檜垣……十丁
東岸居士……十八丁
國栖……二十二丁
江島……三十丁
鱗形……三十九丁
佛原……四十二丁
籠祇王……四十七丁
葛城天狗……五十八丁
和布刈……六十一丁
土車……六十六丁
櫻川……七十三丁
飛鳥川……八十三丁
舍利……八十八丁
道明寺……九十四丁

謠曲通解第七卷目次

一　玉井……一丁
七　橋辨慶……十丁
十　檜垣……十丁
十一　東岸居士……八丁
二　國栖……十二丁
三　江島……十丁
三　~~伊籠~~……
四　形原……十九丁
四　祇王……十二丁
五　葛城天狗……十八丁
六　和布刈……十一丁
六　土車……十六丁
七　櫻川……十三丁
八　飛鳥川……十三丁
八　舍利……十八丁
九　道明寺……十四丁

東京帝國大學圖書之印

滝海……百二丁
住吉詣……百一六丁
谷行……百十二丁
龍虎……百二十一丁
寢覺……百二十七丁
空蟬……百三十二丁
六浦……百三十六丁
水無月祓……百四十二丁
昭君……百四十九丁
大社……百五十六丁
淡路……百六十二丁
雲雀山……百六十八丁
戀重荷……百七十五丁
花軍……百八十一丁
水無瀬……百八十五丁
吉野天人……百八十九丁
錦戸……百九十三丁
野守……二百丁

謠曲通解第七卷

大和田建樹　編

玉井 たまのゐ

信光作

前シテ　豐玉姫
後シテ　海神女

地神四代

天孫の御代々。すなはち第一の天照大神。第二の正哉吾勝々速日天忍穂耳尊。第三の天津彦々火瓊々杵尊。第四の彦火々出見尊。第五の彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊を合はせて地神四代といふ。其第四なれば四代目と云へり。四代目とのみ云へり。

ワキサシ「それ天地開け始まりしより。天神七代地神四代に至り。火々出見尊とは我事なり。詞「扨も兄火闌降命の釣針を。借かりそめながら海邊に釣を垂れしに。彼釣針を魚に取られぬ。此由を兄命に申せども。唯もとの針を返せと宣ふ間。劔をくづし針に作りて返すといへども。猶もとの鈎をはたる。さらば海中に入り。彼釣針を尋ねんと思ひ立ちて候ふ。わたづみのうこと(庭)も知らぬ鹽土男の翁の教へに從ひて。無目籠の猛き心。歌直なる道を行く如く。波路遥かに隔て來て。こゝぞ名におふわたづみ

の意なり。
扨もとのかみ云々　昨火々出尊は山幸彦（やまさちびこ）とて山野の獵ふ物を得。火闌降命は海幸彦（うみさちびこ）とて海の魚類を得意とせり。しかるに兄弟の交換して見んとて。互ひに事のみあてに興なし。ちと専れぬ事を試み給ひし由。記紀ふ見ゆ。

かりうめなばう　兄命の針を借りて釣を試み給よよしふ云ひかけたり。

卻をゝブし　弟尊の御鉤を以て幾つもの釣針を作るを云ふ。

返せ〳〵と　責め促すをはたる云ふ。

わたづみ　海の事。

「雨縄のをち」　とも云ふ。

土男　火々出見尊は兄命ふ責めたられて節の出づる迄なく海ふさまよひ給ひしふ。

墮ふ　墮銀老の原。

因為　歎の原。

かりて　無目籠を作りて。

失せし釣針の捜索ふ海神れ方法を教ふ。

の宮ふ　海神の宮ふ入りて。

おれしさすべき　海神の二書ふ見ゆ。

申したる事。

無目籠　目より細水の入り込ま

ぬやうふ細かふ作れる籠。

冠木門を云ふ。

衛門　目より細水の入り込ま

ゆつの桂　「ゆつ」ハ五百箇の意。葉の繁茂して數多き形容。

長き月日　神界の月日ハ人界よりも長きよしなり。

手ずさみ　手慰みの意。

老いせぬ門ふ出で入るや云々　不老門前日月遠の句を用ひて云ふ。

久堅の　天の枕詞。

此國の　海神の領地を云ふ。

長き命を　龍の長きをと云ひかけたり。

枝を連ねて　兄弟の事。すなはち玉玉波の御姉妹を云ふ。枝の文字ハ桂ふ縁あり。

あさまふなりぬ　あきれたるを云ふ。

なべてならざる　並常の人とも見えぬを云ふ。

見えける　見えける事も云々　我姿の見られる、恥づかしさも忘れて。尊の御袴子ふ見取れる趣なるを云ふ。

みやびやかなるを云ふ。　風采の整めて優美

の。都と知れば水もなく。廣き眞砂に着きにけり。詞「扨も我塵土男の翁が敎へに從ひ。わたづみの都に入りぬ。こゝに瑠璃の瓦を敷ける衛門あり。門前に玉の井あり。此井の有樣銀色かゝやき世の常ならず。又ゆつの柱の木あり。木の下に立ち寄り。暫く事のよしをも窺はゞやと思ひ候ふ。

シテツレ一聲「はかりなき。齡を延ぶる明暮の。長き月日の光りかな。シテ「いとなむ業も手ずさみに。二人「結ぶも清き水ならん。

シテサシ「濁りなき心の水の泉まで。老いせぬ齡を汲みて知る。

二人「藥の水の故なれや。老いせぬ門に出で入るや。月日疊らぬ久堅の。天にもますや此國の。行末遠き住居かな。歌「くり返す。

玉の釣瓶の掛繩の。長き命を汲みて知る。心の底も疊りなき。

月の桂の光り添ふ。枝を連ねて諸共に。朝夕なるゝ玉の井の。

深き契は賴もしや。

ワキ詞「我玉の井の邊にたゝずむ處に。其樣けたかき女性二人來り。玉の釣瓶を持ち水を汲む氣色見えたり。言葉をかけんも如何なれば。是なる桂の木陰に立ちより。身を隱しつゝたゝずみたり。シテ詞「人ありとだに白露の。玉の釣瓶を沈めんと。玉の井に立ち寄り底を見れば。桂の木陰に人見えたり。是は如何なる人やらん。ワキ「忍ぶ姿も顯はれて。あさまになりぬさりながら。なべてならざる御姿。如何なる人にてましますぞ。シテ「あら恥づかしや我姿の。見えける事も我ながら。恪るゝ程の御氣色。形も殊にみやびやかなり。唯人ならず見奉る。御名を名乘りおはしませ。ワキ「今は何をか包むべき。我は天孫地神四代。火々出見尊とは我事なり。ツレ「あら有り難や天の御神の。御孫の尊を目のあたり。見奉るぞ不思議なる。シテ詞「いやさればこそ始めより。天孫の光り隱れなし。扨是までの臨幸は。ろも何

大麻の引く手あまたの　伊勢物語ふ「大麻の引く手あまたふなりぬれば思へどえこそたのまざりけれ」とあるを用ひて云ふ。大麻は榊の道具ふて麻と紙とを切りて榊ふ用ひたるものなり。之を殺ずる人キが手を引をよせて身を捨ゴる事あれば。あまたの男より心かけらるゝ女の身ふ譬へて云へるなり。　卒塔婆をるの意。うちつけをる

高垣　宮中の周圍の高大なる垣を云ふ。　高垣の上ふある短少なるものを云ふ。　八重疊を疊と書して敷もわたすの意。八重疊の敷

事の故やらん。ワキ「實に御不審は御理。我釣針を魚に取られ。遥々是まで尋ね來る。こゝをば何處と申すやらん。委しく語り給ふべし。シテ詞「知ろしめさぬは御理。是は龍宮わたづみの宮。ワキ「かく言の葉をかはし給ふ。二人の御名は。シテ「豐玉姫。ツレ「我は妹の玉依姫。地「互に連枝の名乘りして。つゝましながら御神の。みやびやかなるに。早うち解けてゆふしでの。神にぞ靡く大麻の。引く手あまたの心かな。

シテ詞「如何に申し上げ候ふ。うちつけなる御事なれども。やがて父母に逢はせ奉り。彼釣針をも尋ぬべし御心安く思し召され候へ。ワキ詞「さらばやがて伴なひ申し。宮中へ參り候ふべし。地ダリ「かたじけなくも大の御神の御孫。わたづみの都に至り給ふ事。有り難かりける御影かな。シテサシ「然れば高垣姫垣調ほり。地「高殿屋照りかゝやき。雲の八重疊を敷き。尊を請と入れ

敷も頂ね敷くを云ふなり。古代の疊へ今日の品の如く敷附ふしたるものふ非ず。入用の時ふ敷枕ふても持ち來て。板の間ふても地上ふても敷くものと知るべし。　大切ふして仕ふる事。いつき兄を痛め「弟を痛め」とあるべき處なり。

潮滿潮涸の引さすべき二つの寶玉。　潮を心ふ任せて滿外祖となりて云ふ。海神を指して云ふ。豐玉姫の父なれば。尊の御爲め　ふ母方の親ふ當れり。豐姫も　豐玉姫の母親。懷妊の様子のありたゝなりロ交　られたるを云ふ。

奉り。シテ「父母の神いつきかしづき。地「臨幸の意趣を語り給ふ。クセ「我兄の釣針を。かりそめながら波間行く。魚に取られて無き由を。歎き給へど其針に。あらずは取らじと兎に角に。兄を痛めさまゞに。猛き心の如何ならんと。語り給へば父の神。御心安く思し召せ。まづ釣針を尋ねつゝ。御國に歸し申すべし。シテ「猶兄の怒りあらば。地「潮滿湖涸の二つの玉を。尊に奉りなば御心に。任せて國も久堅の。天より降る御神の。外祖となりて豐姫も。たゞならぬ姿有明の。月日程なく三年を送り給へり。

ワキ詞「かくて三年になりぬれば。我國に歸り上るべし。海路の案内如何ならん。シテ詞「御心安く思し召せ。わたづみの宮主伴なひて。海中の乘物さまゞあり。地「大鰐に乘じ颶風を吹かせ。陸地に送りつけ申さん。其程は待たせおはしませ。

まうとたる詞。詠と云ふに同じ。尊み

桂のまゆずみ　桂は月の異名なれば。月の如き眉ずみの意。

鹿背杖　石突の處の「さすきた」の如く二股ふ爲れる杖。

五丈の鰐　頭より尾までの寸法なり。大わふの意。古事記ふは八尋鰐とあり。こゝふは當時の人情ふ早く感ずる詞ゐ用ひて云ひかへたるなるべし。

天女二人「光り散る。潮満玉のおのづから。曇らぬ御影仰ぐなり。

地「各玉を捧げつゝ。豐姫玉依二人の姫宮。金銀盈裏に玉を供へ尊に捧げ奉り。彼釣針を待ち給ふ。わたづみの宮主持參せよ。

後シテ「まうとの君の命に隨ひ。わたづみの宮主釣針を尋ねて。天孫の御前に奉る。

地「潮満潮涸二つの玉を。釣針に取り添へ捧げ申し。舞樂を奏し豐姫玉依。袖を返して舞ひ給ふ。地「いづれも妙なる舞の袖。玉のかんざし桂の黛。月も照り添ふ花の姿。雪を廻らす袂かな。

シテ「わたづみの宮主。地「姿は老龍の雲に蟠まり。鹿背杖にすがり。左右に返す袂も花やかに。足踏はとう〳〵と。拍子をそろへて時移れば。尊は御座を立ち給ひ。歸り給へば袂にすがり。わたづみの乘物を奉らんと。五丈の鰐に乘せ奉り。二人の姫に玉を持たせ。龍王立ち來る波を拂ひ。潮を蹴立て。遥かに送りつけ奉りて。又龍宮にぞ歸りける。

シテ（前後）西塔辨慶
トモ　從者
子方　源牛若
遣ハ　京都
牛若　辨慶五條の橋ふて主從の緣を結ぶ物語を作れり。
西塔　比叡山ふハ東塔西塔横川の三塔ある其一つなり。辨慶ハ比叡山ふ留學せし頃なれば云ふ。

五條の天神　京都の五條橋の通ふあり。

丑の時詣で　今の夜二時ふ神佛へ參詣するを云ふ。

宿願の日數ふ達するを云ふ。

蝶鳥の如く　早わざの樣を形容して云ふ。

おつ取りこめて討たざらん　大勢が四方を囲みて討つを云ふ。此句の前ふ「なぞか」の詞を置き

橋辨慶

はしべんけい

安清作

シテ詞「是は西塔のかたはらに住む武藏坊辨慶にて候ふ。我宿願の子細有つて。五條の天神へ。丑の時詣でを仕り候ふ。今日満參にて候ふ程に。唯今參らばやと存じ候ふ。如何に誰か有る。

トモ詞「御前に候ふ。シテ「五條の天神へ參らうずるにて有るぞ其分心得候へ。トモ「畏つて候ふ。又申すべき事の候ふ。昨日五條の橋を通り候ふ所に。十二三ばかりなる幼き者。小太刀にて切つて廻り候ふは。さながら蝶鳥の如くなる由申し候ふ。先々今夜の御物詣は。思し召し御止まりあれかしと存じ候ふ。シテ「言語道斷の事を申す者かな。たとへば天魔鬼神なりとも。大勢には叶ふまじ。おつ取りこめて討たざらん。トモ「おつ取りこむれば

て見るべし。囲み討ちふせばなどか討たれぬ事の有るべきの意。

かしこう御身討たすらんの詞と見るべし。「かしこう」トモ「あつぱれ」「うまく」などの意。御身れ御覧をさして云ふ。定めてまんまと御身が討たれ給ふならんの意。

聞き遁げて今夜の夜行を思ひとゞまるを云ふ。不思議の者ありと聞

母の仰せの重ければ牛若が五條橋ふて往來の人を切ると聞き。母の意見を加へ敵討ふ追ひのぼす時なりと知るべし。

夕顔の花の色云々「波も玉散る」の玉の字を受けて白露と云ひ。露より夕顔を呼び出だして

不思議にはづれ。敵を手元に寄せ付けず。シテ「手近く寄れば。トモ「目にも。シテ「見えず。地「神變奇特不思議なる。化生の者に寄せ合せ。かしこう御身討たすらん。都廣しと申せども。是程の者あらじ。實に奇特なる者かな。

シテ詞「さあらば今夜は思ひ止まらうずるにて有るう。いや辨慶程の者の。聞き遁けは無念なり。今夜夜更けば橋に行き。化生の者を平らげんと。地「夕べ程なく暮方の。雲の氣色も引きかへて風すさまじく更くる夜を。遲しところは待ち居たれ。

牛若「扨も牛若は母の仰せの重ければ。明けなば寺へ上るべし。今宵ばかりの名殘なれば。五條の橋に立ち出でゝ。川波添へて忽ちに。月の光を待つべしと。一聲「夕波の氣色はそれか夜嵐の。夕べ程なき秋の風。地「面白の氣色やな。ゞろ浮き立つ我心。波も玉散る白露の。夕顔の花の色。五條の橋の橋板を。とゞろ

五條の文字ふ續けたり。源氏物語ふ光源氏五條にて夕顔の花さく宿を訪れる事見ゆ。唯うの詞を用ひたるのみ。委しくは四卷の「夕顔」を見るべし。

おどしふおどせる　鎧をおどすとは。一枚づゝびらゝと下りたるものを綴ひ合へする事なり。てゝは黒革ふ綴ひたる鎧を云ふ。

草摺長ふ　腰の廻りふ垂れたる鎧の袖の如きものを草摺と云ふ。大きゝ鎧したれば長く下る故ふ云ふ。

具中取つて　長刀の具中を手ふ握りて肩ふかつぐを云ふ。

とゞろと踏み鳴らし。音も靜かに更くる夜に。通る人をぞ待ち居たる。

シテ詞「既に此夜も明方の。山塔の鐘も杉間の雲の。光りかゝやく月の夜に。着たる鎧は黒革の。おどしにおどせる大鎧。草摺長に着なしつゝ。もとより好む大長刀。具中取つて打ちかつぎ。ゆらりゝと出でたる有樣。如何なる天魔鬼神なりとも。面を向くべきやうあらじと。我身ながらも物頼もしうて。手に立つ敵の戀しさよ。牛若「川風も早更け過ぐる橋の面に。通る人もなきぞとて。心すゞげに休らへば。シテ「辨慶かくとも白波の。立ち寄り渡る橋板を。さもあらゝかに踏み鳴らせば。牛若「牛若彼を見るよりも。すはやうれしや人來るぞと。薄衣猶も引きかつき。かたはらに寄り添ひたゝずめば。シテ「辨慶彼を見付けつゝ。言葉をかけんと思へども。見れば女の姿なり。我は出家の事な

れば。思ひわづらひ過きて行く。牛若「牛若彼をなぶつて見んと。行きちがひざまに長刀の。柄元をはつしと蹴上ぐれば。シテ「すは痴者よ物見せんと。地「長刀やがて取り直し。いで物見せん手並の程と。切つてかゝれば牛若は。少しも騒がずつゝ立ち直つて。薄衣引きのけつゝ。靜々と太刀拔き放つて。つゝ支へたる長刀の。切先に太刀打ち合はせ。つめつ開いつ戰ひしが。何とかしたりけん。手元に牛若寄るとぞ見にしが。たゝみ重ねて打つ太刀に。さしもの辨慶合はせ兼ねて。橋桁を二三間。しさつて肝をぞ消したりける。あら物々しあれ程の。小性一人を切ればとて。手並にいかで洩らすべきと。長刀柄長くおつ取りのべて。走りかゝつてちやうと切れば。ろむけて右に飛びちがふ。取り直して裾をなぎ拂へば。踊りあがつて足もためず。中を拂へば頭を地に付け。千々に戰ふ大長刀。打ち落されて力なく。組まんと

小性　牛若を指して云ふ

長刀柄長〜　辨慶が。

ろむけて右へ取り直して裾を　牛若が。辨慶が。

踊りあがつて中を拂へば　牛若が。辨慶が。

頭を地へ付け　牛若が。

打ち落とされて　辨慶が。

組まんと　同人が。

寄れば切り拂ふ。すがらんとするも便なし。せん方なくて辨慶は。奇代なる少人かなとて。あきれはてゝぞ立つたりける。

ロンギ地「不思議や御身誰なれば。まだいとけなき姿にて。かほどけなげにましますぞ。委しく名乘りおはしませ。牛若「今は何をか包むべき。我は源牛若。地「義朝の御子か。牛若「扨汝は。地「西塔の武藏辨慶なり。互に名乘り合ひ。降參申さん御免あれ。少人の御事。我は出家。位も氏もけなげさも。よき主なれば頼むなり。鹿忽にや思し召すらんさりながら。是又三世の奇緣の始め。今より後は主從ぞと。契約堅く申しつゝ。薄衣かづかせ奉り。辨慶も長刀打ちかついで。九條の御所へぞ參りける。

切り拂ふ　牛若が。

すがらんとするも　辨慶が。

位も氏も　源氏の若君ふして高官高位たるべき家柄を云ふ。

三世の　過去現在未來の緣法を主從なるを云ふ。

九條の御所　牛若の住處を云ふ。御所は皇居の稱ふて其他に用ふるは當時の慣習なれど。無論此界ふは行はれし詞と見由。

檜垣

ひがき

元清作

ワキ詞「是は肥後の國岩戸と申す山に居住の僧にて候ふ。扨も此

前シテ　若女

後シテ　檜垣姫

ワキ　僧

ツレ　肥後

中古ふ名高かりし檜垣姫の物語を作れり。後撰集ふ「筑紫白川と云ふ處ふ住み侍りける大貳藤原興範朝臣の。（姫の家の前を）ま

かりわたるついでに。水たべんとて(遊の家に)立ちよりて乞ひ侍りければ。水をもりて出でゝよみ侍りける。檜垣の嫗。「年經れば我黒髮も白川のみづはくむまで老いにけるかな」とあるを本とせしなり。大和物語にも此物語あれど。それに小野好古が藤原純友の討手に太宰府に下りし時の事とせり。また新古今集に清原元輔のよみかけたる歌とせり。恭者のため會へせて示す。
岩戸 肥後の國飽田郡にあり。雲巖寺と云ふ寺ありて。觀音を本尊とす。
鄕里を去る 人家に遠きを云ふ。
閼伽の水 佛に供する水を云ふ。
影白河の 白髮の影うつりて水まで白く見ゆるの意に云ひかけたり。白河ハ肥後の阿蘇川の末なりと云ふ。
月も袂やぬらすらん 月のうつりたる水を汲む故に云ふ。袂が水にぬれたるを月がぬらしたるやうに云ひなしたるなり。
貧家に親知少く云々 本朝文粹に橘在列の詩に。「家貧親知少。身賤故人疎」とあるを引く。
霜葉 紅葉の事。もハや老い朽ちて散るを待つばかりなるを云ふ。
水さへ深き 川なれば其水も我罪と共に深きの意。
拾人に 岩戸居住の僧を指す。
値遇を運ぶ 知識に遇ふために日々足を運ぶの意。
足引の 足を運ぶの意に云ひか

岩戸の觀世音は。靈驗殊勝の御事なれば。暫く參籠し所の致景を見るに。南西は海雲漫々として萬古心の中なり。人稀にして慰み多く。致景あつて鄕里を去る。誠に住むべき靈地と思ひて。三年が間は居住仕りて候ふ。詞「こゝに又百にも及ぶらんとおぼしき老女。毎日閼伽の水を汲みて來り候ふ。今日も來りて候はば。いかなる者ぞと名を尋ねばやと思ひ候ふ。

シテ次第「影白河の水汲めば。月も袂や濡らすらん。サシ「それ鶴鳥は雲を戀ひ。歸雁は友を忍ぶ。人間もまた是れ同じ。貧家には親知少なく。賤しきには故人疎し。老悴衰へ形もなく。露命きはまつて霜葉に似たり。歌「流るゝ水のあはれ世の。其理を汲みて知る。こゝは所も白河の。水さへ深き其罪を。浮かびやすると拾人に。値遇を運ぶ足引の。山下庵に着きにけり。山下庵に着きにけり。

けたり。山の枕詞。
後撰集 村上天皇の天暦年中勅みに依りて大中臣能宣。清原元輔。源順。紀時文。坂上望城五人の撰定せし歌集なり。
年ふれば我黒髮ハ白河のみづはくむまで老いにけるかな 長く世に在り經て落魄するまで老衰せしの意。この「みづはくむ」の詞には諸說ありて今に一定せず。或ハ齒のかゞまりて二重に屈る事なりとも。或ハ瑞齒とて大老年に至る時ハ新に小兒の如き齒の生ゆる事ありとも云へり。されど只老年の樣を云ふ詞と心得べし。白川の水を汲むが如く落ちなせし意に云ひかけたるが面白きなり。
庵に檜垣しつらひて 檜垣ハ檜木にて風流に作れる生籬を云ふ。しつらふハ作り設くる事。これによりて檜垣の嫗と呼ばれしなるべし。
白拍子 歌舞などを業とするもの。袋草紙には肥後の國の遊君

シテ詞「いつもの如く今日もまた御水あげて參りて候ふ。ワキ詞「毎日老女の歩み返す〲も痛はしうこそ候へ。シテ「せめてはかやうの事にてこそ。少しの罪をも遁るべけれ。亡からん跡を弔ひ給ひ候へ。明けなば又參り候ふべし。御暇申し候はん。ワキ「暫く。御身の名を名乘り給へ。シテ「何と名を名乘れと候ふや。ワキ「中々の事。シテ「是は思ひもよらぬ仰せかな。彼後撰集の歌に。年ふれば我黒髮も白河の。詞「みづは汲むまで老いにけるかなと。讀みしも妾が歌なり。昔し筑前の太宰府に。庵に檜垣しつらひて住みし白拍子。後には衰へて此白河の邊りに住みしなり。ワキ「實にさる事を聞きしなり。其白河の庵のあたりを。藤原の興範通りし時。シテ「水やあると乞はせ給ひし程に。其水汲みて參らするとて。ワキ「みづはくむとは。シテ「讀みしなり。地「そもみづはくむと申すは。唯白河の水にはなし。老いてかゞ

檜垣とあり。

夕暮れして　夕暮の暗をふまれての意。

風緑野ふ收まつて云々　古人の詩句なるべし。極條に柳の緑みわたれるさま。月桂に唯月の事なり。

朝ふ紅顔あつて云々　明文集藤原孝の詩ふ。朝有二紅顔一暮為二白骨一朽二於原野一と世路に。暮為二白骨一朽二於原野一と世路に。少年の一盛に忽ち死後の一衰ふ。ずる有様を云ふ。

有爲の有様　有爲轉變として人間に少しの間も同じ有様ふ留まらず。常ふ變化しつゝあるを云ふ。

めるを姿をばみづはくむと申すなり。其志るしをも見給はゞ。彼白川の邊りにて。我跡とひてたび給へと。夕まぐれして失せにけり。

ワキ調「扨は古への檜垣の女假に顯はれ。我に言葉をかはしけるぞや。一つは未世の奇特ぞと。思ひながらも尋ね行けば。歌「不思議や早く日も暮れて。河霧深く立ちこもる。陰に菴の燈の。ほのかに見ゆる不思議さよ。

後シテ「あら有り難の吊らひやな。風緑野に收まつて煙條直し。雲岸頭に定まつて月桂圓かなり。朝に紅顔あつて世路に樂しむといへども。地「夕べには白骨となつて郊原に朽ちぬ。シテ「有爲の有様。地「無常のまこと。シテ「誰か生死の理を論ぜざる。地「いつを限る習ひぞや。老少といつば分別なし。變はるを以て期とせり。誰か必滅を期せざらん。誰かは是を期せざらん。

輪廻の姿　迷の爲ゆふ六道などの苦界を今もめぐりめぐるを云ふ。

其罪深き故ふより　名譽を得るに執着心を殘す原因ふて。佛法ふ之を罪と說けり。

三つ瀬河　冥途にある川の名。

熱鐵の桶云々　地獄の苦役を云ふ。此世ふて水汲みし業ふ依りて此種類の苦しみを受くるなり。

因果の水　前世ふ水汲みたる因ふ依りて。今執心の姿をあらはして再び水汲む果を見ずるを云ふ。

かけ水の意ふや。　皆悟りて汲みあぐる水

ワキ「不思議やな聲を聞けば有りつる人なり。同じくは姿を顯はし給ふべし。御僧の御法を受くべきなり。人にな顯はし給ひそとよ。ワキ「中御跡とひて參らせん。シテ「さらば姿を顯はして。中に人に顯はす事有るまじ。早々姿を見え給へ。シテ「涙雲りの顔ばせは。それとも見えぬ衰へを。誰白河のみづはくむ。老の姿ぞ恥づかしき。ワキ「あら痛はしの御有様やな。今も執心の水を汲み。輪廻の姿見え給ふぞや。早々浮び給へ。シテ「我いにしへは舞女の譽れ世に勝れ。其罪深き故により。今も苦しみを三つ瀬河に。熱鐵の桶を荷なひ。猛火の釣瓶を提げて此水を汲む。其水湯となつて。我身を燒く事隙もなけれども。此程は御僧の値遇に引かれて。釣瓶はあれども猛火はなし。ワキ「さらば因果の水を汲み。其執心を振り捨てゝ。とく〳〵浮び給ふべし。シテ「いで〳〵さらば御僧の爲め。此かけ水を汲み乾さば。罪も

さよどころも衣を云ふ。　さよみみて作りし玉だすきを繰くると云ひかけたり。

影白河の　天上の月が釣瓶の水に影落ちて釣瓶に影をうつしたるなり。後を月やのぼるらん　うつりたる月影が釣瓶と共に又引きあげらるゝなり。

殘星の鼎に云々　古人の詩句なるべし。殘星は夜明に消え殘る星を云ふ。其時刻に起きて北の谷の水を鼎に汲み入れ茶を煮るの意。

後夜の燈に云々　前の詩の下句なり。曉の四時に起きて南の山の柴を折り來り圓爐に焚きつくるを云ふ。

水は水より出で、云々　荀子曰、青出二於藍一而青二於藍一。氷水爲レ之而寒二於水一。とあるを引く。其元の色は藍より出でたれども其元の色よりも青く。氷は水の凝りて爲れるものなれども。元の水よりも寒きものなり。こゝは迷ある前世の身なれども。悟らば元の身にも歸りて成佛せらるゝを云ふなり。

翡翠のかづら　翡翠と云ふ鳥の羽を結ひたる髪の飾を云ふ。月の桂の肩　月の形の眉を云ふ。霜降りて　白毛になる事。土水の藻屑　土と水と交りたる藻のくづを云ふ。

や淺くなるべきと。ワキ「思ひも深き小夜衣の。袂の露の玉だすき。シテ「影白河の月の夜に。ワキ「底澄む水を。シテ「いざ汲まん。地「釣瓶の水に影落ちて。袂を月や上るらん。

地ノリ「ろれ殘星の鼎には北溪の水を汲み。後夜の燈には南嶺の柴を焚く。シテサシ「ろれ氷は水より出で、水よりも寒く。地「青き事藍より出で、藍より深し。本の憂き身の報いならば。今の苦しみ去りもせで。シテ「いや增さりぬる思ひの色。紅の涙に身を焦がす。ノセ「釣瓶の懸縄くり返し。憂きいにしへも。紅花の春のあした。紅葉の秋の夕暮も。一日の夢と早なりぬ。紅顏の粧ひ。舞女のほまれもいとせめて。さも美しき紅顏の。翡翠のかづら花しをれ。桂の眉も霜降りて。水にうつる面影。老粹かげ沈んで。繰りに見にし黑髮は。土水の藻屑驛芥。變はりける身の有樣ぞ悲しき。實にや有りし世を。思ひ出づればなつかし

波かけし　藻の花に波を見なして歌ふよむものなれば。白河の波より藤原の藻の字をかけて云へり。

今一節と有りしかば　興詞を一曲の破舞を所望せられしを云ふ。

陸奥の希婦の細布云々　古歌に「陸奥のけふのはそぬのはど狹み胸合ひがたき戀もするかな」とあるを引く。けふは細名にて其地より細布と云ふ名產を出だすなり。幅狹き布なれば衣を作りても胸の合はぬよしを云へり。こゝは舞を舞ふ事が老粹の我胸を落ち合はぬよしをかけて引きたり。

露うち拂ひ　舞衣の袖をツと云ふものあり。袖の端を絲ひて垂らしたる結を云へり。狩衣などを見て知るべし。

昔の歸れと願ふ心を。　彼のかへる事をかけて云ふ。

芦田鶴　むもの　なれば云ふ。常に芦邊に住む鶴の事。

根をこそ絶ゆれ　浮草の根は土に附かずして水上に浮ぶものなれば云ふ。死したる身なれども水に運びて參らする故に。次の句に「浮かべて」と云ひ。上の浮草の文字にも運ぶ意なるべし。

水と云ふ　上の「運ぶ」の句にも對照せり。又「運ぶ」の句にも對照せり。

や。其白河の波かけし。シテ「藤原の興範の。地「其いにしへの白拍子。今一節と有りしかば。昔の花の袖。今更色も麻衣。短き袖を返し得ぬ。心ぞつらき陸奥の。希婦か細布胸合はず。何とか白拍子。其面影の有るべき。よし〳〵それとても。昔し手馴れし舞なれば。舞はでも今は叶ふまじと。シテ「興範しきりに宣へば。地「あさましながら麻の袖。露うち拂ひ舞ひ出だす。シテ「檜垣の女の。地「身の果を。

シテ「水結ぶ釣瓶の縄のくり返し。地「昔に歸れ白河の波。白河の。

シテ「水のあはれを知る故に。是まで顯はれ出でたるなり。地「運ぶ蘆田鶴の根をこそ絶ゆれ浮草の。水は運びて參らする。罪を浮かべてたび給へ。

シテ　東岸居士
ワキ　旅人
[illegible]ハ　京都

東岸居士の傳と一遍上人縁起とを比べ讀まば此作の起りハ知らるべし。傳に曰く。東岸居士ハ自然居士の弟子なり。名ハ玄壽。字ハ東岸。東山雲居寺の僧なり。少壮より志を頓宗に留む。參禪を以て業と爲す。僧衣を被ず高座に登つて說法す。或ハ羯鼓を打つて踊躍し。或ハ扇を執つて舞ふ。人詰つて剃髪せず緇衣を着ざる故を問へば卒然として曰く。もとよりの住所も無ければ出家の謂はれもなし。出家にあらざれば僧衣を被ず。髪ハ長く亂るれども獨り自ら道に入る。東岸の師を以て籌と爲して知解の座を學ふと。聞ふもの口をつゝにで首ハず。弘安六年癸未の冥寂す一。是にて吾士の人と爲りゞ知るべし。一遍上人縁起に曰く。或人法文尋ね申しけるに書きて遣はされける聖の法語に云ハく。者遇ぞ秋來れども進みがたさは出離の道。花を惜し廻月を詠めても起りやすさは輪つの妄念なり。非味の山にはい日となく頻悩の袈あつくして佛にの光り眼にあそらす。生死の海くはとこしなへに無常の風烈し生して眞如の月やどる事なし。蓮を受くるに隨つて苦に苦をりね。死に轉るに闇つて闇さよハ闇さに輝く。六道の街に迷宿ぬ所なく。四生のとばうにはをらぬ住家もなし。生死の輝髪はばぬとやいはんうつ、とやいばん。是を有りさいはんさすれ

東岸居士

元清作

ワキ詞「是は遠國方の者にて候ふ。我此程は都に上り。彼方此方を一見仕りて候ふ。又今日は清水寺へ參らばやと存じ候ふ。

シテ一聲「松をさへ。皆櫻木に散りなして。花に聲ある嵐かな。

ワキ詞「是は承り及びたる東岸居士にて渡り候ふか。扨今日は如何樣なる聽聞の御座候ふぞ。

シテ詞「事あたらしき問事かな。聽聞と云つば。萬事は皆目前の境界なれば。柳は緑花は紅あら面白の春の氣色やな。

ワキ「あら面白の答へや候ふ。扨此橋は如何なる人の懸け給ひたる橋にて候ふぞ。

シテ「是は先師自然居士の。法界無緣の功力を以て。渡し給ひし橋なれば。今又かやうに勸むるなり。

ワキ「扨々東岸西岸居士の。鄕里は何處如何なる人の。父母をはなれし御出家ぞや。

シテ「むつかしの事を問ひ給ふや。

雲となり煙と消えて空しき空に影を留むる人なし。無しといはんとすれば又恩愛離別の歎き心の内にとゞまりて腸を斷ち魂を迷ハさずといふ事なし。彼芝讐の秋に屍をば愁歎の篠に焦がせども。紅蓮大紅蓮の氷ハ解くる事あるべからず。氣盜の舍の下に眼をば慈悲の涙にゞしはせども。焦熱大焦熱の焔ハしめる事なかるべし。いたづらに歎きいたづらに悲しみて。人も迷ひ我も迷ハんよりハ。早く三界苦時の里を出でゝ程なく九品蓮臺の都に詣るべし。苦惱の叢嶽ハたやすく離れがたく。無爲の境界ハ等閑にして至る事を得ず。たま〳〵本願の強緣にあへる時。いそぎはげまずしてハ何れの生をか期すべき。他力の稱名ハ不思議の一行なり。彌陀超世の本願ハ凡夫出離の要道なり。身を忘れて侍樂し擧に任せて唱ふべしと。是にて文句の出處を辨ふべし。

清水寺　東山にあり。きよみづ

松をさへ　皆樒木に散りなして松の木までも落花もて埋めたるを云ふ。

花に聲ある　松風なれば云ふ。落花の下に聲たて

万事ハ皆目前の境界なれば　目前の卑物を見て總べて悟の體とするを云ふ。

此橋は　東白河の上流にあり。白河橋なるべし。三條

法界無緣の功力を以て云々　佛世界に緣無き衆生をして。慈普の功德を作らしめん爲めに寄

本來きたる所もなければ。出家といふべき謂もなし。出家にあらねば髪をも剃らず。衣を墨に染めもせで。唯おのづから道に入つて。ワキ「善を見ても。シテ「進まず。ワキ「智を捨てゝも。シテ「愚ならず。ワキ「折に觸れ。シテ「事に渡りて白川に。ワキ「かかれる橋は。シテ「西。ワキ「東の。地「東岸西岸の柳の。髪は長く亂るゝとも。南枝北枝の梅の花。開くる法の一筋に。渡らん爲めの橋なれば。勸めに入りつゝ。彼岸に至り給へや。

ワキ詞「又いつもの如く謠うて御聞かせ候へ。シテ詞「實に〳〵是も狂言綺語を以て。讚佛轉法輪の誠の道にも入るなれば。人の心の花の曲。いざやうたはん是とても。地「御法の舟の水馴棹。皆彼岸に至らん。シテ「面白や是も胡蝶の夢の内。地「遊び戯むれ舞ふとかや。

シテ「鈔に又申さく。あらゆる所の佛法の趣き。地「箇々圓城の道

進させて渡したる橋なればの意。　寄進をすゝむるを云ふ。　東岸西岸居士の文字を對して興ふ云へるのみ。下ふ引ける文句ふ依れるなるべし。　本朝文粹ふ。東岸西岸之柳遥遥不レ同。南枝北枝之梅開落已異。とあるを引く。　迷を去りて悟を得る事を到彼岸と云ふ。白河の向の岸ふ比して云へるなり。　白氏文集ふ約點を以て云へるなり。　歌など詠ひより出でたる文句。　興して佛法を讃美し佛道ふ入る樂樹と爲すの意。　迷の此岸を去つて悟の彼岸ふ到らしむる佛法を舟ふ喩へて云ふ。　胡蝶の夢　莊子の壯周が夢ふ胡蝶と化したる古事。　妙ふ又申さく妙ふ佛書の註釋を云ふ。　圓成　一念人毎ふ備へたる圓滿の心を云ふ。　正像　釋迦入滅後の佛法ふ正法像法末法の三時期あるを云ふ。すでふ前二期の盛時ふ過ぎ去りたるなり。　春すぎ秋來れども　天然の時節ふ進みゆけども迷の世界を出ではなる事。　迷の心なり。　罪障の山　罪の大なるを山ふ喩ふ。　日の光り　佛法の慈悲平等を

すぐに。今に絶えせぬ跡とかや。　シテサシ「但し正像すでに暮れて。末法に生を受けたり。　地「かるが故に春過ぎ秋來れども。進み難きは出離の道。　シテ「花を惜しみ月を見ても。起り易きは妄念なり。　地「罪障の山にはいつとなく。煩惱の雲あつうして。佛日の光り晴れ難く。　シテ「生死の海にはとこしなへに。　地「無明の波荒くして。眞如の月宿らず。　クセ「生を受くるに任せて。苦にくるしみを受け重ね。死に歸るに隨つて。闇きより闇きに趣く。六道の街には。迷はぬ所もなく。生死の扉には。宿らぬ住家もなし。生死の轉變をば夢とやいはん。又現とやせん。是等有りといはんとすれば。雲と上り煙と消えて後。其跡を留むべくもなし。無しといはんとすれば。又恩愛の中。心とゞまつて腸を斷ち。魂を動かさずといふ事なし。彼芝蘭の契りの袂には。骸をば愁嘆の焰に焦がせども。紅蓮大紅蓮の氷をば。終に解かす

生死の海　生死と云ふ迷の心の深きを海ふ喩ふ。　無明の波　悟られぬ心の暗きを波ふ喩ふ。　眞如の月　眞の佛道を得るを月ふ喩ふ。　大道の街　地獄。餓鬼。畜生。修羅。人。天の五世界を云ふ。　生死の扉　迷ふ心の住處なる故是等有りと云ふ。　迷の心にて顯れる人間界の現象を。實際存在するものかと思へばの意。　雲と上り云々　死後の忽ち其跡を隱して影も殘らぬの意。　芝蘭の契りの　親交深かりし友人を云ふ。　袂には云々　此世の死別の悲嘆を傳ふる事を得れども。地獄迄其友情を附り屆くる能はざるの意。紅蓮大紅蓮は氷ふて閉ぢつけらるゝ地獄の名。　骸の下ふ　最愛の夫婦を骸の下ふ云ふ。　云々　此世の愛をかはすとて。肉体の兩眼をば互ふ涙ふぬらす事あれども。彼世の地獄の苦役を救ふ能はざるの意。　焦熱大焦熱　火ふて焼かるゝ地獄の名。　しめすは火を漏はしめす事。　拙なきかゝる拙なき有爲轉變の身を持ちながら。其瞬間ふ於ても種々の罪業を作る我々なれば。如何ぞ佛の助力を願はずふ徒かるべきの意。　殺生　生類の命を殺すを云ふ。

事なし。鴛鴦の衾の下に眼をば。慈悲の涙に濕ほせども。焦熱大焦熱の焰をば。終にしめす事なし。かゝる拙なき身を持ちて。シテ「殺生偸盜邪婬は。　地「身に於て作る罪なり。　妄語綺語惡口兩舌は。口にて作る罪なり。　貪欲瞋恚愚癡は又。心に於て絶えせず。御法の船の水馴棹。皆彼岸に至らん。　ワキ詞「とてもの事に羯鼓を打つて御見せ候へ。　シテ謂「面白や松吹く風颯々として。波の皷や風のさゝら。　ワキ「所は名におふ洛陽の。　シテ「波の皷や風のさゝら。　ワキ「打ち連れ行詠めも近き白川の。くや橋の上。　シテ「男女の往來。　ワキ「貴賤上下の。　シテ「袖を連ねて玉衣の。さゝ〳〵沈み浮波の。さゝら八撥打ち連れて。百千鳥。　シテ「百千鳥囀る春は物毎に。　地「あらたまれども我ぞふり行く。　シテ「行くは白川の。橋を隔てゝ向ひは。　シテ「東岸。　地「此方は。　シテ「西岸。　地「さゞ波は。　シテ「さゝら。　地

偷盜　他人の物を盜むを云ふ。邪婬　一切の女犯を云ふ。知論　「婬欲は素生を惱ますれども、もむを繁縛するが故ふ立て、大罪と爲す」とあり。虛偽の言語を吐くを云ふ。綺語　虛飾の言語を發するを云ふ。惡口　惡物語などに綺語なりと惡口して佛者ふ惡まれたり。他人を誹謗惡口するを云ふ。兩舌　兩人にゆる舌を二枚ふ使ふを云ふ。貪欲　唯すべての物が欲しい欲しいと思へるを云ふ。瞋恚　何事ふても憤怒するを云ふ。

是を非とし非を是とし一切の事理無明ふして。云ふ諸の邪行を取り起すを云ふ。

愚痴　打ち連れさいちを打つ事を。人々打ちつれたつの洞ふかけて云ふ。

玉衣のさゐ〳〵しづみ　萬葉集ふ「玉ぎぬのさゐ〳〵しづみ家の妹ふ餘いはず來て思ひかねつも」とあり。玉ぎぬは玉を結ふしたる衣。さゐ〳〵しづみ　衣のさゐ〳〵しづみ　と鳴る音。沈みに鎭めふて。夫の遠行を妻の嘆きてさわぐ心を鎭めんとする爲めふ。夫は物を言ひ盡さで別れ來し意なり。と　沈みの文字より「玉衣をいだし。沈みの文字を浮波ふ續けたるまでなり。

浮波のさゝら　「さゝなみ」の名あれば「さゝ」の文字ふ續けたり。

八雲　百千鳥　鶯鳥の事。

百千鳥さへづる春は物ごとあらたまれども我ぞ昔りゆく　春ふなれば萬事万物あらたまれども。

生じかはるが常なるも。我身一人のみ老いゆくとの意。

いづれも〳〵云々　前の「萬事は皆目前の境界」の句ふ應ず。

南無三寶　驚きたる時ふ云ふ詞。

鼓ふ歌舞を止めて佛法を敬ふ。

「いかなれば雪や氷と隔つらん」　古今集の歌を引く。百千鳥は春鳴くすべての小鳥を云ふ。

實相の門　眞實の佛道を得る入口を云ふ。

前シテ　老翁
ツレ　藤原
後シテ　藤王權現
ツレ　天女
子方　天武天皇
ワキ　供奉の臣

國栖

元清作

「うつ波は。　シテ「皷。　地「いづれも〳〵極樂の。　歌舞の菩薩の御法とは。聞きは知らずや旅人よ。　あら面白や。

シテ「あう南無三寶。　地「實に太皷も羯皷も笛篳篥。　絃管ともに極樂の。御菩薩の遊びと聞く物を。　シテ「何と唯。　地「何と唯。雪や氷と隔つらん。萬法皆一如なる。實相の門に入らうよ。

天武天皇　大和國吉野郡ふ隱れ給ひし。山人夫婦と現じて數ひ奉り給ふ事を作れり。

天武天皇のまた大悔人奥子と申しけるころ。大友皇子ふ攻められて吉野ふ入り給ひしを。山神老人夫婦と現じて數ひ奉り給ふ事を作れり。

道々たらば　道の正しく行ハる世ならば。道の意。

位山のぼらざらめや　位山なくしてハ止むべからざるの意。

神風や　伊勢の枕詞なれどこゝハ國名を代表す。

五十鈴の古き　五十鈴宮ハ伊勢內宮の一名なれば云ふ。天照大神の御系統を受け繼ぎ給ふの意。

御裳濯川　內宮の地を流るゝ川。御系統の一流なる譬ふ用ひたり。

やごとなき　至尊なるの意。

天津日嗣　皇位を云ふ。

御伯父何某の連ふ　右大臣大中臣金連ハ大友皇子方なれば云ふ。伯父の文字は事實に違へり。

行幸と思へば　山野を踏み分くる苦しみも。國內の御巡幸と爲るべき前兆ぞと思へばの意。

字陀の御狩場　大和字陀郡ふあり。

男鹿伏すなる地　春日ハ鹿の住むなれば云ふ。

みかさがまさる　三笠山の名ふかけて雨ふ水層のまさる事を云ふ。

花曇りなれ　花盛の頃うすくもりするを云ふ。天皇の暫し苦しみ給ふを譬へたるなり。

一同一聲「思はずも雲井を出づる春の夜の。月の都の名殘かな。

ワキ「道々たらば位山。　一同「上らざらめや唯賴め。　ワキサシ「神風や五十鈴の古き末を受くる。御裳濯川の御流れ。やごとなき御方にておはします。　一同「此君と申すに御讓りとして。天津日嗣を受くべき所に。御伯父何某の連に襲はれ給ひ。都の境も遠田舍の。馴れぬ山野の草木の露。分け行く道の果までも。行幸と思へば賴もしや。　歌「身を秋山や世の中の。宇陀の御狩場よそに見て。男鹿伏すなる春日山。水層ぞまさる春雨の。音は何處ぞ吉野川。よしや暫しこそ。花曇りなれ春の夜の。月は雲井に歸るべし。賴みをかけよ玉の輿。　ワキ詞「御急ぎ候ふ程に。何處とも知らぬ山中に御着きにて候ふ。先此所に御座をなされうずるにて候ふ。

シテ詞「姥や見給へ。　ツレ詞「何事にて候ふぞ。　シテ「あの祖父が伏

月は雲井ふ晴るべし　隠れたる月は君ふ雲井ふ晴れわたるべしの意。天下を一統して皇位ふ即き給ふべきを云ふ。　真を昇けよの意　祖父がふかけて云ふ。　老翁みづから云ふ。伏屋　よろけ伏したる如き賤が屋を云ふ。　舞さい　舞みふ同じ。

釣竿をさしおきてたる間なれば云ふ。　釣より師り

御忍びみて候ふ　ひそかふ遊れおハしたるを云ふ。

屋の上に。紫雲の棚引いたるを拜まい給うたか。ツレ「實に〳〵あたりに紫雲棚引き。たゞならぬ空の氣色やな。シテ「あうたゞならぬ氣色候ふよ。昔より天子の御座所にこそ。紫雲は立つと申せ。もしも不思議に尉が住家に。ツレ「左樣の貴人やおはすらんと。シテ「舟さし寄せて我屋に歸り。ツレ「見れば不思議やされば こそ。シテ「玉の冠直衣の袖。ツレ「露霜にしをれ給へども。シテ「さすがまぎれぬ御粧ひ。地「さもやごとなき御方とは。疑ひもなく白糸の。釣竿をさし置きて。そもや如何なる御事ぞ。かほど賤しき柴の戸の。暫しが程の御座にも。なりける事よいかにせん。あら忝なの御事や。シテ詞「是はよしある御方にて御座候ふ。ツキ詞「是はよしある御方にて御座候ふが。間近き人におろはれ給ひ。是まで御忍びにて候ふ。何事も尉を賴み思し召さるゝとの御事にて候ふ。

供御　めしあがりものを云ふ。

國栖魚　國栖ふて取るゝ鮎を云ふ。國栖村ハ吉野の奥ふあり。

心若菜を云ひかけたり。　心ハ若やかなる意ふ。若菜ハ根芹の事。

菜摘の川　吉野川の川上なり。　常ふハ夏筆と書く。

紅葉を林間ふ焚き　白氏文集ふ。林間煖レ酒焚二紅葉一とある。を引く。

シテ「扨はよしある御方にて御座候ふか。幸ひ是は此尉が住にて候ふ程に。御心安く御休みあらうずるにて候ふ。ワキ「いかに尉。面目もなき申し事にて候へども。此君二三日が程供御を近づけ給はず候ふ。何にても供御にうなへ候へ。シテ「其由姥に申さうずるにて候ふ。如何に姥聞いて有るか。此二三日が程供御を近づけ給はず候ふとの御事なり。何にても供御に奉り給へ。ツレ「折節是に摘みたる根芹の候ふ。シテ「それこそ日本一の事。我等もこれに國栖魚の候ふ。是を供御に備へ申さうずるにて候ふ。ツレ「姥は餘りの忝なさに。胞うちさわぎ摘み置ける。根芹洗ひて老が身も。心若菜をそろへつゝ。供御にうなへ奉る。それよりしてゞ三吉野の。菜摘の川と申すなり。シテ「祖父も色濃き紅葉を林間に焚き。國栖川にて釣りたる鮎を燒き。同じく供御にそなへけり。地「吉野の國栖といふ事も。此時よりの事とかや。

尊菜の羹鱸魚とても　昔の優婆塞と云ふ人。官の爲め遣唐ふ此任してありけるが。秋風の吹き立つ頃故郷の尊菜羹鱸魚の味を思ひ出して。人間い我慢志ふ通ふを母るを貴に。何ぞ能く不自由しつつ數千里の地ふ官たらん。とて官を辭めて歸りし古事を用ふ。

打ち返して　嘉返しての意。

放いて　追ひ放しての意。

玉島川　肥前の國松浦郡ふあり。

其如く　神功皇后の新羅を討ちて御歸國ありし如くなり。

岩きる水ふ　萬葉集ふ「吉野川岩きる水の」などいふ歌ありて。急流の形容なり。

かいて來う　二人して舟を持て來んの意。

狂言シカ〳〵　清見原の天皇の行方を知らぬかと問ふ詞なり。

何清見ばらへ　清見原と云ふを空とぼけして清見祓へと問きちがへたる由なり。清見ばらへは神道なとする時潔川ふ行きて身を清むる作法を云ふ。清め祓へと云ふが正しきなり。さて清見原ハ天武天皇御即位の後の都ふて大和飛鳥の地ふあり。今こゝふてハさた此稱を用ふべきなれども。後を前ふ轉らして云へる例ハ外ふもあれば咎むべからず。

狂言シカ〳〵　老人ハ耳が遠いか知らぬとて高聲ふ再び問ふ詞なり。

都卒天　天竺の名。

五台山　唐土ふて佛法隆盛の寺ある山の名。

都卒天　天國の名。

唐土ふて佛法隆盛もふ二くきものがかしこ。ある者ありとの意。　勢力

尊菜の羹鱸魚とても。是にはいかで勝るべき。間近く參れ老人よ。

ワキ詞「いかに尉。供御の御殘りを尉に賜はれとの御事にて候ふ。

シテ詞「あら有り難や候ふ。さらば打ち返して賜はらうずるにて候ふ。ワキ「うも打ち返して賜はらうずるとは。何と申したる事にて有るぞ。シテ「うち返して賜はらうずると申すこそ。國栖魚の志るしにて候ふが。いかに姥。供御の殘りを尉に賜はれとの御事にて候へ。ツレ「實に此魚はいまだ生々と見えて候ふ。シテ「いざ此吉野川に放いて見う。ツレ「筋なき事な宣ひそ。放いたればとて生きかへるべきかは。シテ「いや〳〵昔もさるためしあり。神功皇后新羅を從へ給ひし占方に。玉島川の鮎を釣らせ給ふ。其如く此君も。二度都に還幸ならば。此魚もなどか生きざらんと。地「岩きる水に放せば。

さしも早瀨の瀧川に。あれ三吉野や吉瑞を。顯はす魚のおのづから。生きかへる此占方。賴もしく思し召されよ。

ワキ詞「いかに尉。追手がかゝりて候ふ。シテ詞「此方へ御任せ候へ。いかに姥。あの舟かいて來う。ツレ「心得申し候ふ。

狂言「シカ〳〵。シテ「何清見祓へ。清見祓へならば此川下へ行け。

狂言「シカ〳〵。シテ「扨は清見原とは人の名よな。あら聞きなれずの人の名や。其上此山は。都卒の內院にもたとへ。又五臺山青龍山とて。唐土までも遠く續ける吉野山。隱家多き所なるを。何處まで尋ね給ふべき。速かに歸り給へ。狂言「シカ〳〵。シテ「何と舟が怪しいとや。是は乾すぞうずとよ。狂言「シカ〳〵。シテ「何と舟をさがさうとや。獵師の身にては舟をさがされたるも家をさがされたるも同じ事ぞかし。身こそ賤しく思ふとも。此所にては翁もにつくき者ぞかし。孫も有り曾孫もあり。山々谷

狂言シカ〳〵　老人の姿ふなそれて。外を捜さうとて歌兵打ち連れ逃げゆく調あり。

ないやえい　命を超す語。

霜の舟臣の水　荷子より出でたる文句。

積善の餘慶　易より出でたる文句。

かへつて助くる　臣が却つて君を助け奉るを云ふ。宿善は前世の善根ふ。宿善の善根ふ。今世に富貴と生れしを云ふ。

蟠龍の雲井　わだかまりたる龍の雲を起して天上するを云ふ。

谷の者ども出で合ひて。あの狼籍人を打ち留め候へ。狂言「シカ〳〵。

ツレ「のう聞こし召せ追手の武士は歸りたり。シテ「今はかうよと祖父姥は。ツレ「うれしや力を。シテ「えいや。二人「えいと。地「舟引き起し尊体の。御恙なく川舟の。あひある御命。たすかり給ふこと有り難き。

地クリ「うれ君は舟臣は水。水よく舟を浮ぶとは。此忠勤のたとへなり。ワキサシ「有り難やさしも姿は山賤の。地「心は高き謀。實に貴賤には依らざりけり。ワキ「積善の餘慶限りなく。地「流れ絶えせぬ御裳濯川。濁れる世には住みがたし。子「されば君としてこそ。民をはぐくむ習ひなるに。かへつて助くる志。身は宿善のかひぞなき。地「身は宿善のかひぞなき。一葉の舟の行く末。蟠龍の雲井終にたなど。至らざらめや都路に。立ち歸りつゝ秋津

命の恩を報ぜんと　報恩し給はんの意。　老人夫婦ふ

月雪花の三吉野。月雪花の三景を備へたるの意。花ハ下文ふある故こゝふハ春ず。

琴の音ふ云々　拾遺集ふ「琴の音ふ嶺の松風かよふらし何れの琴(姫)より調へ初めけん」とあるを引く。

五節の始め　五節は十一月ふ内裏ふて舞姫の舞曲を天覧ある儀式なり。起原の事ハ公事根源ふ。

「ろも〳〵」五節の舞姫の起りハ。昔し天武天皇吉野の宮ふましまして琴を彈き給ひし時。前の峰より天女天降りて天の羽衣の袖を五度翻して。少女ども少女さびすも。庶玉を袂ふ纏きて少女さびすも。とうたひけるとかや。然るを天平五年五月ふさしく内裏ふて。五節の舞ハありける

とか」と見ゆ。

其庶玉の　庶玉を衣の飾りふ附くるを云ふ。玉もて裝ひたる琴ふつゞけたるハ玉琴と常ふ云ふ。玉琴の意なり。

勝手八所　勝手大明神の社ハ吉野郡玉垣現の少し上ふあり。今ハ山口神社と稱ふ。八所とハ此社ふ屬せる神々を云ふ。ふやふ詳ならず。

祭神ハ一座ふて愛敬神な

洲の。よしや世の中治まらば。命の恩を報ぜんと。給言肝に銘じつゝ。夫婦の老人は。忝なさに泣き居たり。ツレ「さる程に。更けしづまりて物すごし。いかにとしてか此程の。御心慰め申すべき。しかも所は月雪の。三吉野なれや花鳥の。色香により て音樂の。呂律の調べ琴の音に。嶺の松風通ひ來る。天つ少女の返す袖。五節の始め是なれや。

地「少女子が。其唐玉の琴の糸。彈かれかなづる音樂に。神々も來臨し。勝手八所此山に。木守の御前藏王とは。後シテ「王を藏すや吉野山。地「即ち姿を顯はし給ひて。天を指す手は。シテ「胎藏。地「地を又指すは。シテ「金剛寶石の上に立つて。地「一足を引つ提げ。東西南北十方世界の。虚空に飛行して。普天の下率土の内に。王威をいかでか輕んぜんと。大勢力の力を出だし。國土を改め治むる御代の。天武の聖代かしこき惠み。あらたなり

るよし緣起ふ見ゆ。なほ奥深く入りたる山上ふあり。今ハ水分神社と云ふ。

水守の御前

藤王編現ハ吉野町ふ厳りなして云へり。

藤王とハ

いま天皇を藤し申すよしふ厳りなして云へり。

天を指す手ハ

抱嚴

金剛界

胎藏界として佛法の世界の名。

金剛界と云ふ佛界の名なるを。盧石の名ふ云ひかけたり。

一足を引っ提げ

片足を上げたる姿なれバ云ふ。

十方世界

四方四隅ふ上下を加へて云ふ。

昔天の下車土の内

天下地上のこる方なくの意。

眞言を唱め

眞言を唱めて治世と祈すの意。

けるためしかな。

江嶋

えのしま

長俊作

ワキ次第「治まる折を江の島や。動かぬ國ぞ久しき。詞「そもく

是は欽明天皇に仕へ奉る臣下なり。扨も相摸の國江野と云ふ浦に。去んぬる卯月十日あまりに。不思議の奇瑞さまくあつて。海上に一つの島涌出す。即ち江野になぞらへて是を江の島と號す。島の雲上に天女顯はれ給ふ。是れ辨財天影向の地にて。福壽圓滿の靈地なれば。急ぎ見て參れとの勅に任かせ。唯今東海

道に下向仕り候ふ。道行「東路も。其方の空に行く雲の。影も涼しき鳴の海。遥けき旅を駿河なる。富士の高嶺の月影も。いく山々に移り來し。相摸の國に着きにけり。ワキ詞「日を重ねて急ぎ候ふ程に。是ははや相摸の國江の島に着きて候ふ。此浦の者を相待ち。事の由をもうかゞはゞやと存じ候ふ。

シテツレ一聲「島つ鳥。浮き海松涼し波の上。有明殘る朝ぼらけ。

ツレ「波もて立つや夏衣。二人「浦ふれ渡る沖つ風。シテサシ「うれ江の島は崑崙の奇を移し。五丈の垣重なほけれども。二人「蓬萊海の勢を傳へたる。三壺の形あらたなり。秦皇徐市を疑はゞ。りさんちよの春の風。

鳴の枕詞。

海松ハ海草の名。

江の島ハ云々以下「仙境の秘跡なり」までの文句ハ緣起のまゝなり。

こんろん住む山。

奇々妙々なる景を模して作れるの意。

なけれども

其意ふして狂ちぬを云ふ。

蓬萊海

是も唐土ふて云ふ仙人の世界。

三壺

壺を三つ据ふ置きたる形なるを云ふ。

秦の始皇ハ徐市（一名ハ徐福）と云ふ仙術を得し者を近づけたるため。幹を分くせずして崩じたり。是と次句とハ仙境の古事を引く序ふ。其ためふ誤られし人主をあやるなり。江の島ふハ緣故なし。

鹿山

始皇の墓地のある處なれバ云ふ。

なはざりふ死して俄ふ墓を

島つ島

浮き海松

鳴の海

近江の琵琶湖なり。

春風ふ吹かるゝやうの末路にあるまじの意。「ちよ」の文字にいまだ思ひ得ず。

漢帝　せいしやう　漢の武帝なるべし。武帝に齊の少の文字ふや。齊國の少翁と云ふ仙術士を用ひたり。

茂陵原　漢の文帝の墓地のある處。但し前の例と合はぬ。武帝の墓地を引き誤れるふや。武帝の茂陵と云ふ誤なり。

秋の月云々　秋月むなしく墓上を照らす如きはかなき末路をば取るまじの意。

三千界の内　生前を云ふ。

一期生の後　死後を云ふ。一度江島を信仰して參詣する人に生前死後共ふ幸福を得るの意。

そも〳〵此島に　以下「江の島と是を申すなり」までに縁起の文句を取捨して用ひたり。

戌の刻　夜の八時なり。

辰の刻　朝の八時なり。

天水紛紜たり　天も水も一つふ見えまがふの意。原文ふに「いんうんたり」とあり。氤氳の文字なるべし。

大地震動　原文ふに天地ふ作る。

天狗　天上の神佛たちを云ふ。

水火雷電　水神火神雷電神なり。

鬼魅　夜叉　羅刹　何れも鬼神の種類。

かい〳〵たる　原文ふに「かうかい〳〵たる」とあり。轟々の文字なるべし。又「かい〳〵」に磊々の文字ふもあるべし。是も雷の聲を云ふ詞なり。但し磊に「〳〵わい」なれど是に通じて用ひたる事當時の常なり。

せい〳〵　原文ふに「せいこ」とあり。強ひて言へば聲誠などの文字ふや。

雷電の事。

肩を裂くが如し　きぬを引き裂くやうふ。ばらりと昔のするを云ふ。

宕巖　高大なる岩石を云ふ。

鋼杵　あかがねの杵なり。岩を碎きて島を作るため用ふ。原文ふに「あかがねのほこ」とあり。

鉄杖　原文ふに鐵棒とあり。

梵天　帝釋　四大天王　共ふ佛法を守護する神。四天王に多聞天。持國天。增長天。廣目天を云ふ。

霧雲　くらがりたる雲なり。

天の位に至る。かゝる誓ひの海山も。猶萬代の末かけて。靡き從ふ此國の。盡きせぬ御代は有り難や。

ワキ詞「我江の島に上り。山海の致景を詠め。事の由をうかがふ所に。海人あまた來れり。如何に翁。御事は此浦の者か。シテ詞「さん候ふ。此浦の者にて候ふが。毎日此島に上り。山上山下岩窟社々を清め申す者にて候ふ。扨御身は何處よりの御參詣にて候ふぞ。ワキ「是は欽明天皇に仕へ奉る臣下なるが。此島涌出の由聞こし召され。事の子細を悉く尋ね見て參れとの宣旨に任せ。是まで勅使を下さるゝなり。委しく子細を申し候へ。シテ「扨はかたじけなくも帝よりの勅使にてましますぞや。そも〳〵此島は。欽明天皇十三年卯月十二日戌の刻より。同じく二十三日辰の刻に至るまで。江野南海湖水湊の口に雲霞暗く蔽ひて。天水紛紜たり。大地震動する事十日にあまれり。とばかり有りて天女雲上に顯はれ。童子左右に侍り。もろ〳〵の天衆龍神水火雷電。山神鬼魅夜叉羅刹雲上より磐石を下し。海底より塊砂を噴き出だす。ツレ「かい〳〵たる雷の光りせいくを萬大の間に飛ばし。シテ「霹靂帛を裂くが如し。波浪金を湧かすに似たり。ツレ「宕巖多く浮かめ出だし。夜叉鬼神島を作る。シテ「或ひは銅杵を持つて打ち碎き。ツレ「或ひは鐵杖を持つて裂き破る。シテ「又は二つの岩を押し合はせ。ツレ「又は一つの石をそばだてたり。シテ「とり〳〵に島を作り給へば。梵天帝釋四大天王。上界の天人下界の龍神。ツレ「殘らずこゝに顯はれ給ひ。二人「おのおの是を衛護し給ふ。其後靄雲をさまりて。海上に一つの島をなせり。即ち江野になぞらへて。江野島と是を申すなり。ワキ「謂を聞けば有り難や。即ち是は明君の。直なる御代のしるしを見せて。かゝる奇特を拜む事よと。いよ〳〵御影を仰ぐなり。詞

天部　弁財天女の事を云ふ。

眞如の玉　眞の道の明らかなるを玉に譬ふ。

其めぐれる事　以下「翠屏あらはれたり」まで縁起を省略して用ひたり。

「扨此島は天部の影向。又は如何なる御神の。鎮守と顯はれ給ふらん。シテ詞「中々の事此島に。各諸神まします中にも。龍口の明神は。天部と夫婦の御神にて。衆生濟度の御方便。あがめても猶餘りあり。ワキ「實に有り難やかくばかり。深き惠みの海山も。猶萬歳を呼ばふなる。シテ「聲か松吹く風の音の。ワキ「涼しき巖に寄る波も。シテ「治まる國のしるしを見せて。ワキ「豐かに住める。シテ「此時も。地「萬代の。始めと今日を祈り置きて。今行く末も此島の。誓ひは盡きぬ無量億の。樂しみの數々を。受け繼ぐ國ぞ久しき。善神は一切の福を授け。惡神は萬里の。禍をはらふ浦風も。天部の誓ひなるとかや。賴め猶隔てなき。眞如の玉も曇らじ。

ワキ詞「猶々江の島に於てめでたき子細さまぐ〳〵有るべし。殘さず申し候へ。地「そも〳〵江の島と云つば。其めぐれる事三十餘町。其高き事數十餘丈なり。シテサシ「水は山の影をふくみ。山は水の心に任せたり。地「洞門開けて翠屏顯はれたり。岩窓の奥遥かに入つて。峨々たる巖の間より。落ち來る水は西天の。無熱池の池水なるとかや。シテ「禪定無漏の仙人は。地「此地を占めて住家とし。彌陀有縁の教主は。此島に來つて生を導く。シテ「二世安樂の此島に。地「誰か賴みをかけざるべき。クセ「こゝに又。いにしへ武藏相摸の境に。鎌倉海月の間に。深澤といふ湖あり。彼湖に大蛇住めり。其身一つにして其頭五つあり。隆準の鼻胡髯の腮。眼に白日をつなぬき。身に黑雲をまつへり。然れば神武天皇より。垂仁天皇の御宇までは。十一代の帝祚を經。七百餘歳の年祀を經て。國中に滿ちて人を取る。シテ「景行天皇の御宇に至り。地「龍惡いよ〳〵盛んなれば。人皆石窟に隱れ住み。涕哭の聲限りなし。

洞中　島の區域内を云ふ。

洞門開けて　岩屋の事なるべし。

翠屏　綠色の山が屏風の如く立ちめぐれるを云ふ。

西天　極樂淨土の事。

無熱池　常に涼しくして炎暑なき池。

禪定無漏　眞の佛道を修行する意。

彌陀有縁　阿彌陀如來に縁あり て佛道に入り衆生を導く意。

二世安樂　現世も來世も幸福を得るを云。

こゝに又いにしへ　以下「國土を守護し給ふなり」までの縁起の意を取りて作れり。

鎌倉海月の間　鎌倉と海月との間の地にあり。今の群なるべし。

隆準　鼻の高き事。

胡髯　あごひげを云ふ。

眼に白日をつなぬき　眼に日光を貫きたる如く照りかがやくを云ふ。

年祀　たゞ年の事。

夫婦の語らひ　夫婦の契約を同じ。

龍口の明神　片瀬村と腰越村との間にあり。

大方の浦人いかで　かゝる神秘の物語を。普通の浦人いかでか言ふべきの意。

あらたなれ　靈驗のあらたなる事。

岐伯　支那の上古黄帝の時の名醫なり。是れ強敵の到切のみみてこゝふれ必用なき古事。

時に天部は龍に向ひ。汝が惡心を飜し。殺生をとゞめ。此國の守護神とならば。夫婦の語らひを我なすべしと。堅く誓約し給へば。龍王も是に應じつゝ。今より殺害をとゞめて。善心を思ひ龍の口の。明神となり給ひ。國土を守護し給ふなり。

ロンギ地「はや時移る夕雲。の斯かる神秘も大方の。浦人いかで木綿四手の。神の告げかや有り難や。シテ「中々なれや大君の。勅畏み勅に今う。應ずるしるしを顯はさん。夜すがらこゝに待ち給へ。地「敕に應ぜんしるしとは。そも老人は誰やらん。シテ「誰とは扨もおろかなり。我は五頭龍。地「今は又。天部の夫婦の神となりし。龍口の明神とは。老人を見るべし。今宵の月に天部の御姿。我姿をも顯はすべしと。夕波に立ちまぎれつゝ。失せ給ふこそあらたなれ。

ワキ「岐伯が絶技を先にあげ。張儀が英聲を後に馳す。是れ聽

明勇進辨財天の。地「無量無邊不可思議の功德を。さまゞ顯はしおはします。天女「月も照り添ふ如意の寶珠の。光りを誰か仰がざる。地「仰げなほ。意の如しと聞く時は。天女「今此君の。それと御影に逢ひに逢ふ。地「卞和が玉も何ならず。彼如意寶珠を君に捧げんと。光りもかゝやく御殿の扉。左右に開けて十五童子。天部の御姿顯はれたり。

地「衆生濟度の其御方便も。先づ福壽圓滿の願ひを叶へ。現壽無比樂後生清淨と。曇らぬ寶珠を君に捧げんと。勅使に是を授け給ひ。舞樂を奏し拍子を揃へ。羽袖を返して舞ひ給ふ。地「天人聖衆菩薩の舞も。かくやと思ひ白波の。立ち來る沖に雲くらがつて。はやて吹き立て逆卷く潮は。五頭龍王の出現かや。

後シテ「我昔は深澤の池に住んで。五頭龍王と顯はれ。今は國土の守護神となる。龍口の明神なり。地「聞きしに替はらぬ因位の

靈鷲　孝の舞士なり。舞財天の舞の字を呼び出すためを用ひたる古事。

雄明勇進　雄舞の意味を冠らせたる形容詞なり。

如意の寶珠　天女の飾を載きたる玉の名。

卞和が玉　卞和の名人なり。玉を鑑定することの名人なり。或時山中より玉を得て王に献りしを。石を持參せし詐偽者なりとて罪せらる。後つひに其實玉なる事あきらかに爲りたれば。王い之を和氏之璧と名づけて珍藏せられしと云ふ古事。

十五童子　天女に侍する十五人の童子。

現壽無比樂　生前に長壽にて比類なき樂しみを得るを云ふ。

後生清淨　死後に清淨世界に生るべきを云ふ。

聖衆　佛たちを云ふ。

因位の形　本のまゝの姿を云ふ。佛体を變ぜざるなり。

博文館藏版

苔むす松も　龍の身体に苔むしたる老松の生ぜしを云ふ。時代史実蓬萊等の新り給ひし大蛇の様に此形容を用ひたり。

神佛水波の隔て　神も佛も本へ一つなるが水と爲り波と爲りて形を種々に顯はす如く。或へ天女と現じ或へ龍神と現ずれども衆生を守る誓へ一つなるの意。

百千劫の　劫へ無限の年月を云ふ。

岩のかたきを　岩のかたきをふかけて云ふ。

涼みとるてふ　涼しさを身に取り入るゝの意。

とりゝゝ姿を　天女も龍神もなり。

形。シテ「頭は五頭龍。地「胡髯の腮。眼に白日をつなぬき。其身に黒雲をまつへり。苔むす松も野べ伏す巌の。峩々たる上にゐ顯はれたる。

シテ「神佛水波の隔てなり。地「神佛水波の隔てなれば。同一体の利益もさまゝゝの。辨財天部は威光を顯はし。明神もろともに百千劫の。齢を守らんと約諾堅き。岩間を傳ひ。涼み取るてふ緑の海に。飛行し給へば。磯うつ波も龍の口の。明神忽ち威を振ひ雲を吹き。嵐にかゝやく眼の光りは。天地に滿ち滿てり。其時天部は童子を伴なひ。紫雲の上に顯はれ給へば。明神立ちくる黒雲に乘じ。光りを放つて島根を廻ぐり。めぐりめぐるや暫しが程は。とりゝゝ姿を雲中に顯はし。とりゝゝ姿を雲中に顯はすも。實に有り難き影向かな。

前シテ　後シテ　女人　財天　北條時政　ワキ　ツレ　北條時政　従者　囃ハ相模

北條時政江島の神能を依りて旗の紋を得る事を作れり。出題は天平記の「むかし鎌倉草創の始め。北條の四郎時政榎の島（江島を所くも書けり）に参籠して子孫の繁昌を願りけり。三七日に當りける夜。赤き衣を着たる女房の端厳美麗なるが。忽然として時政が前に來て告げて曰く。汝が前生は箱根法師なり。大十六部の法華経を書寫して六十六箇國の霊地に奉納したりし報恩の由つて。再び此土に生まれ。家を得て日本の主と爲つて栄華に誇るべし。但し其振舞遠ふ慢あらば七代を過すべからず。我言ふと云ひすて。さしも厳島の霊地を見よと云ひすて。給ふ其姿を見れば。忽ち眼しかりつる女房の大蛇と爲つて。二十丈ばかりの大蛇。其跡を見る人中なく入りぬ。時政海に入りぬ。時政成就しぬと喜んで則ち所の大鯰を三つ落せり。所の人民を集めて。鯰を取て族の紋を押したりけり。今の三鱗形紋これなり。後年の現天の御示を遠へして住せて。法華経奉納の霊地へ人を遣はして法師を注進の時政を注師の名を養へて。奉納の時政を注師の名を養へて。俗名不思議なれ」と見はす。武力の節一の鼎を大蛇を殺め。第三の大蛇。第二の兵を殺め。第三の大蛇。

鱗形　うろこがた

作者未詳

ワキ次第「八百萬代を治むなる。弓矢の家ぞ久しき。詞「そも〳〵是は北條の四郎時政にて候ふ。彼弓矢の家に生まるゝといへども。いまだ旗の紋定まらず候ふ程に。江の島の辨財天に此事を祈り申さん爲め。唯今參詣仕り候ふ。サシ「それ弓矢は天地陰陽をかたどり。七德五行の姿なり。一同「されば神農の作りし桑の弓。怨敵破戒を滅ぼして。ワキ「國家の爲めとなすとかや。一同「又は佛法王法の。靜かなる國となる事も。一張の弓の勢。月心にあり。是ぞ眞如の槻弓の。惡魔もいかで恐れざる。ワキ詞「急ぎ候ふ程に。是は早江の島に着きて島ふ。まづ〳〵社壇に參らばやと存じ候ふ。

シテ詞「のう〳〵時政に申すべき事の候ふ。ワキ詞「不思議やな人

を殺す。開四方功を定め。第五方民を安んじ。第六方衆を和し。第七方財を豐かにするの七德あるよし左傳方云へり。五行木火土金水を云ふ。何事方も所かる理窟を附會するが當時の癖なりと知るべし。

神農　支那太古の帝王。

孔歌　身方あたなす歌を云ふ。

破戒　佛法の戒律に違ひせし罪人を云ふ。

月心方ある　弓に矢つがひて引もしぼりたる形を圓月に譬へて云ふ。

驅蒐　いかで恐れざる文句い弓の德をのべて前の「弓矢の家が久しき」とあるを受けたるなり。

以上の

御しめ縄　「かけ」と「永く」との連絡方ありけり。神前方張ある品なればなり。

神となりて顯れる方。

和光の影　神と現じて人間方光を混和する。沖の鷗も汀の千鳥も鳴く鶴も。皆和光の影方恩

家も見に以方よりも。女性一人顯はれて。我名をさして宣ふは。何といひたる事やらん。シテ「愚かの仰せ候ふや。年月歩みを運びつゝ。信心深き其故に。望みをかなへ申さん爲め。是まで顯はれ來りたり。ワキ「うもや望みを叶へんとは。如何なる人にてましますぞ。シテ「いや我名をば名乘らずとも。御身信の志し深く。ワキ「神を散ふ惠みにて。シテ「國も豐かに。二人「民榮え。地「治まれる。御代のしるしも今更に。見えて榮ふる蘆原の。國なれや降る雨も。時をたがへ以此君の。千年をかけて御注連縄。永くも代々を守るなり。

ロンギ地「實にや誓ひの數々に。御代を守りの御告とは。如何なる人におはします。シテ「今は何をか包むべき。我此島に跡を垂れ。地「潮の落つる曉は。沖の鷗に心うへ。汀の千鳥鳴く田鶴も。和光の影の數々に。かき集めたる藻鹽草。夜の汀を待ち給へ。

みを受くるの意。

藻鹽草　鹽燒く方用ふる海藻。潮邊方流れよるを掬き集めて持ち歸るものなれば。「かき集め」と云ひ「よる」とつゞけたり。

胎藏界　佛法上の經儀世界なり。

旗さし　旗さしものと云ふ方同じ。たゞ旗の事なり。

名も久方の　家の名譽も久しきの意。久方の天の枕詞なるをこゝに月方冠らせたり。

月の桂も手方取るばかり　菅公元服の夜の歌方「久方の月の桂も折るばかり家の風をも吹かせてしがな」とあり。桂を折るは仕官立身するを云ふ。古事なり。

數々の童子　天女方侍する十五童子を云ふ。

四獻　四方の獻を云ふ。

大通　肥通。三方天耳通。四方他心通。五方宿住通。六には漏盡通の六通力を云ふ。

三明　宿の惡を治むるもの。一方宿住智證明として前生智證明と。二方死後際の惡を治むるもの。三方漏盡智證明として中際の惡を治むるものを云ふ。

望みを叶へ申さんと。いふかと見えて其まゝ。社壇に入らせ給ひけり。

地「御殿しきりに鳴動して。日月光り雲晴れて。山の端出づる如くにて。顯はれ給ふ有り難さよ。

後シテ「我は是れ此島を守護し衆生を助くる。胎藏界の辨財天とは我事なり。地「晴れたる空に旗さしの。名も久方の。月の桂も手に取るばかり。弓矢の家を守りのしるしぞと。時政に旗をたび給ひ。數々の童子神樂の役々。月も照り添ふ花の姿。雪を廻らす袂かな。シテ「謹上。地「再拜。

地「かくて夜遊も時過ぎて。我世の中にあらん程。たとひ四敵の寄せ來るとも。此旗をさし上げば。我神通の身を現とて。六通三明の劍を引つ提け。無明懺悔の敵を拂はゞ。其身も息災安穩なるべし。唯信心を至すべしと。あらたに神託なし給ひ。天女

博文館版

諸シテ　後シテ　ワキ　里女　佛御前　旅僧　加賀

平清盛ふ電を得たる佛御前の幽靈かりふあらハれて。昔を語り法力を頼む春を作れり。前卷の區王と比べ見るべし。他の山々ハよそハ梢の秋深き今紅葉の盛なるを云ふ。秋色の深きを春の深きふ云ひかけたり。

白山　美濃飛騨越前ふまたがれり。白山禪定修行のためふ登山する事。

加賀の國石川郡ふありて

越の白山　古今集ふ一君が行く越方の白山知らねども雪のまふ越ふ知らざりしふ雪ふけたり。

越　加賀能登三越地名。

天照大神　天照らす神の御母伊弉冊尊を祭れる社なれば云ひかけたり。作ハ紅葉する木の名。

誓ひの色　殊ふ色濃く紅葉する誓約を守る誓ひの色。

佛の原　山月寺と云ふ寺もありと云ふ。

無明慚愧　迷の心を云ふ。

は御殿の扉をひらきて。御帳の内にぞ入り給ふ。

佛原　ほとけのはら

元清作

ワキ次第「よそは梢の秋深き。雪の白山尋ねん。」同「是は都方より出でたる僧にて候ふ。我未だ白山禪定せず候ふ程に。此秋思ひ立ち白山禪定と志して候ふ。」道行「遥々と。越の白山知らざりし。其方の雲も天照らす。神の柞の紅葉ばの。暫ひの色もいや高き。峯々早く廻り來て。參詣するぞ有り難き。」同「急ぎ候ふ程に。是は早加賀の國佛の原とやらん申し候ふ。日の暮れて候ふ程に。是なる草堂に立ち寄り。一夜を明かさばやと思ひ候ふ。」シテ詞「のうのうあれなる御僧。何とて其草堂には御泊り候ふぞ。」ワキ詞「不思議やな道もなく里もなき方より。女性一人來りつゝ。我に言葉をかけ給ふは。如何なる人にてましますぞ。」シテ「是は

五障　女ハ第一ふ梵天王と爲られず。第二ふ帝釋と爲られず。第三ふ魔王と爲られず。第四ふ轉輪聖王と爲られず。第五ふ佛身と爲られざる罪業の身なるを云ふ。

三從　幼ふしては父兄ふ從ひ。嫁しては夫ふ從ひ。老いては子ふ從ふ。之を婦人三從の道と云ふ。

涼しき道　淨土の事。地獄ハ火中の世界。淨土ハ水邊の世界なれば。

此佛の原に住む女にて候ふ。時もこそあれ今宵しも。此草堂に御泊りこそ。有り難き機緣にてましませ。今日は思ふ日に當れり。御經を讀み佛事をなしてたび給へ。さなきだに五障三從の此身なれば。迷ひの雲も晴れ難き。心の水の濁りを澄まして。涼しき道に引導し給へ。」ワキ「御經を讀み佛事をなせと承る。それこそ出家の望みなれ。扨々吊らひ申すべき。亡者は誰にてましますぞ。」シテ「さらば其名を顯はすべし。いにしへ佛御前と申し白拍子は。此國より出でし人なり。都に上り舞女のほまれ世に勝れ給ひしが。後には故郷なればとて。此國に歸り。終にここにて空しくなる。跡のしるしも此草堂の。露と消えにし其跡なり。」ワキ「不思議や扨はいにしへの。其名に聞こえし佛御前の。亡き跡までも名をとめて。」シテ「佛の原といふ名所も。昔をとゞむる名殘なれば。」ワキ「今吊らふも疑ひなき。成佛の緣ある其人

一佛成道　觀見法界草木國土悉皆成佛　一佛成道の悟りの身を以て佛法界を見る時は。非情の草木山川までも成佛せざるものをしとの意。

野もせにすだく　野原一面に鳴きわたるの意。

聲佛事　聲佛の事。

佛刀自　刀自は女の尊稱。

區顏　ふとやかさる容顏を云ふ。

の。シテ「名も賴もしや一佛成道。ワキ「觀見法界。シテ「草木國土。二人「悉皆成佛と聞く時は。地「佛の原の草木まで。皆成佛は疑はず。有り難や折からの。野もせにすだく虫の音までも。聲佛事をやなしぬらん。山風も夜嵐も。聲澄み渡る此原の。草木も心あるやらん。

ワキ詞「猶々佛御前の御事委しく御物語り候へ。地クリ「昔し平相國の御時。妓王妓女佛刀自とて。溫顏舞曲花めきて。世上に名を得し遊女有りしに。シテサシ「始めは妓王を召し置かれて。遊舞の寵愛甚しくて。地「色香を飾る玉衣の。袖の白露起き臥しの。御簾の内を立ち去らで。さながら宮女の如くなりしに。シテ「思はざるに折を得て。地「佛御前を召されしより。御心うつりていつしかに。妓王は出だされ參らせて。シテ「世を秋風の音更けて。地「涙の雨もをやみもせず。クセ「實にや思ふ事。叶はねばこそ浮

來たるこそ歎へなれ　一虛一實の惡魔ふ逢ひしが身の教訓となりて。早く感悟するを得しの意。

西山　西方淨土の事ふかけて云ふ。京都の西山すなわち嵯峨野の地なり。

そもかゝる心持つ人かや　浮世を悟りて西山ふ入り來り住めども。猶佛御前ふ寵を奪はれし故ぞと恨めしく思ひ邑たるふ。扨は出家して我等と志を合はさんとする人ふやと。始めて驚けるなり。

岩代の松　紀伊の名所なり。高葉集ふ「岩代の濱松が枝を引き結び」とあるふよりて。松の葉結ぶ露の結ぶと詠の結ぶ事ふ云ひかけたり。

世なれ。我は本來有色の。花一時の盛なれば。散るを何と恨みんや。嵐は吹けども。松は本來常盤なり。いつ歎きいつ驚かんや。浮世ぞと。思へばかゝる折節の。來たるこそ歎へなれ。しかも迷ひを照らすなる。シテ「彌陀の御國も其方ぞと。地「賴みをかけて西山や。浮世の嵯峨の奥深き。草の庵に隱家の。隱れて住むと思ひしに。思ひの外なる佛御前の。樣を替へ來りたり。こはそもさるにても。かく捨つる身と爲りぬれど。猶も御身の恨めしさの。執心は殘るに。ろもかゝる心持つ人かや。今こそ誠の。佛にてましませとて。妓王は手を合はせ。感涙を流すばかりなり。

ロンギ地「昔語りは扨置きぬ。扨今跡を吊ひ給ふ。御身如何なる人やらん。シテ「我は誰とか岩代の。松の葉結ぶ露の身の。行方を何と問ひ給ふ。地「行方いづくと白雪の。跡を見よとは此原の。

博文館藏板

シテ「草の菴はこゝなれや。地「露の身を置く。シテ「草堂の。地「主は佛よといひ捨てゝ。立ち去る影は草衣。尾花が袖の露分け。草堂の内に入りにけり。

ワキ歌「松風寒き此原の。草の假寐のとことはに。御法をなして夜もすがら。彼跡吊ふぞ有り難き。

後シテ「あら有り難の御經やな。早明方にもなるやらん。遠寺の鐘も幽に響き。月落ちかゝる山かづらの。嵐烈しき假寐の床に。夢ばし覺まし給ふなよ。ワキ「不思議やな佛の原の草枕に。遊女の影の見え給ふは。如何樣きゝつる佛御前の。幽靈にてゞましますらん。シテ詞「恥づかしながらいにしへの。佛といはれし名を便にて。輪廻の姿も歌舞をなす。ワキ「極樂世界の御法の聲。シテ「佛事をなすや。ワキ「此原の。シテ「佛の舞の妙なる袖。地「草木も靡く氣色かな。

尾花が袖　尾花の細くを袖に見なして云へり。

とことはに　長くの意。

山かづら　峴の雲の事なりと歌書の古註に云へり。

輪廻の姿　迷の離れぬに依りて六道などの世界をめぐりつゝある事。

シテ「ひとり猶佛の御名を尋ね見ん。地「おの〳〵歸る法の場入の。シテ「法の教へも幾程の世ぞや。地「前佛は過ぎぬ。シテ「後佛はいまだなり。地「夢の中間は。シテ「此世の内ぞや。地「鐘も響き。シテ「鳥も音を鳴く。地「夜半の内なる夢幻の。一睡の内ぞ佛も有るまじ。まして人間も。シテ「嵐吹く雲水の。地「嵐吹く雲水の。天に浮かべる波の。一滴の露の始めをば。何とか返す舞の袖。一歩擧げざる先をこそ。佛の舞とはいふべけれと。うたひ捨てゝ失せにけりや。うたひ捨てゝ失せにけり。

ひとりなほ佛の御名を尋ね見ん　各かへる法の場人古歌なるべし。智顗寺ふ集まりたる人々は皆かへりゆけど。我一人は六字の名號の奥義までも尋ねて成佛を得んとの意。

前佛は過ぎぬ　釋迦如來の時は過ぎたるを云ふ。

後佛はいまだなる　彌勒佛の出世は未だなるを云ふ。

夢の中間　迷を現〳〵佛なき今の時を云ふ。

天に浮かべる云々　古今集序文の序ふ。浮レ天之波起ニ於一滴之露一とあるを引く。大海も其もとを尋ぬれば一滴の露ふて。遂ふ無ふ歸するの意なり。

一歩擧げざる先をこそ　雖の足をあぐる事ふかけて。一念不生を佛心と爲すと禪家ふ云へる意を歌へるなり。

籠祇王

ろうぎわう

作者未詳

シテ　祇王
ツレ　祇者
ワキ　父
ワキツレ　粉河何某
ハ　紀伊

ワキ詞「是は紀州粉河の何某にて候ふ。扨も某隣郷の何某と口論し。生捕分取數を知らず候ふ。其中にいまだ若き者を一人籠者させ。所の者に預け番を守らせ候ふ處に。過ぎし夜囚人を逃がさせ。入牢さする事。牢の文字を不吉なりとして書を替ふること。籠の曲の習なり。入牢の囚人を云ふ。

祇王　と云ふ白拍子入獄中の父を尋ねて逢ひたる物語を作れり。前の佛原ふ關係ある祇王ふ非ず。白拍子ふ此くの如き名多かりしなり。

朝もよい　紀伊の枕詞。

遊女　白拍子を云ふ。

花の都　身の花美を極むる意ゝかけて云ふ。

さなもたゝふ　老人の身なれば入牢の苦しみを受けずしても、の意。

別れの近き　死別の近からむを云ふ。

春の霞と立ち出でゝ　春霞の立つと共ゝ我身も出立しての意。

淀の渡りゝ　山城の淀川を舟ゝて下らんためなり。

宇渡野　川下の地。

して候ふ間。彼番の者を又籠者させて候ふ。いよ〳〵番の事かたく申し付けばやと存じ候ふ。いかに誰か有る。籠の番を堅く仕り候へ。又囚人の所縁などゝて尋ね來り候ふとも。對面は堅く禁制にて有るぞ。其由心得候へ。

シテトモ次第　旅立つ雲の朝もよい。紀の路にいざや急がん。

サシ「是は此程都に住む。祇王と申す女にてさむらふ。我遊女の道をたしなみ。色香にうつる花鳥の。聲の綾織る旗薄の。いとめづらかに初月の。雲井にも名を殘す身の。花の都の住居かな。

詞「又鄙の住居に年よりたる父を持ちて候ふが。籠者とやらん聞こゝ候ふほどに。老の親とてさなきだに。別れの近き世の中に。いかなる罪にか沈み給はん。急ぎ下りて今一目見まゐらせばやと思ひづゝ。二人「春の霞と立ち出でゝ。都の月の夜深きに。淀の渡りに立ち出づる。歌「散りにし花の山風の。宇渡野の蘆の露

紫野交野　河内の國なり。

交野の御野　新古今集後撰の歌ゝ「又やみん交野の御野の櫻狩花の雪ちる春の曙」とあるを引く。

狩衣ゝ　狩衣ゝ降り來ぬ同じくゝ　ぬるとも陰に宿らん。月住吉や西の海。

（花の陰ゝやどらん）の歌を引く。但し結句ゝ「かくれん」とあり。

住吉　攝津なり。紫野交野より以前ゝ過ぎ來し地。

信田　和泉なり。其の名所として歌ゝ常ゝ用ふ。

下萌　地の下ゝ芽の出で初めしを云ふ。

紛河の里　郡賀郡ゝあり。三十三番の札所粉河寺のある處。

分けて。旅衣。禁野の雪をたどりゆく。交野の御野の櫻狩。雨は降り來ぬ同じくは。ぬるとも陰に宿らん。月住吉や西の海。遥かに見えて沖つ波。互にかゝる夕雲の。和泉の國に着きしかば。信田の森の葛の葉も。まだ下萌は春草の。野山を分けて紀の國や。紛河の里に着きにけり。

シテ詞「やう〳〵急ぎ候ふ程に。是ははや粉河の里に着きて候ふ。此所にて父御の御行方を尋ね候へ。トモ「畏つて候ふ。いかに此内へ案内申し候ふ。是に渡り候ふ人は。都に隱れなき祇王と申す白拍子にて渡り候ふが。父御に對面の爲め御下りにて候ふ。よきやうに御申し有つて引き合はされて給はり候へ。

ワキ詞「某に對面と仰せ候ふ人は何くに渡り候ふぞ。シテ詞「耻づかしながら妾にて候ふ。ワキ「最前も申す如く。總じて囚人の所縁に對面は堅く禁制にて候へども。祇王御前の御事は。天下に

隱れもなき舞の上手にて候ふ程に。舞を舞うて御見せ候はゞ。大法を破つて父御に引き合はせ申さうずるにて候ふ。シテ「何と妾に舞を舞へと候ふや。ワキ「中々の事。シテ「悲しやな親子の中の對面なるに。舞はじといはゞ逢ふ事かなはじ。父に逢はせて賜はらゞ。其後舞を舞ひ候はん。ワキ「仰せ尤にて候ふ。さあらば先々引き合はせ申さうずるにて候ふ。其後舞を舞うて御見せ候へ。いかに誰か有る。此人を籠者のものに引き合はせ候へ。ツレ「籠鳥雲を戀ひ歸雁は友を失ふ心。それは鳥類にこそ聞け。人間に於てかくばかり。故郷を去り友を忍びて。唯前生の因果を思ふのみなり。南無や大慈大悲の觀世音。福壽海無量の誓ひのまゝに。善所に迎へ取り給へ。

前生の因果　前世みて作りし罪の原因ゆ依り。現世みて此〳〵の如き結果を受くるを云ふ。

南無や大慈大悲の　觀音の誓を新るなり。

シテ詞「いかに父御前。祇王こそ是まで參りて候へ。かゝる御有様を見參らすれば。目も暗れ心亂れさむらふ。ツレ詞「あらふしきや。御身は何とて是まで來りたるぞ。シテ「さん候ふ父御の御祈りの爲め。此程清水にこもりて候へば。何事やらん父御前は科を蒙り。籠者とやらん聞こえ候ふ程に。かちはだしにて是まで參りて候ふ。扨御科は何事にて候ふぞ。ツレ「げに〳〵不審尤なり。委しく語つて聞かせ候ふべし聞き候へ。シテ「さらば御物語り候へ。

清水みこもりて　京師の清水寺ゆ參籠せしを云ふ。是も同じ觀音なり。

此度の本人の意。　今度の軍の主謀者

ツレ詞「さても當國に合戰あつて。敵味方討ち討たるゝ事數を知らず。其中に生捕の者を此籠に入れ置かれ。所の者に預け番を守らせられ候ふ處に。某番に當り候ふ時。囚人を見れば未だ若き人なり。しかも此度の本人にても非ず。痛はしや人の上だに悲しきに。さてはは親の歎き給ふらんと。思へば人を助くるは。すなはち菩薩の行なれば。たとひ我等は罪に逢ふとも。助けばやと思ふ一念に。籠を開き夜にまぎれ落とす。されば囚人を失

不覺の涙　未練の涙と云ふ意の事。

慈眼視衆生　眼書が慈悲の眼ふて一切衆生を見わたすの意。

後生菩提　死後の成佛を云ふ。

ひたる科のがれがたく。かくあさましき有樣なり。ことさら今日の夕べとやらん。命の限りと聞こえし處に。うれしくも來り給ふものかな。亡き跡と云ひ最期と云ひ。餘り便りも無かりつるに。御身の來り給ふを見て。二世安樂の思ひなり去りながら。不覺の涙こぼれ候ふ。シテ詞「さては人を助け給ふ御科ならば。却つて御よろこびよや爲り候ふべき。慈眼視衆生の力を賴み。觀世音を念じ給ふべし。ツレ「げよ〳〵それは去る事なれども。今は命も惜しからず。唯願はしきは後生菩提。シテ「げよ〳〵是も御身の爲めには。御理とは思へども。我ばかりなる親子の中。ツレ「此一世こそ限りなるを。シテ「此世をだにも添ひ果てもせで。ツレ「せめては生老病死の內。シテ「病苦をも受けず。ツレ「死をも待たで。二人「劍の先にかゝらん事。いかなる前世の報いぞや。地「のがれ得ぬ。報いを我に老の身の。又この後はいつの世の。親子と爲りて生るべき。是に付けても唯今の。親と子の。一世の緣ぞ限りなる。さりとては我賴む。大慈大悲の觀世音。後の世助けおはしませ。ワキ詞「いかに祇王御前。折節これに烏帽子の候ふ。是を着て疾う〳〵舞を御舞ひ候へ。シテ詞「さん候ふ父の有樣を見るに付けて。涙にかきくれ更に舞ふべき便りなし。然るべくは御ゆるし候へ。ワキ「不思議の事を仰せ候ふものかな。扨は我等を御たばかり候ふな。ツレ「いかに祇王何事を申すぞ。ワキ「いや最前これなる女性。おことゝ對面ありたきよし仰せられし程よ。承り及びたる一曲をも見申さん爲めに。大法を破り囚人に對面させて候ふ處に。對面あつて後舞をまはうずるよし仰せられ候ひて。今は舞ふまじきよし仰せ候ふ。おことは何と思ひ候ふぞ。ツレ「尤の御理にて候ふ。いかに祇王。何とて辭し申すぞ。もとよ

歌舞の菩提の妙文たるべし　今日発終ふ舞ふ一曲は。極楽なる歌舞菩提の歌曲の文句ふも書るべしの意。

終ふ行く道とはかねて語葉平の歌ふ「終ふゆく道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを」とあるを引く。終ふゆく道は死せる事を云ふなり。　伊勢物

り此一曲は。父が教へし事なれば。今日の今はの光陰よも。歌舞の菩薩の妙文たるべし。はや〳〵謡ひ給ふべし。シテ「此上はとかく申す〻由ぞなき。舞はずは我身の科と云ひ。又は父御の仰せなれば。涙を抑さへ心を靜め。ツレ「父も昔を思ひ出の。涙ながらに拍子をすゝめ。シテ「曲を出だして呂律の一つの。ツレ「悲しみの聲もろともに。シテ「是ぞ限りの親子の中。ツレ「名殘を見せて。シテ「花の袖。地次第「雪をめぐらす袂より。涙の雨や増さるらん。シテ「何事も世の有樣の夢なれや。地「うつゝなき今の氣色かな。

地「げにや終に行く。道とはかねて知りながら。昨日今日とは白雲の。朝に立ち夕べに消ゆる。シテサシ「電光朝露石の火の地「光りの内外に遊ぶなる。胡蝶の舞の花の袖。散りがたになる親と子の。何か謡ひて奏づらん。クセ「げにや世の中に。獨とゞ

薄を契りへひかけたり。　嶺の衣の薄きと云長柄の橋　摂津ふあり。ながらへの詞を呼び出ず爲めふ置く。

世ふ住めば愛さこうまされ三吉野の山のかけ道踏みならし（てん）古今集の歌を引く。かけ道へ訳へはるかゲの道を云ふ。吉野の奥ふ遁世して入らんとの意。風月ふ吟じ月ふ詠じて遊ぶ事。

延年　舞曲の名。

狂言綺語　戯むれ飾りたる言語ふて。即ち歌曲の文句を云ふ。

一てんへ一轉ふや。　右の狂言綺語が佛乘の因縁美の因縁と爲るの意。白氏文集より出でし文句なり。

摂津の國の何への事か法ならぬ遊び戯むれ（まてとこう聞け）女郎花物語ふある歌なり。謡ひ戯むるゝまですべての事が佛法の外へ出でずとの意。

堅佛事　經を讀み歌を謡ひなどして佛事をする事。

くらき闇を　冥途ふて迷ふ時の事。

まる者あらば。若し我かはと。身をや頼まんと詠ぜしも。げに理や我ながら。唯今別るべき。父男の亡き跡に。殘らん事も幾程の。世は空蟬の唐衣。薄き契りは親と子の。一世に限る夢の内を。思へたゞ朝顔の。日影待つ間の花盛。シテ「いつまでか長柄の橋のながらへて。地「かゝる浮世を渡らんと。思ふに付けても。恨めしきは命なり。げにや世に住めば。憂きこそまされ三吉野の。岩のかけ道踏み馴らし。行く水の哀れ〳〵なる。父の事ぞ悲しき。つら〳〵無常を觀ずるに。飛花落葉の風の前。風月延年の遊樂も。狂言綺語の一てん。讃佛乘の因縁まで。津の國の。何はの事か法ならぬ。遊び戯むれ數々の。シテ「聲佛事を爲してこそ。地「親の行くべき終の道。くらき闇を燈の。光りの影も明らけき。眞如安樂の彼國に。迎へ給へとさながらに。歌舞の菩薩の光陰と。ねんごろに念願し。是までなりや今ははや。

彼國み光陰と日の事ふれ歩ず。極樂淨土の事。光明と云ふ語の意。時

種々諸惡趣の苦惱（即ち法華經普門品）の文句み。種々諸惡趣。地獄畜生。生老病死苦。以漸悉令滅とある事を略して云ふ。觀音の力ふて種種の苦界を免かれしめんとの意なり。

烏帽子直垂ぬぎすてゝ。さめ〳〵と泣き居たり。又さめ〳〵と泣き居たり。

シテ詞「あら悲しや妾を失ひ父を助けて賜はり候へ。ワキ詞「筋なき事を申すものかな。たとひ男子の身なりとも。人の命に代はるべからず。しかも女性の御身として。思ひもよらぬ事にて候ふ。ッレ「いかに祇王何事を歎くぞ。父が最期を勸むべきに。いたづらに歎く事あるべからず。是なる數珠は黑谷の。法然上人より賜はりたる御數珠。是をおことに與ふるなり。父が跡をも吊らひの。念佛申し給ふべし。シテ「又是なる御經は。此程父の御爲めに。身を放さず讀みたる御經なり。種々諸惡趣の誓ひのまゝに。必ず成佛なり給はゞ。同じ蓮に參り逢ふべしと。地「數珠と御經を取りかはし。南無や大悲の觀世音。慈悲の眼の光りにて。臨終を守り給へや。

或遭王難苦　あるひは王命ふ背き難苦を受けての意。既ふ刑罰の場ふ臨み欲養終形臨みて命を終らんとする時の意。念彼觀音力　かの觀音を一心ふ念じて其功力を頼まゞの意。刀尋段々壞　斬らんとする刀はばら〳〵ふ折れて難を免かるべしとの意。

ワキ詞「あまりに時刻も移り行けば。かの老人の首打たんと。太刀振りあぐれば。こは如何に。御經の光り眼にふさがり。取り落とせしる太刀を見れば。二つに折れて段々と爲る。シテッレ「父も祇王も是を見て。命終らん事をも分かず。たゞ茫然とあきれ居たり。ワキ「いや〳〵何をか疑ふべき。唯今讀みつる御經の文。取り上げて見れば疑ひなく。シテッレ「或遭王難苦。ワキ「臨刑欲壽終。シテッレ「念彼觀音力。ワキ「刀尋。三人「段々壞。地「げに有り難や此文は。王難にあふとても。劍段々に折れなんの。經文は疑はず。あら有り難の御經や。

地「此上は老人よ。はや助くるぞ歸れとの。御免されにあづかれば。祇王は父を引き立てゝ。悅びの道に歸りけり。げに頼みても頼むべきは。是れ觀音の誓ひなり。

シテ　天狗
ワキ　役行者
山伏　大和
葛城山の大天狗を役行者の降伏する事を作れり。

笛　山伏の左の名。

葛城　大和河内の堺にある山。
高間　葛城の内なり。

なべて問ふべき旅にやい　道を尋ねて分けゆく通例の歌にい非ずの意。道も無き絶頂に登る事なれば云ふ。

うみかくした　山伏の事。第二巻葛城にもあり。比べ見るべし。

登々山路何時雲。決々溪泉到處聞。風動三峯一山犬吠。（一家）松火隔二秋雲一。三体詩の詩を引けり。登々に高く登りゆく形容。決々に溢れ流るゝ形容。松火に山人の焚す松明の火が雲を照らして遠方に見ゆるの意。ものすごきさまなり。

観念　心をすまして佛道を念ずる事。

三密　一に身密。二に語密。三に意密の三業を明かにするを月に譬へて云ふ。

うゝ　うそつく事。

法性の月　佛心を月に譬へて云ふ。

りうせいのかうしやうにて　「劫塵の高聳にて」の文字にや。

葛城天狗

かづらきてんぐ

長俊作

ワキ次第「法の爲めにと篠懸は。山又山を分けうよ。」謂「是は峯入り先達の山伏にて候ふ。道行」葛城や。高間の嶺の朝ぼらけ。花かと見えて白雲の。行方はるけき岨づたひ。なべて問ふべき旅にやは。

シテ「登々たる山路いづれの時か盡きん。決々たる溪泉到る所に聞く。風葉聲を動かして山犬吠ふ。いづれの松火秋雲を隔つ。あら心すごの山洞やな。

ワキ詞「我觀念の眼の前には。三密の月すみやかにして。寥々と有る折節に。忽然と來る者を見れば。さも不思議なる人体なり。

シテ詞「御身いくばくの法力を得。かばかりの慢心を具足せし。

其姿念はいかならん。

ワキ「うゝ扨は心得たり。我行力を妨げんとて。魔軍の靈鬼來りたるな。愚かなりとよ法性の。月は曇らぬ山陰に。顯はれ出づる名を名乗れ。

シテ「我は此山陰に年經て住める。大天狗の眷屬なり。まづ此由を師匠に申さん。其程はこゝに待ち給へと。

地「夕べの雲も冷ましく。嵐はげしき高嶺よりり。らうせいのかうしやうにて。歸れといへば谷嶺も。響き渡れる山彦の。呼べば答へて失せにけり。

地「山河草木震動し。風は木を折つて磐石を崩す天狗だふしに。心も亂るゝばかりなり。

地「不思議や高嶺に吹き亂す。嵐木枯うづまくと見えしが。顯はれ出でたる大天狗の。嘴足劔の如くにて。兩眼日月に異ならず。

ワキ「旋陀摩訶嚕遮那。娑婆多耶吽多羅他漢滿。せんだまかろしゃ

役の行者　文武天皇の御時高嶺山を開きし行者。

優婆塞　俗体の佛者を云ふ。

伎樂童子　伎樂に唐樂の行れし前ふ百濟より渡りし音樂の名。其音樂者として行者ふ仕ふる童子を云ふ。

約諾堅き　岩のかたきを云ひかけたり。

やなうはたやうん。

地「行者の加持力隙もなく。揉みかけ責めかけ祈り給へば。其時岩屋は鳴動して。大石左右へ開くと見にしが。おの〳〵眷屬二行に座して。役の行者は顯はれたり。

行者「汝知らずや我は是れ。今末の世に至るまで。佛法を守護し衆生を守る。開山役の優婆塞なり。

地「大天狗は是を見て。驚き高嶺に登らんとするを。伎樂童子は追つ詰め給ひ。散々に打ち伏せ苦を見せ給へば。梢にすがり遁かの谷に下りけるを。行者「行者は御杖を取り直し。地「汝知らずや神國たり。など佛法に妨げをなしゝと。怒り給へば今より後は。佛法を守護神となるべしと。約諾堅き岩根を翔り。翔り行けば。優婆塞は眷屬を伴なひ給ひて。又巖窟にぞ入り給ふ。

前シテ　漁翁
後シテ　海人少女
ツレ　龍神
ワキ　天女
ワキツレ　早鞆明神
ワキハ　長門國
ツレ　神職

和布刈　めかり

作者未詳

早鞆明神ふて行れし和布刈の神事の事を作れり。諸國巡人談ふ「門司鞆早鞆明神の宮前ハ海なり。これふ石の階あり。常ふ二十階ほどハ水中ふ見ヘて其先ハ知ず。毎年十二月晦日の子過丑の刻の間ふ。社人宮殿の簾紐を解て海中ふ入る。其時潮を一鍵刈り左右へ風と開て石階をくだりて海底ふ雷て、右の和布を一鍵刈りて二鍵刈れて。此時ハ潮ふ漲る、鞆あり。若し候つて鞆るなり。海上かゝり舟の火ことゝく之を消すなり。その刻限の前半時ばかり。海底ふ大きく立ちて海あらし。海底ふ入らんずると思ふ頃しばらく浪しづまりて。又前の如く半時が程の海あるゝなり。これを和布刈の神事と云ふ。當社ハ龍神の屬ふして。神功皇后三韓退治の時。干珠滿珠を持ち來りて舟を守護し給ふなり。其頃皇后はらませ給ふなれ。軍の中ふ降誕あらせ給ふ。如何ならんと煩ハせ給ふ。此神和布を献じすゝめ給ふ。時朝の三年を經て征伏し給ひ。時筑前の稲崎ふて御降誕ありける。應神天皇これなり」とある。依りて其式と由來とを參考すべし。

月ぎきせぬ御代　神祭月と云ひかけたり。十二月定式の神事の絶ずに行ハるゝよしなり。

ワキ次第「今日早鞆の神祭。盡きせぬ御代ぞめでたき。詞「うもそも是は長門の國早鞆の明神に仕へ申す神職の者なり。扨も當社に於て御祭さま〳〵御座候ふ中にも。十二月晦日の御神事をば。和布刈の御神事と申し候ふ。今夜寅の時に至つて。龍神潮を守護し。波四方に退いて平々たり。其時神主海中に入つて。水底の和布を刈り神前に供へ申し候ふ。殊に當年は不思議の奇瑞御座候ふ間。いよ〳〵信心を致し。御神事を執り行はゞやと存じ候ふ。サシ「有り難や今日早鞆の神の祭。年の極めの御祭と云つば。又新王の年の始めを。祝ふ心は君が爲め。歌「春の野に出でて摘む若菜。生ひ行く末の程もなく。年は暮るれど緑なる。和布刈の今日の神祭。心を致しさま〳〵に。君の惠みを祈るな

寅の時　午前四時なり。
和布かめ　海草の總名。「あらめ」「みるめ」「ひろめ」など云ふ。「め」是なり。一年の極まり盡くる日を云ふ。
君がため　天皇陛下の御爲めの意。但し本歌とせる「君がため春の野に出で、若菜つむ」の御製に、「貴殿の爲め」の意ふて相對する人の尊稱なり。
生ひ立つを　一年の直ふ生ひ立つを云ふ。
年へ暮るれど　大陰暦の歳暮へ冬の極度なれば。草木の枯れ凋む中ふ御中の和布のみ緑色なるを云ふ。
久堅の　御代の久しきを云ひかけたり。こゝふてへ天の意ふ用ふ。
今日ふめぐるも　今日ふめぐりより來る年月の早きを云ひかけたり。
世界わたづみ　人間界と神宮界とを對比せり。わたづみへ海の事。
蓮葉の禮式　和布を神ふ奉る祭式の意。
みるめうきめ　和布の體測。浮きめへ海上ふ浮び居る海草を云ふ。
花も咲く　和布ふも吉瑞として花の咲くと云ふ意を。波の花さく事ふかけて云へり。
塵ふ交へる　人間界ふ形を顯へし靈殿を示し給ふ事。人間を救ふため
桴を絶ち　難船の事を云ふ。ろれは故ふ棒物して此明神に救を請ひ奉り。御利生を得るなり。
海士のしわざふ至るまで　漁業

り。

シテツレ一聲「天地の開けし御代は久堅の。神と君との御かげかな。

ツレ「今日にめぐるも早稲の。二人「共に暮れ行く年なれや。シテ

サシ「有り難やうれ秋津洲の内に於て。神所の御祭さまゝなれ

ども。二人「此早稲の神祭り。世界わたづみ隔てなくて。蓮葉の

禮奠感應の。海松和布浮和布の花も咲く。波をかざしの手向草。

塵に交はる神心。誓ひに漏るゝ方もなし。「歩みを運ぶ此神に。

いざ結緣をなさうよ。所は早稲の。ゆきゝの舟も楫を絶に。數々

の捧げ物。海士のしわざに至るまで。かひ有るべしや志し。そ

れこそ花の手向なれ。

ワキ「不思議やな夕影すぐる神の御前に。手向を捧ぐる人影は。

うもや如何なる人やらん。ツレ「是は賤しき海士少女の。數には

有らぬ憂き身なるが。手向を捧ぐるばかりなり。シテ同「我は又

繁昌を祈りて功あるなり。
れこそ花の　前ふ「花もさゝ」と云へるを受けて。其咲く花よりも。此かひある神慮を得んと希ふ願心の神物とり。散らぬ花とも云ふべき清淨美麗の手向ふへあれとの意。
漁業の罪を　魚類を殺生する罪を云ふ。
賤しき者へ　賤しき身を分相應ふ希望する心も輕小なる意。
焦がるとも　火の如く焦がれ苦しむ事。
和光の影　前ふ云へる塵ふ交へる神の光を云ふ。

博多の海　筑前なり。
引く島　同國ふあり。
春秋の雲井の雁　もとゝめえぬ誰が王章か門司の關守　新勅撰集の歌を引く。雁へ王章を持て來るやうふ云ひしたれど。其文字の形をとり春歸り秋來る雁も文字の形をとどめおかぬへ誰が文ぞとの意。
地神第四　此卷玉井ふ委しく云へり。
父々出見尊　神武天皇の御祖父君。
豐玉姫　海神の御女なり。
時至り　御出產の時ふなりたるを云ふ。

年經て住める此浦の。漁翁の罪を恐るゝ故。賤しき者は輕き身を。浮かめん爲めにて候ふなり。ワキ「中々なれや鱗までも。誓ひに漏れぬ此浦の。シテ「海士の漁火焦がるとも。二人「和光の影は曇りなく。地「明らかなれや天地の。開けし御代の如くにて。すなほなるべき人心。いやましの瑞驗。あらはれにけるぞ有り難き。

地「海原や。博多の海も程近く。汐引く島も見に渡る。早稲の友千鳥。沖の鷗も群れ立つや。春秋の。雲井の雁もとゞめ得ぬ。誰が玉の門司の關守と。讀みし心も理や。

地クリ「それ地神第四の御代。火々出見尊。豐玉姫と契りをなし。海陸の隔てなかりしに。シテサシ「其御產の時豐玉姫。尊に向ひ宣はく。地「產後に於て我姿を。あへて見給ふ事なかれと。御約諾の詔。互にかたく誓ひ給ふ。クセ「然れども時至り。さすがに

かいまみ　透見する事。垣間見の意なりとの說あり。

いとあさましと　豐玉姫が脅の違約を恨み給ふなり。長く海路の人間界と龍宮界との交通を絶ちしなり。

玉の御子を捨てつゝ　此國ゐ皇子を捨てつゝ姫は海中ゐ歸り給ふなり。御產は此國ゐての事なりしかば云ふ。

人畜類の生を背き　畜は人類。姫は龍屬(又は鯛とも)なれば。其異なる生活を互ゐ背き離てゝの意。

境をさかりゐを　彼龍宮界ゐ違かりゐを退きしを云ふ。

非想　天上界の名。

渴仰　信仰する事。

此國の　國運の長久なる意ゐ云ふ。

海藏の　海中ゐ秘藏せられしを云ふ。

人の顏ひの文字あるべき　此下ゐ「などか」の文字あるべき脫なり。

老の波　老の間なく寄せ來るを波ゐ譬へ云ふ。但しこゝは波の文字亟くして老の文字は脫し。

御氣色。いぶかしくおぼしけるかとよ。かいま見せさせ給ひしを。いとあさましと恨みかこち。長く海路の通ひを。立ち戀すさしひきの。朝暮の時はありながら。人畜類の生をそむき。境をさかりにき。シテ「然れば神代の昔より。地「此早鞆の神祭り。神慮普き誓ひなれや。上は非想の雲の上。下は下界の龍神まで。渴仰の心中。まことに深き蒼海を。陸地になして此國の。長門の通ひ隔てもなき。海藏の御寶も。意の如くなるべし。

ロンギ地「げにや心の如くにて。此結緣もさまゞの。人の顏ひの無かるべき。ツレ「今は何をか包むべき。我住む方は久方の。

地「天つ少女の雲の袖。シテ「かざしの花の手向草。地「色ころかはれ。シテ「わたつみの。地「花は波路の底よりも。龍宮の捧げもの。天地ともに渴仰の。天つ少女は雲に乘れば。翁は老の波に。か

虎嘯くや　次の「龍吟ずれば」ゐ因して。風の早く物凄き有樣を形容して云ふ。

こゆるぎの磯菜つむ云々　古今集大歌頃の歌ゐ「こよろぎの磯立ち馴れし磯菜つむ目ざしぬらすな神ゐ馴れ波」とあるを引く。「こよろぎ」も「こゆるぎ」も同じ。目ゐて磯の枕詞。磯菜は磯ゐ生ずる菜を云ふ。目ざしは女子の頭髮また短くして目を刺す程の年頃を云ふ。

くれ入り給ひけりや。かくれ入らせ給ひけり。

地「汀に神幸なり給へば。虛空に音樂松風に和して。皎月照らし異香薰ずる。龍女は波をもかざしの袖を。かへすも立ち舞ふ袂かな。天女「さる程にさる程に。地「和布刈の時至り。虎嘯くや風早鞆の。龍吟ずれば雲起り雨となり。潮も光り鳴動して。沖より龍神あらはれたり。

地「龍神すなはち現はれて。シテ「和布刈の所の水底をうがち。地「拂ふや汐濱に。こゆるぎの磯菜摘む。シテ「めざし濡らすな沖に居れ波。地「沖に居れ波と夕汐を退け。屏風を立てたる如くに分かれて。海底の砂は平々たり。

地「神主松明ふり立てゝ。御鎌を持つワキ「神主松明ふり立てゝ。地「神主松明ふり立てゝ。御鎌を持つて岩間を傳ひ。つたひ下つて半町ばかりの。海底の和布を刈り歸り給へば。程なく跡に汐さし滿ちて。もとの如く荒海となつ

わたづみ　海の事。和田の原　海の原の意。浪々たる海上を云ふ。

シテ子方　乳父小次郎
ワキ狂言　若君　深草少將
ツレ　里人
ツレ　僧

遠世せし若君の行方を尋ぬるため。土車を挽きつゝ辛苦を厭はず思慕し孝子の誉ある廻り逢ふ事を作れり。

夢の世なれば云々　世のはかなきに昔夢の如くなれども。今現在ある現世する一事だけが夢ならずとなり。

深草の少將　履歴知りがたし。遠小町に見えたる人なるべし。

善光寺への望み　善光寺參詣の希望なりしを云ふ。

なほ狂ひとや　遠行人の狂ひ者として笑ひ嘲るゝ。又自己の狂人主君を失ひ。嘆きの余りゝ狂人となりたるなり。

有明のつれなく見えし別れより　古今集の「有明のつれなく見えし別れより暁ばかり憂きものはなし」の歌を用ひて云ふ。

て。波白妙のわたづみ和田の原。天を浸し雲の波。煙の波風海上にをさまれば蛇体は。龍宮に飛んでぞ入りにける。

土車　つちくるま

元清作

ワキ次第「夢の世なれば驚きて。捨つるや現なるらん。」問「かやうに候ふ者は。深草の少將がなれる果にて候ふ。我妻におくれ。浮世あちきなくなり行き候ふ程に。一子を捨てかやうの姿となりて候ふ。我世に在りし時より。善光寺への望みにて。此程は信濃の國に候ふが。今日もまた御堂へ參らばやと思ひ候ふ。

シテ一聲「如何にあれなる道行き人。善光寺への道教へてたべ。なに物狂ひとや。よしさ思し召されんに付きては。猶御情は有明の。つれなくも御通り候ふものかな。」問「是に御入り候ふは主君にて御座候ふが。父を失ひ彼方此方を御尋ね候ふ。是を憐みてたび給へ。あら笑止や又むつかり候ふよ。いや〳〵さやうに心弱くむつかり候はゞ。今日よりしては御供申すまじく候ふ。

子詞「如何に乳父。今日よりしては泣くまじいぞよ。シテ「あらいとほしや。さあらば何處までも御供申し。父御に逢はせ參らせ候ふべし。痛はしやいにしへは鸞輿屬車に召されし御身の。名も高かりし日月も。地に遠近の土の車。引きかへしたる有様かな。諸佛念衆生。衆生不念佛。

シテ子次第「住まで世に經る土車。めぐるや雨の浮雲。子サシ「是は都の邊り深草の世に經る土車。めぐるや雨の浮雲。地「住まで者にて候ふが。思ひの外に父を失ひ。諸國をめぐり候ふなり。

シテ「悲しきかなや生死無常の世の習ひ。一人に限りたる事はなけれども。二人「悲しみの母は空しくなり。殘る父さへ幾程なく。思ひの家を出で給へば。其行き方をも白雪の。跡を尋ねて

むつかり　泣く事。

ぬのと　使役を云ふ。若君の養育を依託せられし長者なり。

鸞輿屬車　鸞輿を乘りあるきし鳳花の昔を云ふ。

土の車　人を載せて土を運ぶための車なり。昔とい打つて引きかへしたるを云ふ。

諸佛念衆生云々　諸佛は衆生のためを念じ給へど。衆生は諸佛を念ずる心ひきの意。君父を逢はせ給へと此經文を唱へて自ら戒め念佛するなり。

住まで世に經る　一編ふとゝまり住まずして所々流浪しあるく事を。車輪の廻轉するに譬へて云へり。

めぐるや雨の浮雲　雨を運び來る浮雲の。晴るゝかとすれば又あうれるゝ如く。積ゆるを急ぐ身なれども。物えずしてさまよふの意。

深草の者　深草の里は京都伏見の南にあり。

思ひの家　火宅の意にかけて云ふ。人間界の苦痛多きを火中の

家に譬へて云へるなり。

跡を尋ねて　踏みつきたる足跡の意を云ひかけたり。

如來堂　善光寺の本堂を云ふ。

御堂ばかりは曲もなく候ふ　御堂だけ追ひ拂ひたるにては面白からず。今一層困らせてやらんの意。

迷ふなり。シテ「あはれや實にいにしへは。花鳥酒宴にまとはされ。春秋を送り迎へし御身の。かくあさましくなりぬれば。僅かなる露の命を殘さんと。歌「念佛申し皷を打ち。地「袖をひろげ物を乞ふ。心を人の憐まば。尋ぬる父の行き方を。敎へてたばせ給へと。問へばはかなき憂き身かなと。思ひながらも憂き旅を。歌信濃の國に聞こえたる。善光寺にも着きにけり。

狂言「如何に是なる狂人。面白う狂ひ候へ。シテ「いや今は狂ひたうもなく候ふ。狂言「御身はすねたる事を申す物かな。物狂ひなれば狂へと申す。唯狂うて見せ候へ。シテ「いや〳〵狂ひ候ふまじ。狂言「扨は狂ふまじきか。近頃にくき事を申すものかな。狂ふまじきならば。此如來堂には叶ふまじきぞ。急いで出で候へ。いや〳〵御堂ばかりは曲もなく候ふ。此國には叶ふまじ。此國ばかりは猶も狹く候ふ。總じて天下に叶ふまじきとよ。シテ「何

千方と云ひし逆臣ありしが云々　天下に住む事ならぬと云へれし故。國内に入れられざる逆賊の古事を引きたるなり。太平記に「天智天皇の御宇に藤原千方と云ふもの有つて。金鬼風鬼水鬼隠形鬼と云ふ四つの鬼を使へり。金鬼は其身堅固にして矢を射るに立たず。風鬼は大風を吹かせて敵城を吹き破る。水鬼は洪水を流して敵を陸地に溺らす。隠形鬼は其形を隠して俄に敵を拉ぐ。斯くの如くの神變。凡夫の智力を以て防くべきに非ざれば。伊勢伊賀の両國これが爲めに妨げられて王化に順ふものなし。こゝに紀友雄と云ひけるもの。宣旨を蒙つて彼國に下り一首の歌を詠みて。鬼の中へぞおくりける　草も木も我大君の國なれば何くか鬼の住家なるべき。四つの鬼この歌を見て。扨は我等悪逆無道の臣に随つて善政有徳の君を背き奉りける事。天罰のがるゝ處なかりけりとて。忽ち四方に去つて失せにければ。千方勢ひを失ひて。やがて友雄に討たれにけり」と見ゆ。此謡に藤原の朝臣とせるは紀の朝臣の誤なるべし。歌もいさゝか替へて引きたり。

あらかねの　土の枕詞。動かぬ國土の意味を土車の文字に云ひかけたり。

と天が下に叶ふまじきと候ふや。恐れながら御事の身として。天が下に叶ふまじとは思ひもよらぬ仰せかな。往昔天智天皇の御宇かとよ。千方と云ひし逆臣ありしが。其身も勢ひ有りし上。四つの鬼を使ひしかば。攻むべき樣もなかりしに。藤原の朝臣一首の歌を書き。鬼の城に遣はす其歌に。土も木も我大君の國なれば。何處か鬼の宿と定めん。地「此歌の理に。鬼もめでゝ去りぬれば。千方も亡び候ひて。一天四海波を。打ち治め給へば。國も動かぬあらかねの。土の車の我等まで。道せばからぬ大君の。御影の國なるをば。一人せかせ給ふか。シテ「殊更當國信濃路や。地「木曾の棧橋かけて實に。賴みも危からぬ。法の聲立てて猶。諸人の憐み他の力。洩らさじ物を彌陀佛の。御影も普く。憐ませ給へ人々。憐みの中にも。此御佛の上なき。佛は衆生を。一子と思し召さるれば。殊更我等が。影賴み賴む中にも。彌陀

閑せかせ給ふかの廣く行きわたる樂平の御代ぞ。大君の恩波に御身一人我ゆく道を遮りとゞめ給ふかの意。「せき」に水をせきとゞむる如く妨ぐるを云ふ。法の聲念佛の事。他の力念佛の力ぞ依賴するを云ふ。

憐みの中ぞ人々ぞ憐ませ給へと助を乞ひたる故ぞ云ふ。無數の衆生を總じて一人の平等ぞ憐むを云ふ。一子の如く子の君の心を代表して云へるなり。

振鼓舞人の手ぞ取るもの。花の降ると云ひかけたり。撃をあげて撃かけて云ふ。樂器の聲を若君のあれとだふれとも聞き知らぬを云ふ。

尋ぬる子の心を父があれとも聞き知らぬを云ふ。

人ぞ物乞ふさゝらもためぞ歌舞せし道具なり。さゝらに二つの竹を打ち合わすもの。八撥に鼓の事。八撥を打つと云ひかけたり。

八撥をも打ち捨てゝ我迷ひたるを感ぞ悟りや輪廻たる詞。又めぐりもどるを云ふ。今逢ひ見たらば終の別れ今逢ひ見ずは終の悅び。此廻を忍びこらへば再び別るゝ悲しみを云ふ。今逢ひ見ずは終の悅び。此廻を忍びこらへば再び別るゝ悲しみなきを云ふ。

三界の絆を迷の世界ぞ三界あり。欲界と云ふ。欲界色界無色界の苦しみを出離せしめがたき物なるを絆と云ふ。絆は牛馬を繋ぎとむる縄の事なり。さらぬやうぞて　見棄てぬ如くの意。

生死輪廻　生死の苦界ぞ迷の心のめぐりめぐるを云ふ。

有相執着　男子女子の如きも有相執着すれば形も心も無きものなるぞ。迷の一念よりそれを存在するものとして愛情の奴隷心となるを云ふ。

流轉無空　空虛なる世界が迷の眼ぞ見えて。色々ぞ見えそれぞ身心の廻轉流浪するを。車輪のまわりて止まぬぞ譬へて云ふ。

正沈不定　浮沈常なく迷のためぞ住處を定めぬを。島の木の枝を昇降するぞ譬へて云ふ。

は母にてましませば。父にも逢はせて。たばせ給へ南無阿彌陀。

シテ「阿彌陀佛。地「阿彌陀佛。歌舞の菩薩聲々に。花の振鼓。箪笥の笛和琴。聲をあげて叫べども。父とも答へず。哀とだにも知らざれば。よしうれまでぞ。さゝらも八撥をも。打ち捨てて狂はじ。皆うち捨てゝ狂はじ。

ワキ詞「不思議の事の候ふ。是なる物狂ひを如何なる者ぞと思ひて候へば。故郷に留め置きたる一子にて候ふ。又此方なるは乳父の小次郎にて候ふ。あら不便と哀へて候ふや。頓て名乘つて悅ばせばやと思ひ候ふ。や。あら何ともなや。一度思ひ切りたる道に。又輪廻の心の出で來て候ふは如何に。今逢ひ見たらば終の別れ。今逢ひ見ずは終の悅び。誠に三界の絆を。地「こゝにて切ると思ひなし。南無阿彌陀佛と稱へて。さらぬやうにて行き過ぐる。

シテ詞「いかに申し候ふ。是まで父御をば尋ね參らせて候へども。父御に似たる人さへ御座なく候ふ。扨何と仕り候ふべき。子詞「今は命も惜しからず。前なる川に身を投げ空しくならばやと思ひ候ふ。シテ「實にくけなげにも仰せ候ふものかな。さらば御供申し身を投げ候ふべし。さりとも善光寺にては尋ね逢ひ參らせうずると存じ候へども。今は早某も退屈仕りて候ふ。今宵は如來の御前にて。御心靜かに念佛を御申し候へ。明けなば川へ御供申し候ふべし。

地クリ「うれ生死輪廻の根元を尋ぬるに。有相執着の姿念より起れり。シテサシ「己れと心に迷うて流轉無空にして。地「車の庭に廻るが如し。正沈不定にしては。鳥の林に遊ぶに異ならず。

シテ「悲しきかなや我等今。人界に生を受くとは云ひながら。地「見佛聞法の結緣をもなさざれば。未來の樂しみも。いかゞと

見佛聞法　佛身を見佛法を聞く。
惡願破戒　惡業の本願を云ふ。佛法の戒律を背きたる人を云ふ。
闡提　佛法不信者の惡徒を云ふ。
一念十念　念佛を一返さた十返する事。
彼國　極樂淨土の事。
五劫思惟　無限の年月を劫と云ふ。五の字は唯數の形容詞ふ置けるなり。
極惡人　極めて惡き罪人云々。彌陀の名號を稱へて往生を願ふ。外ふよき方便なしとの意。
思ひ切りたる事なれば　入水を決心せしなり。
思ひ切りたる事なれども　再び我子ふ逢はじと決心せしなり。
又引きかへす　決心を翻すを云ふ。
西ふうち向ひ　淨土の方ふ向ふなり。
業末の露の　はかなき身を譬へて云ふ。

思ひ知られたり。ツレ「凡そ彌陀の悲願には。破戒闡提をも洩らさず。一念十念の間に。彼國に迎へ取るべしと。五劫思惟の本願なり。シテ「されば此や其心。地「極重惡人無他方便。唯稱彌陀得生極樂と。說かせ給へる。此理に任せつゝ。我等を助けおはしませ。

シテ詞「思ひ切りたる事なれば。二人は手に手を取りかはし。川の邊に立ち出づる。ワキ詞「思ひ切りたる事なれども。又引きかへす心地して。門前さして追うて行く。シテ「すは早川も近づきぬと。二人は西にうち向ひ。既に憂き身を投げんとす。ワキ「あ暫しとて引き留むる。シテ「有りて憂ければ捨つる身を。留め給ふは中々に。我等が爲めには憂き人なり。ワキ「今は何をか包むべき。是こそ父の少將よ。シテ「更に誠と白雪の。故郷の名は。ワキ「深草の。地「葉末の露の消えもせで。命のあれば又父に。逢

逢ふ事のもし夢ならばと云々　父ふ逢ひしさふ云ふ詞。父ふ逢ひしさふ云ふ詞。覺めて又別るゝ事一夢なりと心肥するの意。最初の「夢の世なれば驚きて拾つるや現なるらん」と云へるふ應じて夢現の文字もて結びたり。

シテ子方　正女櫻子
ワキ同　付人商人
人商人　里人常陸
人商人ふ尋ひ去られし子を尋ねて日向より常陸まで迷ひゆきたる母の物語を作れり。
人商人　人の子を賣買する商人。
身の代　子の身を賣りたる代金を云ふ。
櫻の馬場　日向の國兒湯郡喚屋神社の邊ふありと云ふ。

ふこそうれしかりけれ。逢ふ事の。もし夢ならばいかにせん。現になり行かば。またもや父に別れなん。

地「ともに命のながらへて。又廻り逢ふ小車の。別れし時の憂き思ひ。今逢ふ事のうれしさを。何にたとへん方も渚の波。夜晝戀ひし我父に。逢ふこそうれしかりけれ。

櫻川　さくらがは

元清作

男詞「かやうに候ふ者は。東國方の人商人にて候ふ。我久しく都に候ひしが。此度は筑紫日向に罷り下りて候ふ。又昨日の暮程に幼き人を買ひ取りて候ふ。彼人申され候ふは。此文と身の代とを。櫻の馬場の西にて櫻子の母と尋ねて。慥に屆けよと仰せ候ふ程に。唯今櫻子の母の方へと急ぎ候ふ。此あたりにて有りげに候ふ。先々案内を申さばやと存じ候ふ。いかに案内申し候

かまひて　屹度の意。

〜

さても〳〵此年月の御有様を見棄ねて云ふ。東の方へ下り候ふ　以上文の文の旨。のう其子ハて云ふ詞。　是より文の文言。母の貧苦なる人商人を呼び留め

是を出離の縁として御様をも變へ給へと入り給へ。御名殘こそ惜しう候へ　是より又文言と爲る。子ふ別れたるを出家の縁として佛道ふ入り給へと勸奏する事。　是ふて文言終る。

添ハで母ふハ添うて居ずしての意。　母ふハ添うて居

國伏屋の意ふかけて云ふ。ぼひ伏したる如き賤が尾のさきなり。拾玉集ふ「紅近を梅のさきりかを袖ふしめて獨り伏屋と人に云はれし」とあり。　子ふ別れて獨り伏す草の戸を明〳〵ると夜を明かし　伏屋ハよろ明かすとを兼ね。　我情心すゝや姫の　水花

神も木花さくる氏神も夢子の名の如く。

ふ。櫻子の母の渡り候ふか。シテ詞「誰にて渡り候ふぞ。男「さん候ふ櫻子の御方より御文の候ふ。又此代物を慥に届け申せと仰せ候ふ程に。是まで持ちて參りて候ふ。かまひて慥に届け申すにて候ふ。シテ「あら思ひよらずや。先々文を見うずるにて候ふ。扨も〳〵此年月の御有様。見るも餘りの悲しさに。人商人に身を賣りて。東の方へ下り候ふ。のう其子は賣るまじき子にて候ふ物を。や。あら悲しや。早今の人も行き方知らずなりて候ふはいかに。是を出離の縁として御様をも變へ給ふべし。唯返す〳〵も御名殘こそ惜しう候へ。地「名殘をしくは何しにか。添はで母には別るらん。地「獨り伏屋の草の戸の。明かし暮して憂き時も。子を見ればこそ慰むに。さりとては我頼む。神も木花咲耶姫の。御氏子なる物を。櫻子留めてたび給へ。さなきだに。住みうかれたる故郷の。今は何にか明暮を。絶えて住むべき身

とて櫻ふ鎌ある神なれハの意。子ふ別れずとても　さなきだふ住みうかれたるの意。　住み憂く爲り今ハ何ふかの意。子ふ別れし上ハ如何してかの意。　眞鍋郡ふあり。

櫻川　筑波山より圍づるみなの川の下流なり。

筑波山　筑波郡ふあり。このもかのもの　こなたかなたのと云ふふ同じ。古今集ふ「つくハ山このもかのもふ陰ハあれど君が御影ふまさりかげハなし」とあり。

雲の林の　花を雲ふ見なして云ふ。　花の波の上ふ嵐も浮かぶの意。

す〳〵ひ網　魚をすくふ網なり。

ならねば。我子の行くへ尋ねんと。泣く〳〵迷ひ出でゝ行く。」ワキ次第「頃待ち得たる櫻符。山路の春に急がん。詞「是は常陸の國磯邊寺の住僧にて候ふ。又是に渡り候ふ幼き人は。何處とも知らず愚僧を頼む由仰せ候ふ程に。師弟の契約をなし申して候ふ。又此あたりに櫻川とて花の名所の候ふ。今を盛の由申し候ふ程に。幼き人を伴なひ。唯今櫻川へと急ぎ候ふ。歌「筑波山。此面彼面の花盛。雲の林の陰茂き。緑の空もうつろふや。松の葉色も春めきて。嵐も浮かぶ花の波。櫻川にも着きにけり。男詞「いかに申し候ふ。何とて遅く御出で候ふぞ待ち申して候ふ。ワキ詞「さん候ふ皆々御供申し候ふ程に。扨遅なはりて候ふ。あら見事や候ふ。花は今を盛と見えて候ふ。男「中々の事花は今が盛にて候ふ。又こゝに面白き事の候ふ。女物狂の候ふが。美しきすくひ網を持ちて。櫻川に流るゝ花をすくひ候ふが。けしか

何散りがたふるふ樹して云ふ。　道行人の歌へた

花散れる水のさゝ〳〵とめくれば山ふも春の無くなりふけり　古今集詠人不知の歌なり。落花の有る方ふと川上を尋ね上りたるふ。山ふも春色の既ふ去りて見るべかりざるの意。

少しなりとも休らはゞ　休息して落花の響と盛りたる後ふ行き櫻花ちりふし風の名殘ふの意。

空ふ波ぞ立（ちける）　古今集貫之の歌なり。散りたる花が空ふ立ちさわぎて波の如くたゞよふを云ふ。

箱崎　筑前の地名。源氏物語常夏の巻の歌ふ一常陸なる駿河の海の須磨の浦波立ち出でよ箱崎の

ちずおもしろう狂ひ候ふ。是に暫く御座候ひて。此物狂を幼き人にも見せ參らせられ候へ。男「心得申し候ふ。やあ〳〵彼物狂に。いつもの如くすくひ網を持ちて。此方へ來れと申し候へ。

シテ「いかにあれなる道行き人。櫻川には花の散り候ふか。何散り方になりたるとや。悲しやなさなきだに。行く事やすき春の水の。流るゝ花をや誘ふらん。花散れる水のまに〳〵とめくれば。山にも春はなくなりにけりと聞く時は。少しなりとも休らはゞ。花にや踈く雪の色。櫻花。散りにし風の名殘には。地「水なき空に波ぞ立つ。シテ「おもひも深き花の雪。地「散るは涙の川やらん。

シテサシ「是に出でたる物狂ひの。故郷は筑紫日向の者。さも思ひ子を失ひて。思ひ亂るゝ心筑紫の。海山越えて箱崎の。波立ち出でゝ須磨の浦。又は駿河の海過ぎて。常陸とかやまで下り來ぬ。實にや親子の道ならずは。はるけき旅を如何にせん。詞「これ又名に流れたる櫻川とて。さも面白き名所あり。別れし子の名も櫻子なれば。形見といひ折柄といひ。名もなつかしき櫻川に。地「散り浮く花の雪を汲みて。自ら花衣の。春の形見殘さん。地「花鳥の。立ち別れつゝ親と子の。行くへも知らで天ざかる。鄙の長路に衰へば。たとひ逢ふとも親と子の。面忘れせば如何ならん。うたてやしばしこそ。冬ごもりして見にずとも。今は春べなる物を。我子の花はなど咲かぬ。

ワキ詞「此物狂ひの事にて有りげに候ふ。立ち寄りて尋ねばやと思ひ候ふ。いかに是なる狂女。御事の國里は何處の人ぞ。シテ詞「是は遥かの筑紫の者にて候ふ。ワキ「うれは何とてかやうに狂亂とはなりたるぞ。シテ「さん候ふ唯一人ある忘れ形見のみどり

の髪一とあるを引きて云ふ。本歌の歌首圖の名所を一つふよめる詞を歌の例なりと知るべし。

名ふ流れたる　名高きの意。

花衣　花やかなる衣の意。衣の肩身と云ふを形見ふかけて用ひたり。

花鳥の　鳥の朝ねそらを出づる如く立ち別るゝを云ふ。花鳥と云ふ常ふ云ふ詞ふて。櫻子の名ふ縁ある故ふ殊ふつゞけ用ひたり。

天ざかる　鄙の枕詞。京都より天を遠く隔てたるの意。

鄙の長路　田舍の遠き旅路を云ふ。古今集篁の歌ふ「思ひきや鄙の長路ふ斧へて奉士の繩たぎ漕せんとは」とあるを引きて。こゝふは常陸まで長の旅して身体の衰弱せしを云ふ。

冬ごもりして見えずとも　云々「醒波津ふさくや此花」の歌を引きて云ふ。冬木の時ふは花さく木とも見えざる如く。櫻子も暫時は姿をかくして見せずとも。今春の時節ふなりたれば花と共ふ何とてあられ見えぬぞとの意。

あまつさへ　渇仰　其うへふの意。渇仰の情を生ずる事。

木華開耶姫　大山祇神の御女ふて瓊々杵尊の皇后なり。壯い日向の國笠沙岬ふて妻御宮と云ふ。

あだふもせじと　徒らふ散りはてさすまじとてす〳〵ひとむるを云ふ。

建さふ付きて　遠國ふある川ゆふ名歌の誉れを得たる功あり しとなり。

常よりも　春べふなれば云々　遠祭ふ出でたり。詞書ふ「櫻川と云ふところ有りと聞きて」と

子に生きて離れて候ふ程に。思ひが亂れて候ふ。ワキ「あら痛はしや候ふ。又見申せば美しきすくひ網を持ち。流るゝ花をすくひ。あまつさへ渇仰の氣色見に給ひて候ふ。是は何と申したる事にて候ふぞ。シテ「さん候ふ我故郷の御神をば。木華開耶姫と申して。御神体は櫻木にて御入り候ふ。されば別れし我子も其御氏子なれば。櫻子と名付け育てしかば。神の御名も開耶姫。尋ぬる子の名も櫻子にて。又此川も櫻川の。名もなつかしき花の散りを。あだにもせじと思ふなり。ワキ「謂を聞けば面白や。實に何事も緣は有りけり。さばかり遠き筑紫より。此東路の櫻川まで。下り給ふも緣よのう。シテ「先此川の名におふ事。遠きに付きての名譽あり。彼貫之が歌はいかに。ワキ「實に〳〵昔の貫之も。遥けき花の都より。シテ「いまだ見もせぬ常陸の國に。ワキ「名も櫻川。シテ「有りと聞きて。地「常よりも。春べにな

あり。都より狩倦してよめる歌なり。

促すながす　促すの意ふて非ず。長と流すの意なるべし。信太の浮島　常陸の名所なり。浮かべを呼び出す意ふある歌。

あら笑止や　狂女ふ向ひて云ふ詞。困った事かなの意。

さすめれ　さらば未知ぞと云ふ程の意。

花のみかさね　みかさね水屑を云ふ。落花の多きを出水ふ比し云へるなり。

れば櫻川。波の花ころう。間なく寄すらめと讀みたれば。花の雪も貫之も。ふる降き名のみ殘る世の。櫻川。瀬々の白波しげゝれば。霞うながす信太の浮島の。浮かめ〳〵水の花。げにおもしろき河瀬かな。ワキ詞「いかに申し候ふ。此物狂ひは面白う狂ふと仰せ候ふが。今日は何とて狂ひ候はぬぞ。男「さん候ふ狂はする樣が候ふ。櫻川に花の散ると申し候へば狂ひ候ふ程に。狂はせて御目にかけうずるにて候ふ。ワキ「急いで御狂はせ候へ。男「心得申し候ふ。あら笑止や。俄に山れろしのして櫻川に花の散り候ふよ。シテ「よしなき事を夕山風の。奥なる花を誘ふでさめれ。流れぬさきに花すくはん。ワキ「實に〳〵見れば山おろしの。木々の梢に吹き落ちて。シテ「花のみかさは白妙の。ワキ「波かと見れば上より散る。シテ「櫻か。ワキ「雪か。シテ「波か。ワキ「花かと。シテ「浮

花のもとに帰らん事を、白氏文集に。花下忘レ歸因二美景一とある。忘れ水の隠れて流るゝを云ふ。野中の水ふて草陰に隠れて流るゝを云ふ。こゝは「忘れ」と「水」と別々に上下の句に入用ある故にかく。すゐりう「水をがれ」と云ふべきを。曾の響合ふて斯く書かれたり。此文字は「流れかへらず」の詩句なるべし。文としては可なりかしかりず。

岸花紅照レ水。劉禹錫送李侍御詩。

子美の詩を用ひ。潤水遠如レ藍。

山花開似レ錦。

岩ゐ藍でたる詩句。

社

あひふあひなば　陽子と櫻川との名の文字の合ふを云ふ。年を經て花の錦となる水に散りかかるをや曇ると云ふうん。古今集伊勢の歌に。花の委を富士の水面ゐて曇る事なれば。散りたるため其影の見えず曇るを曇るとい名づくべきゐやの意。

散りぬれば後に芥ゐなる花と思ひ知（らずも迷ふ蝶かな）古今集遍昭の歌なり。本歌ゐ「思ひ知らずも」とある事を替へて。其理に心得たれど之をとゞめんよしなければ。如何ともしがたしの意ゐ云へるなり。

古今集ゐ「枝より散りゐ花なれば落ちても水の泡とぞなれ」とある。

先だゝぬ悔いの八千度（かなしきに流るゝ水の露なり來ぬなり）後悔前ゐ立たず古今集の歌なり。八千度の理を述べたるなり。八千度の文字ゐ付きて百千鳥とつゞけたり。

百千鳥花ゐなれゆゝあだし身はかなはとゐうちやまれ（ぬる）古今六帖の歌なり。百千鳥の春鳴く小島の總名。花ゐ親しみ鳴く鳥に知りながらも。別るべきもの眼前ゐ其境界を察ましく思ふ。の意。

霞をあはれみ云々　古今集序ゐ「鳥をうらやみ歌の沿革をかなしむ心露をあはれみ霞をあはれむ心青葉。おほくさまくゐなりけり」とあり。

思ひわたりし　遠國の名所なりと思ひやりつゝ年月を流りし意。川を渡る事ゐかけて云ふ。波を我身ゐかくる事。波かけて。帶を掛くゐ事ゐかけて云ふ。

常陸帶の云々　新古今集ゐ「東路の道のはてなる常陸帶のかごとばかりも逢はんとぞ思ふ」とあるを引きて云ふ。常陸帶の事の紫傳ゐ。彼國の日女の緋を占ひ懸んとて苧を帶ゐして。一つゐ懸想する男の名を書き。一つゐ我名を書きて神前ゐて祝詞を申して。帶を折り返して名をば覆し。水を木ゐ結び合へするなり。懸かるべを緣なれば離れ〳〵結れ。よかるべをゐ掛帶のやうゐ結びつながるゝ。それを月

き立つ雲の。ワキ「河風に。地「散ればぞ波も櫻川。流るゝ花をすくはん。シテ「花の下に歸らん事を忘れ水の。地「雪を受けたる花の袖。

シテ「うれ水流花落ちて春とこしなへにあり。地「月すさまじく風高うして鶴かへらず。シテサシ「岸花紅に水を照らし。洞樹緑に風を含む。地「山花開けて錦に似たり。潤水たゝへて藍の如し。

シテ「面白や思はずこゝに浮かれ來て。地「名もなつかしみ櫻川の。一樹の陰一河の流れ。汲みて知る名も所から。あひにあひなば櫻子の。是又他生の緣なるべし。クセ「實にや年を經て。花の鏡となる水は。散りかゝるをや曇るといふらん。まこと散りぬれば。後は芥になる花と。思ひ知る身も扨いかに。我も夢なるを。花のみと見るぞはかなき。されば梢より。あだに散りぬる花なれば。落ちても水のあはれとは。いさ白波の花にのみ。

馴れしも今は先だゝぬ。悔いの八千度百千鳥。花に馴れ行くあだし身は。はかなき程にうらやまれて。霞を憐れみ。露を悲しめる心なり。シテ「さるにても。名にのみ聞きて遥々と。地「思ひ渡りし櫻川の。波かけて常陸帶の。かごとばかりに散る花を。あだになさじと水をせき。雪をたゝへて浮波の。花のしがらみかけまくも。かたじけなしや是とても。木華開耶姫の。御神木の花なれば。風もよぎて吹き。水も影を濁すなと。袂をひたし裳裾をしをらかして。花によるべの水せきとめて。櫻川になさうよ。シテ「あたら櫻の。とがは散るぞ恨みなる。花もうし風もつらし。散ればぞ誘ふ。シテ「誘へばぞ散る花かづら。地「かけてのみ詠めしは。シテ「なほ青柳の糸櫻。地「霞の間には。シテ「樺櫻。地「雲と見しは。シテ「三吉野の。地「三吉野の川淀瀧つ波の。花をすくはば若し。國栖魚やかゝらまし。又は櫻魚と。聞くもなつ

ゐ驚けて歸るとが」と見ゆ。「かごと」と云ひかけたるハ袖中抄ゐ「帶ゐハかごと云ふものゝ有れば。かごと云ハん料ゐ常陸帶とハ云へるなり」と註せり。「かごとばかり」ハ「云ひわけばと」の意。

花のしがらみ　花が散り積りて、水をせきとむる柵の如くゐ爲るを云ふ。

かけまくも　青藤ゐかけて云ハんもの意。柵を結くると云ひかけたるハ千載集能因の歌ゐ「櫻ちる水の面ゐハせきとむる花のしがらみ結くべかりけり」とあり。

古今集ゐ「春風ハ花のあたりをよぎて吹け心づかうやうろふと見ん」とあり。よぎてハ「よけ過ぎて」の意。

よるべの水　神社に瓶を置きて「花ゐ飲る」水せきとあて」のつなぎ詞ゐ用ひしのみ。流るゝ花をせき止めて。いつまでも川の名の如くゐ殘し置かんの意。

櫻川ゐさうよ

あたら櫻の　西行の歌ゐ「花見たら櫻のとがゐハありける」とよめるを。散る事あるが櫻の罪なるよしゐ替へて引けるなり。

花もうし云々　愛玉集ゐ「花もうし嵐もつらしもろともゐ散れば誘ふさそへば散る」とあり。

花かづら　花を髪の飾ゐ捕ず

青柳の　青柳の糸と帶ゐ云ふゐ枝りて糸櫻ゐ云ひかけた

かしや。いづれも白妙の。花も櫻も。雪も波も皆がらに。すくひ集め持ちたれども。是は本々の花。誠は我尋ぬる。櫻子ぞ戀しき。我櫻子うこひしき。

ロンギ地「いかにやいかに狂人の。言の葉聞けば不思議やな。若しも筑紫の人やらん。シテ「今までは。誰ともいさやしらぬ火の。筑紫人かと宣ふは。何の御爲めに問ひ給ふ。地「何をか今は包むべき。親子の契り朽ちもせぬ。花櫻子ぞ御覽ぜよ。シテ「櫻子と。聞けば夢かと見もわかず。いづれ我子なるらん。地「三年の日數程ふりて。別れも遠き親と子の。シテ「もとの姿は替はれども。地「さすが見馴れし面だてを。シテ「よく〳〵見れば。地「櫻子の。花の顏ばせの。子は子なりけり鶯の。逢ふ時も鳴く音ころ。うれしき涙なりけれ。

地「かくて伴なひ立ち歸り。母をも助け樣替へて。佛果の緣とな

り。

霞の間ゐハかば櫻　源氏物語野分の巻ゐ「霞の間よりおもしろきかば櫻の咲きみだれたるを」などあり。美しき形容ゐ古へハ用ひたり。

雲と見しハ　古今集序ゐ「春のあした吉野山の櫻ハ。人麿が心ゐハ雲かとのみなん見えける」とあり。

川淀　水の靜なるところ。

瀧つ波　水の急なるところ。

國姫魚　吉野川の上ゐて取る、鮎を云ふ。

櫻魚　花盛の時節の小鮎を云ふ。

しらぬ火　筑紫の枕詞。

子ハ子なりけり　親子の道ぞありがたき。

りにけり。二世安樂の緣深き。親子の道ぞありがたき。

二世安樂　佛果の緣ゐ結ぶを云ふ。

飛鳥川　あすかがは

作者未詳

ワキ次第「昨日入りにし三吉野の。北の山路や歸るらん。調「是は上京邊に住居する者にて候ふ。是に渡り候ふ幼き人は。母御を行方なく失ひ給ひ御嘆き候ふ程に。我等御供申し御祈りの爲め。昨日三吉野へ參詣申し。唯今都へ上り候ふ。道行「一夜宿て。又

シテ（二人）早少女　ツレ　友若　子方　ワキ　京人　ワキツレ　大和人

別れし母の行方を尋ねて飛鳥の里ゐて廻り逢事を作れり。

北の山路　吉野ゐ入る時ハ南ゐ向ひ出で、下る時ハ北ゐ向ふ故ゐ云ふ。

上京　京都の四條通より北を云ふ。

御祈りの爲め　吉野金峯山明神ゐ母の行方を知らせ給へと祈願するなり。

一夜明て　吉野山ゐ一泊せしを云ふ。

行末の行末とを歎ぬ。山水の行く事と旅路の波も瀬瀬の古今集ゐ「世の中は何か常なる飛鳥川きのふの瀬ぞ今日は淵なる」とあるゐ彼りて。瀬瀬定まらぬよしゐ云ひ習はせり。

飛鳥川田歌　高市郡ゐあり。田植する時ゐ謠ふ唱歌。

岸田の早苗　飛鳥川の岸ゐ作りし田を云ふ。早苗は田植する時の稲苗を云ふ。

とりく〳〵の　早苗を取ると云ひかけたり。早少女どもおの〳〵の袖を云ふ。

天の村早稲作らせ初め給ひし稲を云ふ。　天上ゐ天照大神の

地儀のかさ〳〵　地形の宜しきを稱たる事。

天の田苗代水ゐせき下せ　天降ります神ならば神なり。能因が雨乞の歌なり。後ゐ「是は管子ゐ此歌をあげて其下向の時。國司伊豫守と爲りて下向の時。敵月雨降らず民困ゐ思ひて守能因ゐ三ゐ相語つて云へく。時ゐ歌を詠じて云々。時ゐ所の請すべしと云ふ。仍て大雨ゐ詠ずる所の歌なり。

立ち歸る旅衣。昨日過ぎにし道芝の、露も草葉も五月雨の。山水そへて行末の。岸田の早苗緑にて。波も淵瀬の名にしおふ。飛鳥川にも着きにけり。詞「御急ぎ候ふ程に。是ははや飛鳥川に着きて候ふ。向ふを見れば笛鼓を鳴らし田歌を謠ひ候ふぞや。暫く御詠め候へ。

シテツレ一聲「飛鳥川。岸田の早苗とりく〳〵の。袖も緑の氣色かな。

ツレ二人「山鄙公聲添へて。三人「謠ふ田歌も猶繁し。シテサシ「種蒔きし其神の代ゞ久方の。天の村早稲種繼ぎて。三人「今人の世の末までも。惠みの國は治まりて。我等如きの民までも。地儀のかまへは豐かなり。然れば神と君が代の。廣き御影の有り難さよ。

歌「天の川。苗代水にせき下せ。天降ります事ならば。神ぞ知るらん世のためし。雨も豐かに木の音も。長閑けき飛鳥風。都はこゝに遠けれど。あまざかる鄙の國まで。洩れぬ誓ひは有り難

下りて三日三夜止まず」とあり。歌の意は天上より天降り給ひしなりば。雨の降るゐも緑ある神ゆゑ。天上の天の川をせきとめて。之を百姓の苗代田ゐ降し給へ。となり。

飛鳥風　飛鳥の地ゐて吹く風を云ふ。蔦葉ゐ一手弱女の袖吹き返す。飛鳥風ゐ運みいたづら吹く」とあり。

時節ゐ隔れて目前のけしきを面白く感ずるの意。

みをはるし　水の表裏を觀する終抗。

や。シテ「暫く休らひて田を植ゑうずるにて候ふ。

ワキ「面白や頃は五月の初めつ方。四方の梢も深緑。けしきを添へて小田の早苗。取り持つ人の裳裾をひたし。袖を濕らせる有樣は。實にをり〳〵の目前なり。詞「又是なる川の水出でゝ。本の渡瀬も定かならねど。昨日渡りし其まゝに。川瀬を尋ね渡り行けば。シテ詞「のう旅人こゝは渡瀬に候はず。今少し上へ廻り給へ。ワキ「なに上を渡れと候ふや。シテ「中々の事御廻りあれと申せばとて。幾程もなく候ふ。あれに見えたる澪じるしを。しるべに渡り給ふべし。ワキ「不思議や昨日三吉野へ。參りし時は此渡瀬。扨は渡瀬の今日替はり。上へ廻り候ふやらん。シテ「中中のこと旅人よ。此川筋の昨日に替はりたるとの御不審は。名をまだ知ろしめさゞらん。ワキ「いや此川は飛鳥川にては候はぬか。ツレ「飛鳥川ぞと知ろしめして。昨日の淵は今日の瀬に。替

流れ潤　度の淨穢などゝ土の穢りて水中の穢物を流せるを云ふ。故ゝ水ゝまかせて流れゆく事あり。五月雨ゝ出水せし爲めと知るべし。

五月雨ゝ物おもひ居れば時鳥夜ゝかく鳴きていづおゆくらん　古今集の歌。

あだし世　はかなき世ゝ同じ。

胡蝶の夢ゝ　もろこしゝて莊周が胡蝶と爲りしと見し夢の如

はるとかねて知ろしめさぬは。御心なき仰せかな。シテ「夜の間の雨に水まさり。殊更今日は流れ洲の。渡瀬は定めなき物を。ワキ「實に隱れなき名所や。さて〳〵此飛鳥川の。分きて淵瀬の定まらぬ。謂は如何なる事やらん。シテ「いやそれは唯山川の。末の流れの石多く。淵瀬の常に替はる事。いひならはせる心なり。ツレ「されば歌にも。シテ「世の中は。地「何か常なる飛鳥川。昨日の淵は今日の瀬に。なるや夜の間の五月雨に。水屑まさりて濁りたる。水の心も知らずして。左右なう渡り給ふなよ。」地「それ春過ぎ夏たけて。秋もまた暮れぬべし。冬にならんも幾程ぞ。シテサシ「五月雨に物思ひ居れば時鳥。夜深く鳴きていづち行くらんと。地「讀みし心も今さらに。身に白糸の夜となく。壹ともわかであだし世の。いつまでとてかながらへん。シテ「思へばあはれ胡蝶の夢に。地「遊ぶぞ今日の現なる。クセ「御

田屋守。今日は五月になりにけり。急げや早苗老いもこそすれ。實にや五月雨の。晴れぬ日數も舊り行くに。明日となひひそ飛鳥川の。田を作ればか時鳥。四手の田長を朝な〳〵呼ぶと。詠ぜしもまことなり。死出の山田の時鳥。此土に來り聲立てゝ。程時過ぐる世の中の。敎へを知る故に。時の鳥とは申すなり。シテ「五月山梢を高み時鳥。地「鳴く音空なる戀やする。我も戀しき綠兒の。行方も知らで足引の。山路に迷ひ里に出でゝ。國々浦浦めぐる日の。積る三年の春過ぎて。夏もはや五月雨の。振分髪の玉かづら。斯かる業はいつか身に。地「衣袖ひちて。いざいざ早苗取らうよ。シテ「れもしろや厂金寒み暮れし田を。地「又時鳥早苗取る。五月シテ「れもしろや厂金寒み暮れし田を。地「又時鳥早苗取る。五月雨の。地「さすや

田屋守　けふ五月になりにけり。急げや早苗老いもこそすれ。拾遺集に好思の歌なり。御田屋役守ゝ田の番する人を云ふ。急げや云々ゝ早苗の時節おくれぬ内に急ぎて田植せよの意。

いしばくの田を作れば　時鳥しでの田長を朝な〳〵呼ぶ　古今集の歌なり。時鳥の異名を四手の田長と云ふに依りて。四手の田を作る人の事なり。時鳥は毎朝々々田長々々と催促がましく呼び出して鳴くなり。

死出の山田の時鳥　人の魂が化したる鳥なり。四手の詞を又氣遠なるよりて。死出の山ゝ取りなしたるなり。

五月山梢を高み時鳥なく音空なる戀（もするかな）　古今集ゝ貫之歌。時鳥の句ゝ「鳴く音空なる」と云ふのためゝ「鳴く音空なる」と云ふためゝ序なり。

振分髪　少女の髪の長くなりて肩中より左右ゝ振り分けらるゝ頃を云ふ。こゝ其髪ゝ玉かづらを云ふ。くると云ひつゞけたるまでの意。

雁金さむみ暮れし田を　拾遺集ゝ「時鳥なくや五月ゝ植ゑし田を雁（刈）がね寒み秋ぞ暮れぬる」とあるを。又翌年の夏來りしるゝ云ひなせるなり。

又時鳥早苗とる　再び時鳥鳴き早苗取る頃と爲りたるを云ふ。

五月の玉　むかしは五月五日ゐ内裏ゐて薬玉を群臣ゐ賜ふ事あり。五色の糸をもて結ひ垂るれバ邪気を払ふと云ひ傳へしに依りて。五色の糸を貫き垂れたるものなり。夫木抄爲家の歌ゐ「花の色を五月の玉ゐぬきとめて分つ少女の姿をぞ見る」などもよめり。
手玉もゆらの　手ゐ纏きたる玉も早苗取るためゐゆらくその音なり。
海田　紀伊の名所。
住吉の岸田　攝津の名所。新後拾遺集ゐ「松の音ハ浮きて住吉の岸田の難波秋風ぞ吹く」とあり。
入江ゐまかせし　まかすとハ田ゐ水を引き入るゝ事。
難波田　難波の田なり。
伏水　地面に低く引き入れたる水を云ふにや。
伏見田鳥羽田　共ゐ京都の南の地。
たをやめの　美人を云ふ。こゝハ田作る女なれバ早少女の事なり。本歌ゐ前ゐ云へり。
芋生の松原　伊勢の名所。芋生の松原ゐ云ひかけたるは。松原の長く立ちたると縁の盡きぬ事とを寄せたり。
逢瀬や飛鳥川　逢瀬とハ唯逢ふ事なり。淵の文字より飛鳥川ゐつゞけ。川の深きと云ひかけたり。

潮も交じる早苗は。シテ「住吉の岸田。地「入江にまかせしは。シテ「難波田の伏水。地「都邊に植ゑしは。シテ「伏見田鳥羽田の。地「是は都に近き手弱女の。袖吹きかへす飛鳥風。心も亂るゝ青柳の緑兒。戀しやなつかしや。ロンギ地「今までハ。行方も知らぬ賤の女の。不思議や見れば母上か。友若こゝに來りたり。シテ「我子ぞと。聞けば夢かと夕暮の。それかあらぬか夢ならば。覺めての後はいかならん。地「よく〳〵見れば自が。尋ぬる母や。シテ「友若に。地「芋生の松原の。盡きぬ逢瀬や飛鳥川。深き契りの親と子に。ふたゝび逢ふぞうれしき。

舎利（しやり）

元清作

前シテ　里人
後シテ　足疾鬼
ツレ　韋駄天
ワキ　旅僧
狂言　寺僧
所ハ　京都

足疾鬼　足疾鬼と云ふ鬼來りて泉涌寺の佛舎利を奪ひたるゐ。忽ち韋駄天と云ふ天神ゐ取り返されし事を作れり。是ハ都名所圖會泉涌寺の條ゐ「舎利殿の本尊ハ佛牙の舎利なり。二重の金塔ゐ安置す。そも〳〵此佛牙の由來を尋ぬるゐ。佛涅槃ゐ入り給ふ御時。羅刹足疾鬼ひまを窺ひて佛牙を捷奪ひたりしを。韋駄天降伏を加へ取りとゞめ返し給へり。而して佛滅後一千六百餘年を経て。大唐の白馬寺道宣律師。戒行薫修の威徳冥感ゐも通じけるにや。韋駄天かたちを現ハし [illegible]

ワキ詞「是は出雲の國三保の關より出でたる僧にて候ふ。我いまだ都を見ず候ふ程に。此度思ひ立ち洛陽の佛閣一見せばやと思ひ候ふ。道行「朝立つや。空行く雲の三保の關。心は留まる故郷の。跡の名殘も重なりて。都に早く着きにけり。詞「日を重ねて急ぎ候ふ間。程なく都に着きて候ふ。まづ承り及びたる東山泉涌寺へ參り。大唐より渡されたる十六羅漢。又佛舎利をも拜み申さばやと存じ候ふ。

ワキ詞「是なる寺を泉涌寺と申すげに候ふ。寺中の人に委しく案内をも尋ねばやと思ひ候ふ。如何に誰か御入り候ふ。狂言「何事を御尋ね候ふぞ。ワキ「是は遙かの田舎より上りたる僧にて候ふ。當寺の御事を承り及び遙々參りて候ふ。大唐より渡りたる十六羅漢。又佛舎利をも拜み申したく候ふ。狂言「實に〳〵聞こし召し及ばれて御參り候ふか。聊爾に拜み申す事叶はず候ふ。但し

て離脱の規を解き。事故なく彼御舍利を本朝ふ移し當時の本尊と崇め奉る一とある由來を現在の事にして作れるなり。十六羅漢　釋迦の門弟中聞羅漢果と云ふ資格を得たる十五人の聖を云ふ。

佛舍利　佛の骨なりとて尊敬するもの。

申すげふ候ふ　まだ人ふ問ハねど。どうやら長滝寺らしきを云ふ。

事として　何か都の風かをるべきなれども　都ハ田舍と違ひて何事もすぐれたる中ふものの意。

現住　現在の世ふ殘りとゞまるを云ふ

御相好　御姿と云ふふ同じ。

今も在世の心地する　釋迦の在世ふ逢ふを云ふ。

聞法値遇　佛法を直接ふ聞く機會を得しを云ふ。

今日彼御舍利の御出で有る日にて候ふ。我等當番にて唯今戸を明け申さんとて。鍵を持つて罷り出で候ふ。まづ此舍利を御拜み有つて。其後山門に登りて十六羅漢をも拜ませ申し候ふべし。

此方へ御出で候へ。から〳〵さつと御戸を開き申して候ふ。よく〳〵御拜み候へ。ワキ「あらうれしや御供申し參り候ふべし」

ワキサシ「實にや事として何か都の愚かなるべきなれども。殊さら靈驗あらたなる。佛舍利を拜み申す事の貴さよ。是なん足疾鬼が奪ひしを。韋駄天取り返し給ひし。現住奇特の牙舍利の御相好。感涙肝に銘ずるぞや。一心頂禮萬德圓滿釋迦如來。地「有り難や。今も在世の心地して。まのあたりなる佛舍利を。拜する事のあらたさを。何にたとへん墨染の。袖をも濡らす氣色かな。

シテサシ「有り難や佛在世の御時は。法の御聲を耳に觸れ。聞法値遇の結緣に。一刧をも浮かむ此身ながら。二世安樂の心を得るに。後五の時代の今さらに。猶執心の見佛の緣。うれしかりける時節かな。

ワキ詞「我佛前に觀念し。寥々とある折節に。御法を貴む聲すなり。如何なる人にてましますぞ。シテ詞「是は此寺のあたりに住む者なるが。妙なる法の御聲を受けて。こゝに立ち寄るばかりなり。ワキ「よし誰とても其望み。佛舍利を拜まん爲めならば。同じ心ぞ我も旅人。シテ「來るもよそ人。ワキ「所もまた。二人「都の邊東山の。末につゞける峯なれや。地「月雪の。古き寺井は水澄みて。庭の松風さにかへり。更け行く鐘の聲までも。心耳を澄ます夜もすがら。實に聞けや峯の松。谷の水音澄み渡る。嵐や法を稱ふらん。

地クリ「それ佛法あれば世法有り。煩惱あれば菩提あり。佛あれ

一刧　數刧ある内せめて一刧なりとも。聞法の功力みて苦界を免かるべかりしふの意。

後五の時代　釋迦入滅後の佛法六期ゆくを。五百年づつ五期ふ分ち云ふ其最末なる五百年の意。

見佛の緣　今佛舍利を拜見すべき緣あるを云ふ。

末につゞける　長滝寺の山ハ東山の南つゞきなれバ云ふ。

嵐や法を稱ふらん　嵐の外には聞法の聲もせずして靜かなる夜のまなり。

西天　天竺の事。
日域　日本の事。
佛骨　佛舍利の事。

佛法東漸　佛法の日本ゑ渡來せし事。
三如來　釋迦。藥師。阿彌陀の三佛を云ふ。
四菩薩　文殊の四菩薩。佛を云ふ。觀世音。勢至。普賢。
常在靈山　釋迦の殿經せし山の名。釋迦の在世の事を秋天の澄みわたるを云ふ。
わづかに二月に臨んで　二月に入滅の月を云ふ。
釋迦入滅の月　釋迦の涅槃と云ふ同じ。
雙樹の水陰　沙羅雙樹の水陰ゑ入滅せし故ゑ云ふ。
苔の上を拂ふ庭　水陰の苔の上を拂ふ故ゑ云ふ。
靈山の御山　前の靈山の事。靈鷲山と世云ふか本名なり。
在世のみぎんの時節と云ふに同じ。
佛骨を　佛の殿法ゑ化せられて草木までも成佛せしを云ふ。
よそながらと云ふ　よそながらと云ふゑ同じ。
白露の秋の月　佛の三十二相の一つゑて。白く輝きたる眉間の毛を白毫と云ふ。之を秋の月の光に喩へたり。
四諦の橋　四諦の橋を四諦と云ふ。苦。集。滅。道。此法の靈山の橋を渡る事を云ふ。
渡るの橋　渡るの橋を渡るの事ぞとなり。
それは上見ぬ方ぞかし　それは上見ぬ方ぞかしは又見あらるるものを故ゑ云ふ。

ば衆生もあり。善惡又不二なるべし。シテサシ「然れば後五百歳の佛法。既に末世の折を得て。地「西天唐土日域に。時至つて久堅め。月の都の山なみに。佛法流布のしるしとて。佛骨を納め奉り。シテ「實に目前の妙光の影。地「此御舍利に若くはなし。ツレ「然るに佛法東漸とて。三如來四菩薩も。皆日域に地をしめて。衆生を濟度し給へり。常在靈山の秋の空。わづかに二月に臨んで魂を消し。泥洹雙樹の苔の庭。遺跡を聞いて腸を斷つ。有り難や佛舍利の。御寺ぞ在世なりける。實にや鷲の御山も。在世のみぎんにこそ。草木も法の色を見せ。皆佛身を得たりしに。シテ「今はさびしくすさまじき。地「月ばかりこそ昔なれ。孤山の松の間には。よそながらと白毫の秋の月を禮すとか。蒼海の波の上に。わづかに四諦の曉の雲を引く空の。さびしさぞな鷲の御山。それは上見ぬ方ぞかし。こゝは正に目前の。佛舍利を拜する。御寺ぞ貴かりける。ワキ詞「不思議やな俄に晴れたる空かき曇り。堂前にかゝやく稻光り。こはそもいかなる事やらん。シテ詞「今は何をか包むべき。其いにしへの疾鬼が執心。猶此舍利に望みあり。ゆるし給へや御僧達。ワキ「こはそも見れば不思議やな。面色變はり鬼となりて。シテ詞「舍利殿に臨み昔の如く。ワキ「金冠を見せ。シテ「寶座をなして。地「栴檀沈瑞香の上に。立ち上る雲煙を立てゝ。稻妻の光りに飛び紛れて。もとより足疾鬼とは足疾き鬼なれば。舍利殿に飛び上り。くるゝくるゝと。見る人の目をくらめて。其まぎれに牙舍利を取つて。天井を蹴破り。虛空に飛んで上ると見にしが。行方も知らず失せにけり。

韋駄天「そもゝ是は。此寺を守護し奉る。韋駄天とは我事なり。詞「こゝに足疾鬼といふ外道。在世の昔の執心殘つて。また此舍利

金冠　鬼の着る冠。
寶座　鬼の冠ゑつきたるもの。
栴檀沈瑞香　佛前ゑ焚ける香木の名。其香の煙より上ゑ鬼が又雲煙を立つるなり。
外道　佛法より外の道を修むるものを云ふ。

欲界色界無色界　三界とて迷ある身の經めぐる世界なり。化天云々　佛法にて說く天國の階級なり。其數三十三ある故に三十三天と云ふ。梵王天より　韋駄天が足疾鬼を追ひ詰めて此處にて踏み出逢ひたるなり。

を取つて行く。いづくまでかはのがすべき。其牙舍利置いて行け。シテ「いや叶ふまじとよ此佛舍利は。誰も望みのある物を。地「欲界色界無色界。化天耶摩天他化自在天。三十三天よちのぼりて。帝釋天まで追ひ上ぐれば。梵王天より出で逢ひ給ひて。もとの下界に追つ下す。シテ「左へ行くも。地「右へ行くも。前後も天地も塞がりて。疾鬼は虛空にくる〳〵と。うづまひめぐるを。韋駄天立ち寄り寶棒にて。疾鬼を大地に打ち伏せて。首を踏まへて牙舍利はいかに。出だせや出だせと攻められて。泣く〳〵舍利を指し上ぐれば。韋駄天舍利を取り給へば。さばかり今までは足はやき鬼の。いつしか今は足弱車の。力も盡き心も茫々と。起き上りてこそ失せにけれ。

道明寺（だうみやうじ）

元清作

前シテ　宮人
ツレ　同
後シテ　白太夫の神
ツレ　天女
ワキ　尊性
[illegible]　河内

河内の道明寺に白太夫の神體あり[illegible]
土師寺　道明寺の一名なり。志貴郡にありて維新前までは菅公自作の十一面觀音を本尊とせしが。神佛分離の際持ち去られてし

ワキ次第「善き光りぞと名を聞くや。佛の御寺なるらん。詞「かやうに候ふ者は。相模の國田代と申す所に。尊性と申す者にて候ふ。我善光寺の如來に一七日參籠申して候へば。あらたに御靈夢を蒙りて候ふ程に。是より河内の國土師寺へ參らばやと思ひ候ふ。道行「捨てゝ早。久しかりつる世の中を。又思ひ立つ旅衣、昨日の山を跡に見て。猶行く方は白雲の。海も見えたる西の空。夕日隱れの霧間より。流れも是や河内なる。土師の里にも着きにけり。

シテツレ一聲「長月の色も梢の秋を得て。照るや紅葉の土師の里。シテサシ「猶晴れ殘る音とてや。二人「松風ひとり時雨るらん。シテ「是に出でたる老人は。此里の名も土師寺の。佛神に仕へ申す者なり。二人「有り難や利生はさま〴〵多けれども。わきて誓ひも影高き。天滿神の宮寺に。歩みを運ぶ御値遇。實に身を知れ

今は他の寺にあり。むかし聖仁天皇の御宇。野見宿禰に土師の姓を賜はりしより。其住む地を曾公は其子孫なれば當寺を以て氏寺とせられしよし縁起に見ゆ。

峯も見えたる長途を經來りて。信州の山中より しより田でたるを喜ぶ心なり。梅通の地に久紅葉の土師の里は紅葉ことふ美しく。珍重せらるゝものなれば云ひかけたり。天滿宮の事。菅公の神號なり。

宮寺 社を兼ねたる寺を云ふ。

泣明寺は鐘を本尊として天滿宮を祭りたれば神に日々お田逢ひ申す御祭遇 緑の深き事。

松は十かへり 松は百年を十返して。すなはち千年目ふ花咲くものなれば云ふ。

瑞籬の宮は垂仁天皇の皇后の名なれば遠き昔の事ふかけて久しきを枕詞とす。こゝは之を前後ふして緑の陰深き意にも云ひつゞけたり。

び心なき。我等が爲めに賴もしや。ワキ「いざや歩みを運ばん。神さぶる。松に十かへり千代の秋。霜を重ねて下草の。露の身ながらながらへて。神に仕へ奉る。宮路久しき瑞籬の。深き誓ひに有り難や。

ワキ詞「如何に是なる宮人に申すべき事の候ふ。シテ詞「此方の事にて候ふか何事にて候ふぞ。ワキ「是に善光寺の如來の御夢想により。遥々當寺に參りて候ふ。寺中の人に逢ひ申し。御夢想の樣を語り申したく候ふ。シテ「不思議なる事を承り候ふ物かな。まづ御夢想の樣を此老人に御物語り候へ。某承つて寺中の人々へ廣め申し候ふべし。ワキ「あらうれしや候ふ。さらば委しく申し候ふべし。寺中の人々に御廣め候へ。シテ「心得申し候ふ。

ワキ「是に相摸の國田代と申す所に。尊性と申す聖にて候ふが。我念佛往生の志し有るにより。此度信濃の國善光寺へ參り。一

御厨子 如來を安置する開戸び。

香の衣 ちりの塵を知ふ。黒ふ黄を帶びたる色。

七社の神々 山王七社の事にか。然らば前卷の飯平に註せり。

現當二世 現在の世と當來（來世）の世と。

五部の大乘經 第一に華嚴經。第二に大集經。第三に般若經。第四に法華經。第五に涅槃經を合はせて五部の大乘經と云ふ。

埋まれたり 地中に埋め納めし其軸 經卷の軸なり。

七日參籠申す處に。如來御厨子の御戸を開き。香の衣に香の袈裟かけ給ひたる老僧の。あらたなる御聲にて。汝念佛往生の志し誠に懇なり。然らば五畿内河内の國土師寺へ。天神の御在所なり。彼所に神明を始め奉り。七社の神々を勸請申されたり。又天神へ一切衆生現當二世の爲め。五部の大乘經を書き供養して埋まれたり。其軸より木槵樹の木生ひ出でたり。其木の實を取り數珠とし。念佛百萬遍申さば。往生疑ひあるまじきと承つて夢覺めぬ。なんぼう有り難き御夢相候ふぞ。シテ「かゝる有り難き御事にて候はね。やがて寺中の人々に觸れ申し候ふべし。まづ唯今仰せられ候ふ木槵樹を見せ申し候ふべし。此方へ御出で候へ。ワキ「さらばやがて御供申し候ふべし。シテ「是に神明を始め奉り。七社の神々をいはひ申され候ふ。又此方なるに天神にて御座候ふ。あれに見えたるこそ。唯今御物語り候ふ木槵樹

いはひ申され候ふ いはひは祭るに同じ。

昔在靈山云々　佛の衆生濟度の大慈悲は。名こそ靈々にかはれども實は同一物なりとの意。むかし靈鷲山にて顯法華を法華と名づけ。今は西方淨土に在つては之を阿彌陀如來と名づけ。又娑婆の此世にあらはれては之を觀音と名づくとなり。

道明らかにうちはして云ふ。　道明寺の文字をあらはして云ふ。

和光の影を交へて世を救ふ事。　人間に光を交へて世を救ふ事。

佛の昔神の今を云ふ。　釋迦在世の時を云ふ。神德の光を受くる現世後五の時代を云ふ。　佛滅後五百年を五百歲末の五百年を云ふ。

日ふ當る今の佛法資獄時代を云ふ。

神も濁世ふ　昔公の左遷を云ふ。

て候ふよく〳〵御拜み候へ。

ワキ詞「有り難や神も佛も同一体とへ申せども。天神同意の御結緣今始めて承り候ふ。ツレ「うたての聖の仰せやな。今こそ始めぬ天神の。彌陀一体の御値遇。天神と申すこそ其御本地。救世觀音なりけ。

シテ「今在西方名阿彌陀。ワキ「實こそ〳〵是へ理なり。昔在靈山名法華。

一体。ワキ「其外神や。シテ「佛とへ。地「唯是れ水波の隔てこそ。

神佛一如なる寺の名の。道明らかに曇らぬ。神の宮寺ぞ貴き。

有り難し〳〵。實に神力も佛說も。同じ和光の影に來て。拜むぞ貴かりける。

地クリ「それ佛の昔神の今。後五の時代に至るまで。神も濁世に應じ給ひて。暫く西都に移り給ふ。シテサシ「二月下の五日にして。都を出でさせ給ひつゝ。地「此土師の里に旅宿あつて。樣々

西都古へ「大宰府の事を假ふ云ふ。「遠の朝廷」なども云へり。

二月下の五日ふして　二月廿五日へ昔公配所ふて薨去ありし日なり。都の出立へ昌泰四年二月朔日なるを作り誤れるなるべし。

君が住む宿の梢を行く〳〵も　隱るゝまでふ歸り見がする　昔公左遷の途中ふて北方ふ暫らんとてよまれし歌なり。終の句へ拾遺集ふへ「歸り見しはや」とあり。大鏡ふへ「歸り見しかな」とあり。

あたりへ都府樓の云々　昔公配所ふて作られし詩ふ。都府樓纔二瓦色。觀音寺唯聞一鐘聲。とあり。都府樓へ太宰府屬の樓。觀音寺へ其地の寺の名。

離レ家三四月。落淚百千行。　万事皆如レ夢。時々期二彼蒼一。　初句へ故郷を出で來しよりまた三四箇月なるふの意。二句へ落つる涙へ百行をも千行をも爲しては流れ〳〵行くの意。時々へ文字の加し。彼蒼へ文字の加し。彼蒼へ運を唯天ふ住すと云ふ意。

昨日へ北闕ふ云々　一條天皇の正暦五年に勅使を筑紫に遣はされ。昔公に正一位太政大臣を贈らせ給ひし時。天ふ聲ありて。

昨雖レ二北闕恋一。今作二西都客一。生涯死歸其奈レ我。

今須三望二足雲一。　と吟ぜしよし菅原記などふ見ゆ。北闕へ

の御神物をとゞめ。末代値遇の御結緣。今に絶ゆる事なし。

シテ「かくてもとまらぬ道のべの。地「草葉の露もしをるゝばかり。

クセ「君が住む。宿の梢を行く〳〵も。隱るゝまでに歸り見ぞするとの御詠め。さてうと知るぞかたじけなき。扨もいつしかに。

ならはせ給はぬ旅の空。名におふ心筑紫とて。天ざかる鄙の國に。住まはせ給ひしかば。あたりは都府樓の瓦。觀音寺の鐘の聲。明暮に響く折々は。都の春秋を。思し召し出でぬ時はなし。

シテ「家をはなれて三四月。地「落つる涙は百千行。萬事は皆夢の如し。より〳〵彼蒼を期すといふ。其御心の至りにや。昨日は北闕に悲しみを被ぶつしたり。今日は西都に恥を清むる屍たりと。御神感あらたに。生きての恨み死しての悅び。普しや天滿陽感ぞめでたかりける。

ロンギ地「實に有り難や草も木も。皆成佛の木の實まで。玉を連

ぬる光りかな。シテ「枯れたる木にだにも。誓ひの花は咲くぞかし。ましてや面前木槵樹。花咲き實なる御覽ぜよ。地「實にや花咲き實なるなる。梢の色もあらたにて。シテ「法を稱ふる理を。地「思ひの玉の。シテ「おのづから。地「あの梢の木の實こそ。此數珠の御法なれ。必ず授け申さんとて。歸ると見れば立ち留りて。我は天神の御使。名をば誰とか白太夫の。神と申す翁草の。霜曇りしてけりや。霜曇りに失せにけり。

地「久堅の。天の岩戸の神遊び。今思ひ出も面白や。地「舞樂の役役とりくに。琵琶琴和琴笛竹の。夜は更け行けども缶の役者。などや遲きぞ白太夫。急いで出でよと待ち給ふ。

後シテ「月もかゝやく宮寺の。常の燈明々たり。天女「如何に白太夫の神。社の御前に韓神催馬樂。うたふや缶笏拍子の。役とは知らずや白太夫。シテ詞「仰せは重く候へども。既に名にだに

白太夫が。星霜積る老が身の。役をばゆるし給ふべし。ツレ「いやとよ其役定りたり。急いで役をなすべきなり。シテ「扨は辭すとも叶ふまじ。扨其役は。ツレ「韓神催馬樂。シテ「庭火の影や。ツレ「朱の玉垣。地「かゝやける其中に。白太夫が小忌の袖より。取るや笏拍子とうゝと。打つも寄るも老の波の。雪の白太夫が。缶の笏拍子は面白や。

シテ「唯今かなづる舞歌の曲。地「唯今かなづる舞歌の曲。七德雙調七拍子。膝を屈して佛を敬ひ。さす腕には魔緣をはらひ。をさむる手には壽福を招き。千秋樂には民を養ひ。萬歲樂には命を延ぶる。法の筵を敷妙の。枕は枕上は尊き木槵樹の。梢に翔りて降るや一味の。風雨をうゝぎて枝々より。木の實を振ひ落して。彼尊性に與へつゝ。これこそ思ひの玉を貫く。數は百八煩惱を。かたどる數珠の。道明寺の鐘皷に。神樂の夢は覺めに

敷妙の枕の枕詞。莚を敷くと云ひかけたり。枕に秋　敵情なれば秋を枕ふし一味の雨ふる事。佛法の道はひを一味の雨ふる譬へて云ふ事に常なると。凡夫の迷ふ種々あるを百八と定めて云ふ。煩悩　「しようこ」と云ふ樂器の文字を含ませたり。文の表面へ。鐘撞ふ　百八の煩悩を撞かれて夢中の白太夫の魂を失せたるを云へるなり。

けり。

湛海　たんかい

作者未詳

長谷部湛海
鬼一法眼
作者
沙那王
シテ　トワキ　トモ　子方
鬼一法眼の軍の湛海をして沙那王を討たしめんと謀りしみ。事成らずして返り討ちふせらるゝ事を作れり。藤曲中ふも離分出来のわろき文章と知るべし。沙那王殿　義經の幼名。

北白川湛海坊　湛海の住所。偽より出でたる武士なれば云ふ。斯くの如き人皆時代の戦ひの類なり。武蔵坊常陸坊土佐坊の類なり。

ワキ詞「かやうに候ふ者は。二條堀川に居住仕り候ふ鬼一法眼とは我事なり。扨も故左馬の頭義朝の八男。沙那王殿と申すは。某師弟の契約仕り候へども。いさゝかの子細候ふ間。ひろかに討つて捨てばやと存じ候ふ。然れども兵法勝れ給ひ。麁忽には叶ひ難く候ふほどに。智にて候ふ長谷部の湛海。彼は器量第一の者にて候ふほどに。彼を頼み討たせばやと存じ候ふ。いかに誰かある。トモ詞「御前に候ふ。ワキ「汝は北白川湛海坊へ參り。少し談ずべき事の候ふ間。御出であれと申し候へ。トモ「畏つて候ふ。

トモ詞「如何に此内へ案内申し候ふ。シテ詞「誰にて渡り候ふぞ。トモ「鬼一法眼よりの御使にて候ふ。申し談ずる事候ふ間。唯今御出であれとの御事にて候ふ。シテ「心得てある。やがて參らうずるにて候ふ。ワキ「此方へと申せ。トモ「畏つて候ふ。かう〳〵御通りあれとの御事にて候ふ。シテ「扨唯今は何の爲めの御使にて候ふぞ。ワキ「さん候ふ唯今申し入るゝ事餘の儀にあらず。内々申す如く沙那王殿某が秘藏の兵法の一卷を盗み取り候ふ程に。彼者をひろかに討ち取り。卷物をも奪ひ返さばやと存じ候ふ。誰々と申すとも。貴方ならでは沙那王を討つべき人はおぼえず候ふ間。扨申し入れ候ふ。シテ「言語道斷の事にて候ふ者かな。此上は某。が手にかけ討ち取り候ふべし。御心安く思し召され候へ。たと

やれかしら　如何であると云ふ意

夕顔の花の宿　源氏物語の古事によりて云ふ。第四卷夕顔に委し。こゝは唯五條の形容詞と見るべし。

其跡とへば　源氏の古跡を訪へばの意。

古跡を探るなどの意よりいせじと急ぐよしなり。

待つほどの苦しき物か郭公一聲いうげ曉の空　古歌を引きて望ちる心を云ふ。

ひ猛威を振ふとも。やはか討ち損ずる事の候ふべき。ワキ「誠に頼もしき御事にて候ふ。さらば沙那王をすかし出だし。五條の天神へつかはし候ふべし。御身も跡より御忍びあつて。あれにて討つて賜はり候へ。シテ「實に此上はともかくも。片時も急ぎ申すべし。御心安くおぼしめせ。地「御心安くおぼしめせ。さらばよ鬼一これまでぞ。彼小冠者を討たずは。此後御目に懸かるまじ。手取りにせんと廣言し。座敷を立つて湛海は。歸る心ぞ恐ろしき。

子一聲「扨も沙那王は。師匠の仰せに從ひて。五條の天神へ參らんと。地「夕顔の花の宿。五條あたりのあばらやの。其跡とへば黄昏に。よろ目はせじな一筋に。頼む誓ひの末清き。五條の神に詣でけり。

後シテ一聲「待つほどは苦しき物か郭公。一聲急げ曉の空。されば湛海其夜の出で立ちには。黒糸威の腹卷に。白拵の長刀うちかたげ。沙那王おそしと待ち居たり。子「かくとも知らで沙那王は。神前を拜し奉り。立ち歸らんとせし處に。シテ詞「湛海早く見つけつゝ。すはや是ぞと近づきより。如何に沙那王殿。夜陰の歸るさの覺束なさに。御迎へに湛海參りたりと。さもあらけなく云ひければ。子「あら思ひよらずや。我身に取つて堪海に意趣はなし。扨は鬼一が下知にしたがひ。某が討手に向ひしよな。如何に湛海。いかなる意趣の有りて。我を討たんと思ふぞや。シテ「あら事々しや意趣までもなし。お事のたくみ顯はれたり。尋常に勝負あれ。日頃の廣言唯今なるぞと。長刀やがて取り直し。地「長刀やがて取り直し。無慙や小冠者嵐となさんと。踊り上つて切り拂ふ。元より沙那王騷がばこそ。日頃ならひし秘術は。今こそこゝにあらはし衣の。飛鳥の翔りに。左足をつかひ

神前を拜し　天神を參詣せしなり。

あらはし衣の　源氏物語より出でたる詞。こゝにたゞ秘術をあらはすと云ふまでの意。

突けばはづしたれば　湛海が。沙那王が。
飛び討てば　湛海が。沙那王が。
乗すれば　湛海が長刀を。
乗つて拂へば　沙那王が。湛海が。
しさつて拂へば　沙那王が。湛海が。
飛び上り

かげろふ稻妻　はたらきの神速なるを云ふ。

シテ　明石上
ツレ　侍女
ツレ　光源氏
同　男
子方　幡若（家臣）
ワキ　住吉の神主
ワキツレ　摂津
源氏　光源氏

て切り給へば。湛海も大長刀を。木車に廻してかゝれば。ちやう〳〵と透間を切り。さばかり猛き湛海も。御曹司の小太刀に切り立てられて。あきれはてゝ立つたりける。扨も無念の次第やなと。走りかゝつて突けばはづし。討てば飛び。乗すれば乗つて手もとれより。しさつて拂へば飛び上り。飛行自在に戰ひ給へば。今は湛海勢力盡きて。賴む長刀打ち落とされ。組まんとすれば切り拂ふ。かげろふ稻妻姿を失ひ。たゞよふ處を首打ち落とし。喜び勇みて牛若は。鞍馬へ歸らせ給ひけり。

住吉詣　すみよしまうで

作者未詳

ワキ詞「是は攝州住吉の神主。菊園の何某にて候ふ。扨も此頃都に於て暑れならびなき光る源氏。さる宿願の子細あつて。當社御參詣と仰せ出だされ候ふ程に。社人ども立ち出でゝ社内を

（罪障けて京都の繁り再び咲花の身と爲りて今日の參詣あり）たる。明石上の縁り攝磨の國に流されて姫君を安產せしかば。是も御願まおりの思ひ立ちし時なりと知るべし。

さる宿願の　左遷の日の早く無罪の身と爲りて歸洛せん事を新り祈られたる御願はたしを云ふ。

直わ治まる　路の直行なると政治の正直の行はるゝと。

薄き日影も　歌なれば云ふ。

交野　河内にある狩場の名。

春見し花のそれならん　春の頃花見の來てながめたる櫻の木の今は紅葉の色の染めかへたるの意。交野のみの櫻狩とよみたる古歌あれば云へるなり。

瑞籬の　久しきの枕詞。

和光同塵は云々　止觀の。和光同塵結緣之始。八相成道以論二

も清め。其心得をなすべき由申し付けばやと存じ候ふ。

一同一聲「小車の轅もつゞく都路の。直に治まる時代かな。惟光

「そも〳〵是はほまれ世に越え威光曇らぬ光る源氏にておはします。扨も此君賴みをかけし。住吉の神に所願を滿てんと。

一同「今日思ひ立つ旅衣。薄き日影も白鳥の。鳥羽の戀塚秋の山。

過ぐれはいとゞ都の月の。面影隔つる山崎や。關戸の宿も移り來ぬ。歌「拂はぬ塵の芥川。猪名の笹原分け過ぎて。見渡せば薄霧まがふ其方より。ほの見えそむる村紅葉。これや交野の雪

暮れて。春見し花のそれならん。猶行くさきは渡邊や。大江の岸に寄る波も。音立てかへて住吉の。浦わになるも程ぞなき。

源氏「聞きしにていよ〳〵有り難き。神の誓ひも潔き。浦わの波の瑞籬の。久しき御代を守り給へ。地「日の本の。神の誓ひはおしなべて。和光同塵は結緣の御始め。八相成道は利物の

其終一。とあり。先づ佛の光を和らげ神とあらはれて世の塵ふ觀しく交いるが。衆生結緣のはじめふて。次ふ佛道を成就し衆生を利益するが其終ずとの意。八相の事ハ第五卷白鬼を見るべし。

八人の八少女五人の神樂男　八少女ハ八人の舞姫。神樂男は笛鼓ふて神樂をなす役者。神樂の曲名なり。

幾久方の　幾久しきの意ふ云ひかけたり。久方ハ天の枕詞。天地開闢を入れて見るべし。

來し方の　過去ふ立てたる御願を云ふ。

うちそへて　現在未來をも祈り添ふるの意。

河原の大臣の御例として　源融ハ左大臣にて六條河原に住みし故に云ふ。此人の光榮に習ひて光源氏も前隨身を賜ハりしよしなり。

童隨身　隨身ハ弓矢を帶びて隨從ずる武官を謂ふ。延より賜ハるを云ふ。其童なるハ風流優美を主とせし意なるべし。

終はてしなきまで。國富み民を憐む御心を。誰かは仰がざるべき。

ワキ詞「唯今の御參詣めでたう候ふ。惟光「さあらば祝詞を參らせられ候へ。ワキ「いで〳〵祝詞を申さんと。神主御幣を捧げつゝ。既に祝詞を申しけり。謹上再拜。敬つて白す神慮をすゞしめの神樂。八人の八少女五人の神樂男。颯々の鈴の音。ていとうの鼓の聲々に。うたふ榊葉の神歌。幾久方の天地開闢。泰平諸人快樂。福壽圓滿に守らしめ給へや。うも〳〵立つる所の諸願成就皆令滿足。有り難や。

地「來し方の。御願に猶もうち添へて。さら有り難き神慮の。納受もか〳〵やと。感涙肝に銘じけり。いよ〳〵悅びの御盃。神主にたびければ。折節御供に。河原の大臣の御例とて。內より賜はれる。童隨身共時に。御酌に立ちて慰めの。今樣朗詠す。子「一樹の陰や一河の水。地「我見ても。久しくなりぬ住吉の。岸の姫松幾世へぬらん。地「千代萬代の舞の袂。いよ〳〵めぐる盃の。有明になる沖つ舟の。ほの〴〵明くる住吉の。浦より遠の淡路島。あはれはてなき詠めかな。

シテ一聲「明石潟月まつ方に行く舟の。波しづかなる浦傳ひ。歌「舟出せし。後の山の山おろし。關吹き越にて行く程に。須磨の浦わもいつしかに。跡の名殘もおしてるや。難波入江によすなる。波はさながら白雪の。津守の浦に着きにけり。

ツレ「松原の深綠なる木陰より。花紅葉を散らせる如くなる。色の衣々かず〳〵に。の〻しりて詣づる人影は。いかなる人にて有るやらん。惟光「是は。都に光る君。過ぎにし須磨の御願はたしに。詣で給ふといさ知らぬ。人もありける不思議さよ。あら恥

今樣　當時流行の詩歌。

白拍子　詩に舞を附して謠ふ事。白拍子の歌ふ曲をもいふ。

我見ても　久しくなりぬ住吉の岸の姫松幾世へぬらん　伊勢物語の歌を引く。我見おぼえてからさへ久しくなりたるふ。其以前の事を考ふれバ限り知られぬの意。

有明になる方ふなる事。　一夜餘ひ遊びて明月まつ方ふするを云ふ。

住吉をさして出船　住吉の海岸を云ふ。

後の山　須磨の名所。須磨の關を風の吹越ゆると。我舟の須磨を行き過ぐるとを乘ぬ。

難波の枕詞。

津守の浦　住吉の海岸を云ふ。

むもうへの空の　心の身を深れぬを云ふ。斯かるやつれたる樣ふて御目ふかゝるが恥づかしければなり。　他ふかちあへぬ月日こそあれ　月日も有るべきふの意。

玉だすき　かけも離れぬ宿世とは　同日同時ふ逢り合へせたるを思へば。離るゝ能はざる縁とは知れどの意。

歸るも中空に　今更かゝれ遊うん事へどちつかずの中途半端を云ふ。既に其姿を御供の人に見られたればなり。

難波の方に舟とめて　住吉を避けん爲めふ暫く難波の方へ舟をやらんとするなり。

忍ぶもちずり　舟人の身を忍ぶよしふ云ひかけたり。河原左大臣の「みちのくの忍ぶもぢずり」の歌ふよりて「誰」の文字につゞけたり。

よそに調べの中の緒の　明石上と共に住まれし旧。歸京近くなりたる頃光源氏のよみかけられたる歌に「逢ふまでのかたみの緒の中の緒の」とあるを引き、「逢ふまでのかたみの緒の中の緒の」と云ふ。此音たがへぬさきに必ず逢り見ん（以上歌）と解あるを引く。中の緒は琴の長中の糸を云ふ。

北音たがはず　今合はせ違きたの意。

岸に住吉の　早く忘れ草ふてふ草をもらんの意。住吉の岸に忘草と云ふ草生じて。それを摘めば何事も忘るゝよしふ古來云ひ習はしたり。「住吉の岸ふ生ふてふ忘草しるしありやとつみてかへらん」など、の古歌あり。

其かねの音もあらじかし　歸れて約束もせざりしふの意。

乳母　明石上の供して來たる侍女なり。

おもはゆながらも　恥づかしながらもの意。

うつり舞　心が舞ふ樣ふなり。うつり舞ハ舞の作たるを云ふ。

法ふある名。　身をつくし恨ふるしるしふこゝまでもめぐり來ふける樣ハ深しなみをつくしハ水の淺深を知らずを杭みて難波江の名物なり。それを身を盡しの心に用ひて云ふ。一方ならず戀し〳〵思ひたるかひありて。今日こゝみて同日ふ逢ひたるよと。源氏のよまれし歌なり。

敵ならで　何への事もかひなきふ何身をつくし恨ひそめけん　人敵ふもあらぬ戀しき身なれば。何事もはかゝしき事をなふ。その身分をも顧みずして何とて源氏の如き御方をば恨ひそめるしなら人。されば忘れ給ふも無理ふあり非ずと明石上の返歌せしを

入江の田鶴も　古今集ふ「難波潟汐滿ち來らし潟十衣田蓑の島ふ田鶴鳴きわたる」とあるを引く。源氏と明石と心を述べつゝして泣くのみなら旅衣たみのゝ島　旅衣のたむと云ひかけたり。「たむ」ハぬれしをるゝの意。難波の名所なり。昔の左遷も旅。今の住吉詣も旅なれば「旅ふ似たる」と云へり。

のぼれば下るや稻舟の　古今集ふ「もがみ川のぼればくだる筒ふのあふ此月ばかり」とあるを引く。稻舟ハ稻束みたる舟をれどこゝふは其意ふ必用なし。源氏ハ上りて歸京し明石は下りて歸帰すの事を云へるなり。

ほのゝ　人麿の歌の詞を用ひて云ふ。明石の浦わの

づかしや光る君と。　聞くより胸うちさわぎつゝ。　いとゞ心も上の空の。　惟「月日こそあれ今日此頃。　詣で來んとは。　シテ「白露の地「玉だすき。　かけも離れぬ宿世とは。　思ひながらも中々に。　此有樣を。　よろの見る目も恥づかしや。　さりとては浦波の。　歸らば中空に。　ならんもうしやよしさらば。　難波の方に舟とめて。　祓へだに白波の。　入江に舟をさし寄する。　ロンギ地「不思議やな。　有りし明石の浦波の。　立ちも歸らぬ面影の。　うれかあらぬか舟影の。　忍ぶもちずり誰やらん。　シテ「誰ぞとは。　よそに調べの中の緒の。　其音たがはず逢ひ見んの。　頼めを早く住吉の。　岸に生ふてふ草ならん。　源氏「忘れ草。　生ふとだに聞く物ならば。　其かね言もあらじかし。　地「實になほざりに頼め置く。　其一言も今ははや。　源氏「有りし契りの緣あらば。　地「やがての逢ふ瀬も程あらじの。　心は互に。　替はらぬ影も盃の。

度重なれば惟光も。　惟光「乳母御酌をとりぐの。　地「醉ひに引かるゝ戯むれの舞。　おもはゆながらもうつり舞。

シテ「身をつくし戀ふるしるしにこゝまでも。　地「めぐり合ひける緣は深しな。　シテ「數ならで。　難波何はの事もかひなきに。　何身を盡し思ひうめけん。　互の心を夕汐滿ちきて。　地「入江の田鶴も聲をしまぬ程。　あはれなる折から。　人目も包まず逢ひ見まほしくは思へども。　早漕ぎはなれて行く袖の露けさも。　昔に似たる旅衣。　田蓑の島も還ざかるまゝに。　名殘も牛の車にめされて。　上れば下るや稻舟の。　舟影もほのぐと明石の浦わの。　舟をし思ひの別れかな。

前シテ　母　松若
子方　後シテ　泉蘇
ワキ（先達）師匠　梨
ツレ（小先達）、一同）同行山伏
間狂言　前は京都、後は大和

師匠　開梨の弟子なり。松若と云ふ少年を入門せしめ、修行させんとて乞ひ起りし爲め、母子別れ。山中みて病の目みて遂ひたる爲め、谷行と云ふ殘酷なる功德ありて再び生きかへりし物語を作れり。

今熊野　京都にあり。紀伊の熊野をうつして觀音を祭れる寺。

峰入り　佛道修行の爲め深山に入る事。

唯今出京　今熊野へ京都なれども、洛外の地なれば。洛中に入る事をば出京と云へるなり。

谷行

たにかう

氏信作

ワキ詞「是は今熊野椰の木の坊に。師の阿闍梨と申す山伏にて候ふ。扨も某弟子を一人持ちて候ふが。彼者の父空しくなり。母ばかりに添ひて候ふ。又某は近き間に峯入りを仕り候ふ程に。暇乞の爲めに唯今出京仕り候ふ。いかに案内申し候ふ。子詞「誰にて御入り候ふぞ。や。師匠の御出でにて候ふよ。ワキ「如何に松若。何とて久しく寺へは上り給ひ候はぬぞ。子「さん候ふ母御の風の心地にて候ふ程に參らず候ふ。ワキ「言語道斷。ゆめ〳〵左樣の事をも存ぜず候ふ。まづ〳〵某が參りたる由御申し候へ。子「如何に申し候ふ。師匠の御出でにて候ふ。シテ詞「此方へと申し候へ。子「此方へ御入り候へ。ワキ「久しく參らず候ふ。又松若申され候ふは。風の心地の由承り候ふ。如何樣に御座候ふぞ。

シテ「風の心地は苦しからず候ふ。御心安く思し召され候へ。ワキ「扨はめでたう候ふ。又近き間に峯入りを仕り候ふ程に。御暇乞の爲めに參りて候ふ。シテ「實に〳〵峯入りとやらんは。大事の行とこそ承りて候へ。扨松若も御供にて候ふか。ワキ「幼き者の供すべき道にてはなく候ふ。シテ「扨はめでたうやがて御歸り候へ。ワキ「さらばやがて參らうずるにて候ふ。子「いかに申すべき事の候ふ。ワキ「何事にて候ふぞ。子「松若も峯入りの御供申さうずるにて候ふ。ワキ「いや〳〵唯今も母御に申し候ふ如く。此道は難行捨身の行体にて。思ひもよらぬ事にてあるぞ。其上母の風の心地を見捨つべきにあらず。かたく思ひもよらぬ事。唯とまり候へ。子「いや母の風の心地にて候へば。御祈りの爲めに參らうずるにて候ふ。ワキ「さあらば此由を母御に申さうずるにて候ふ。又參りて候ふ。松若峯入りの供せうずる由申され候ふ母に云ふ詞。

難行捨身の行体　身を捨てたる出家の難行苦行すべき道なれば。如手の松若などゐ必用なきの意。

御祈りの爲めに　母の病氣本復を祈らんためゐの意。

御身の父ゑおくれし日より　父ゑ死別せし以來の意。是より松若ゑ向ひて云ふ詞。

思ふ心を思へかし　母の思ふ心ハ親若も思ひ察せよとなり。

深きや涙　孝行の深きと涙の深きとを兼ねたり。

歸るさの心をとめて　早く歸路ゑ就かんとの心を持ちての意。足引の　足を長くの意ゑかけたり。常ゑハ山の枕詞なるをこゝハ大和ゑ用ひたり。手向みハつゝりの袖も切るべきゑ

間。母御の風の御心地と云ひ。難行捨身の道と申し。かたく叶ふまじき由申して候へば。御祈りの爲めに供すべき由申されく。峯入の御供申さん事こそ。尤望む所なれども。御身の父におくれし日より。唯一人子のひたすらに。身に添ふ時だに見ぬひまは。露程だにも恪られず。思ふ心を思へかし。唯思ひとまり候へ。子「仰せはさる事にて候へども。身は難行の道に出でて。母の現世を祈らんと。思ひ立ちたるばかりなりと。地「かきくどきたる其氣色。師匠も母も諸共に。あはれ孝行の。深きや涙なるらん。

ロンギ地「此上なれば力なし。さらば師匠の御供して。とく〳〵歸り給へや。子「歸るさの。心をとめて出づる日も。やがて急ぐや足引の。大和路遠き思ひかな。シテ「思ひを盡す手向には。子「つ

（杭葉ゑ幽ける神や返さん）古今集の歌を引く。手向とハ道中安全を祈りて旅人の神ゑ奉るもの。つゝりハ織ぎぬの衣を云ふ。

よそゑのみ見てや止みなん葛城や高間の山の峰の（白）雲　新古今集の歌を引く。

拾遺集人丸の歌ゑ「山科の木幡の里ゑ馬ハ有れど徒歩よりぞ來る君を思へば」とあるを引く。「こハ」ハ「此ハ」と「子ハ」とゑ兼ねて又「木幡」をゑみたり。木幡ハ京都と宇治の間の地。

都出でゝ今日みかの原いづみ川河風さむし（衣かせ山）古集の歌を引く。みかの原も泉川今も山城相樂郡ゑあり。泉川ハ今の木津川の古名。

河風さむみ千鳥なく　右の歌を拾遺集貫之の「思ひかねぬ妹が行ばば冬の夜の河風さむみ千鳥なくなり」の歌ゑつゞけて引く。

ふりさけみれば　木津川を渡り奈良ゑ近づきたるなり。仲麿の歌を引く。

さし過ぎて　笠（傘）の緣ゑて「さし」と云ふ。下の「布留」も笠ゑ緣ある雨の詞なり。

布留　奈良と三輪の間の地。石上神社あり。

これ我庵と　三輪の山本ハ玄賓

づりの袖も切るべきに。地「別れはさま〴〵の。行く末知ればよりてのみ。見てや止みなん葛城や。高間の山の峯の雲。晴れぬは親の思ひ子の。名殘惜しさをいかにせん。

ワキサシ「かくて小童思ひの外。峯入の姿山伏の。兜巾篠懸苔の衣。一同「今日思ひ立つ道のべの。便りも深き志し。唯孝行の神力に。馬はあれども徒歩に行く。こは誰が爲めぞ宇治の里。都出で。今日三香の原泉川。河風さむみ千鳥鳴く。聲こそ今日の夕べなれ。ふりさけ見れば春日なる。三笠の山をさし過ぎて。布留の神杉過ぎがてに。三輪の山本ように見て。たれ我庵と定めけん。峯のいはほの苔衣。かたしきうむる葛城の。露こそ宿りなりけれ。

ワキ詞「急ぎ候ふ程に。是は早一の室に着きて候ふ。暫く是にあちらうずるにて候ふ。小先達「承り候ふ。子「いかに申すべき事の

但都の座結びたる古跡なれば云ふ。第五卷の三輪見合すべし。一の室二の室以下いくつも行者のとまるべき室ある故云ふ。谷行峰入同行者に病人ある時は谷に留る、規則なるを云ふ。其作法は下文に見ゆ。

候ふ。ワキ「何事にて候ふぞ。子「道より風の心地にて候ふ。ワキ「暫く。此道に出で〻左樣の事をば申さぬ事にて候ふ。それは習はぬ旅の疲れにて有るべし。よく〳〵休み候へ。

小先達「松若殿道より風の心地の由承り候ふ。先達に尋ね申さうずるにて候ふ。ツレ「尤にて候ふ。小先達「松若殿風の心地と承り候ふは。何と御座候ふぞ御心もとなく候ふ。ワキ「さん候ふ是はならはぬ旅の疲れにてありげに候ふ。苦しからず候ふ。小先達「扨は御心安く候ふ。ツレ「いかにかたぐ〳〵申し候ふ。松若殿旅の疲れの由仰せられ候ふが。以ての外に見え給ひて候ふ。何として大法の如く谷行に行ひ給ひ候はぬぞ。小先達「實れ〳〵是は尤にて候ふ。さらば先達へ其由申さうずるにて候ふ。如何に申し候ふ。先に松若殿の御事を尋ね申して候へば。旅の疲れと承り候ふが。今ははや以ての外に見えさせ給ひて候ふ。憚り多き申し事にて候へども昔よりの大法にて候へば。谷行に行ひ申さうずるよし皆々申され候ふ。ワキ「何と松若を谷行に行はれうずると候ふや。小先達「さん候ふ。ワキ「大法の事にて候ふ程に。是非をば申さず候ふさりながら。彼者の心中あまりに不便に候へば。大法の由を懇に申し聞かせうずるにて候ふ。小先達「尤にて候ふ。ワキ「如何に松若たしかに聞け。此道に出で〻かやうに違例する者をば。谷行とて忽ち命を失ふ事。是れ昔よりの大法なり。御身にかはる物ならば。何か命の惜しからん。進退窮まりて候ふ。子「仰せ承り候ふ。此道に出で〻命を捨てん事こそ。尤も望む所なれども。母の御歎きの色。うれこそ深き悲しみなれ。又かりうめも他生の緣。皆人々に御名殘こそ惜しう候へ。地「何といひやる方もなく。皆聲をあげ涙に。むせぶ心ぞあはれなる。

一同サシ「かくて面々一同に。あはれ悲しき世の習ひ。ことさら是

御身にかはる物ならば　先達身代りに立たるものなりの意。

冥見。　神明の見給ふところを云ふ。

くれ〳〵と　目の涙み〳〵らむ事。

あやなく　無分別ふも落涙せらるゝを云ふ。

せかれぬ道　悲のせきとめ難き意と。大法の道の止められぬ意とを兼ね。

身も諸共に　先遠の身も松若と共にの意。

夢幻云々　夢の如く。さぼろしの如く。

泡影の如く　泡や物の影の如くまた蜻蛉の如く。世間一切の物はすべてはかなき觀念を與ふべしとの意。

火宅の門　人間界の苦しさを火のつきたる家ふ譬へて云ふ。

三界　欲界色界無色界と云ふ迷の三世界を云ふ。

親子恩愛の云々　師弟の別離が親子ふ比せらるゝほどの厚情なるを云ふ。

上ふおはふや　松若の身の上ふ石や瓦を積みあげたるなり。

雨つちくれを云々　君が代の治まれる時ふへ。雨土くれを動かさずとしふ事あるを用ひかへて云ふ。石瓦と共ふ土などを身ふ積む事と。人々の心を動かして其痛へしさを感ぜしむる事とふ用ひしなり。

は大法の。冥見私なきまゝに。谷行にこそ行ひけれ。ワキ「先達も師弟の契りの中なれば。何といひやる方もなく。唯くれ〳〵と目もあやなく。地「泣く涙。せかれぬ道なれば。身も諸共に兎も角も。ならばやと思ふさへ。叶はぬ事ふ悲しき。悲しみの。至りて悲しきは。生別離の心なり。中々死別ならば。かほどの歎きよもあらじ。クセ「一切有爲の世の習ひ。如夢幻泡影如露亦如電。應作如是觀の心をも。思ひ知らずやさしも此。行者の道には出でながら。火宅の門を去りやらで。猶安からぬ三界の。親子恩愛の。歎きにひとしかりけり。小先達「かくて時刻も移ると。地「皆面々に思ひ切り。邪見の劒身を碎く。心をなして彼人を。けはしき谷に陷れ。上におほふや石瓦。雨壞を動かせる。心を痛め聲をあげ。皆面々に泣き居たり。

小先達詞　早日のたけて候ふ。急ぎ御立ちあらうずるにて候ふ。

ワキ詞「愚僧は罷り立つまじく候ふ。小先達「先達の御立ちなく候ひては。我々は何と仕り候ふべき。唯急いで御立ち候へ。ワキ「まづ案じても御覽候へ。我等都に上り。彼者の母には何と申すべきぞ。所詮病氣も歎きも同じ事にて候へば。我等をも谷行に行ひて賜はり候へ。小先達「御歎き尤にて候ふ。如何にかたく〴〵へ申し候ふ。先達の仰せ候ふは。病氣も歎きも同じ事なれば。先達も谷行に行ひ申せと仰せ候ふ。扨何と仕り候ふべき。ツレ「實に〳〵御歎き尤にて候ふ。我々存じ候ふは。此年月の行德もかやうの時にてこそ候へ。開山役の優婆塞。并びに大聖不動明王のさつくにかけ。松若殿の御命をふたゝび蘇生させ申さうずるにて候ふ。小先達「是は尤にて候ふ。如何に申し候ふ。皆々申され候ふは。此年月の行德もかやうの時にてこそ候へ。開山役の優婆塞。殊には大聖不動明王のさつくにかけ。松若殿の御命を

病氣も歎きも同じ事　病氣ハ身の穢なりとて谷行ふ行ふ大法ある以上ハ。悲歎も心の穢なれば同樣の所刑を受くべきの意。

開山　役行者小角ハ文武天皇の頃葛城山を開きたり。

さつく（ハ）を云ふ。不動の手ふ執る索（なわ）を云ふ。

蘇生させ申さうずる由皆々申され候ふ。ワキ「左様の事こそ聞かまほしう候へ。我等も是にて祈念申さうずるにて候ふ。

一同「扨も師匠の其なげき。理すぐる有様を。見聞くもおなじ心かな。ワキ「さりとも年月頼みをかくる。大聖不動明王の威力。

一同「又は山神護法善神。ワキ「殊には開山役の優婆塞。一同「愛憐納受垂れ給ひ。地「使者の鬼神の伎樂伎女を。遣はし助けおはしませ。

地「伎樂鬼神は飛び來つて。行者の御前にひざまづいて。頭を傾け仰せを受けて。谷行に飛びかけつて。上に蓋へる土木磐石。押し倒し取り拂つて。上なる土をばやはらぐと。靜かに返して彼小童を。つゝがもなく抱きあげ。行者の御前に參らすれば。行者は喜悅の色をなし。慈悲の御手に髮を撫で。善哉々々孝行切なる。心を感ずるぞとて。歸らせたまへば伎樂も共に。御先

伎樂伎女　唐樂三韓樂の渡來以前ふ行われた呉國の樂を伎樂と云ふ。其音樂を司る男神女神を役行者の部下に屬せしめて使役するなり。

谷行ふ飛びかけつて行してある場所に急ぎ至りての意。

御先をはらつて　行者の先驅をするなり。

をはらつてさかしき路を。分けつくゞりつ上るや高天の。雲霧つたふや葛城の。人の目にこそかゝらざれども。まことは渡せる岩橋を。大峯かけて遥々と。虛空を渡つて失せにけり。

龍虎

信光作

ワキ次第「法の道にと思ひ立つ。波洛遥けき船路かな。謂「是は諸國一見の僧にて候ふ。我若年の時よりも。諸國修行の志あるにより。日本をば殘らず見廻りて候ふ。又承り及びたる佛法流布の跡を尋ね。入唐渡天の望みあつて。此間は九州博多の津に候ふ處に。よき便船の候ふ間。此春思ひ立ち渡唐仕り候ふ。道行「天の原。八十島かけて漕ぎ出づる。船路の末もしら波ひの。笹紫を跡になしはてゝ。行くへにつゞく雲の波。霞を分くる海原に。又山見にて程もなく。早唐土に着きにけり。

前シテ　ツレ　後シテ　ツレ　ワキ　ワキツレ　龍虎　旅僧　龍虎ハ唐土入唐の僧龍虎の取ふ姿を眼前に見たる事を作れり。

上るや高岡の意ふかけて云ふ。由の名を高天原の意ふかけて云ふ。天上ふのはりかへるよしなり。

役行者が鬼神を使役して葛城を大峯の間ふ作りかけたる岩橋ハ。現世の人の目ふ見ねざれども。實ハ虛空ふかゝり居るの意。それを鬼神ハ渡りて歸るなり。

八十島かけて　古今集なる小野篁の歌より來れる詞。澤山の島島をかけて過ぎゆく船路の遠きを云ふ。

しらぬひの　筑紫の枕詞。

行人安穩に　旅人の無事なる布帆つゝがもなく　船中の海をかりしを云ふ。

折を得て　春の時節ふ逢ひての意。花を折るの意ふかけたるふもあるべし。春の薪ふさす花を　花の枝を薪ふ挿し添ふるを云ふ。

五嶺蒼々雲往來。但韓大夢高株梅　明跡集菅原文時の詩句を引く。五嶺ハ大庾。始安。臨賀。桂陽。揚陽。の五山を云ふ。大庾嶺梅と　昔し英州の司馬たりし人が數十本の梅を大庾嶺ふ植ゑしより。梅の名所と爲りたる古事を思ひて云へるなり。

ワキ詞「あらうれしや候ふ。遥々と思ひしに。佛神の御加護もや有りけん。行人安穩に布帆恙もなく渡唐仕りて候ふ。心靜かに所々を一見せばやと存じ候ふ。實にや江霞浦を隔てゝ人煙遠し。湖水天に連なつて雁天遥かなり。詠めやる遠山本の村竹の。霞みこめたる面白さよ。又是なる岨づたひを山人の來り候ふ。此者を待ち名所をも尋ねばやと存じ候ふ。

シテツレ一聲「折を得て春の薪にさす花の。匂ひを運ぶ山おろし。ツレ「谷の下菴はるゞゝと。二人「霞に遠き詠めかな。シテサシ「五嶺蒼々として雲往來す。たゞ憐む大庾萬株の梅。二人「梢も殊に色深き。木陰によれば心なき。身にもあはれは有明の。つれなき命ながらへて。又廻り逢ふ春べかな。誠に知んぬ老も。風情少なき有樣を。歌「見る度に。かばる姿やます鏡。移る月日は程もなく。昨日は少年。今日白頭の雪とのみ。積り〳〵て老が身の。

春の光りふ當れども。古今集素秀の歌に「春の日の光にあたる我なれど頭の雪とのみ降りて云ふ。

佛法東漸を　佛法の道々弘まり　ゆゝ日本國をの意。

星の國にと　天竺を云ふ。心せよ胸の月云々　目前にても見らるゝものを捨てゝ之を遠方ふ求めんとするは。愚の至なりとの意。日本ふても佛法修行は出來。我身に帶ねても佛心ふ得らるべきに。天竺まで渡らんとするを戒めたるなり。

春の光りに當れども。わびしき業を柴取りて。歸る山路の苦しさよ。

ワキ詞「如何に是なる山人に尋ね申すべき事の候ふ。シテ詞「不思議やな見馴れ申さぬ御姿なり。いかさま是は入唐の沙門にて御座候ふな。ワキ「實によく御覽じて候ふものかな。我日本より此國に渡り。佛法流布の古跡を尋ね。是より渡天の志あるにより。遥々思ひ立ちて候ふ。シテ「扨は渡天の御爲めかや。昔は聞きつ近き世には。有り難かりける御事かな。ツレ「實に痛はしや遥々と。行くへも遠き旅衣の。シテ「立ち出で給ひし日本の。佛法東漸を振り捨てゝ。ワキ「去りてし法の跡遠き。シテ「昔語りを今さらに。ワキ「誰か委しく夕月夜。地「星の國にと行く雲の。はてしはあらじ人心。心せよ胸の月。よその光りを尋ねても。いつにかはせんまのあたり。見るを尋ぬるはかなさよ。

蝸牛の角の上爭ひ（蝸牛）とあり。つまり四國爭の譬に用ふ。白氏文集に。蝸牛

ワキ詞「かゝる面白き御答へこそ候はね。先々尋ね申したき事の候ふ。見に渡りれる山河のけしき。何れも妙なる詠めの内に。あれに霞める遠山本の。向ひに見えたる竹林に。俄に雲の打ち掩ひ。風冷ましく吹き落ちて。さながら氣疎き其けしき。是は如何なる事やらん。シテ詞「實に御不審は御理。あの竹林の岩洞は虎のすみかにて候ふを。向ひに見にたる高山より。常々雲の掩ひつゝ。龍虎の戰ひある物を。ワキ「不思議の事を聞く物かな。音に聞きしをまのあたり。龍虎あらうふ其有樣を。今見る事の不思議さよ。シテ「畜類なれどもかくの如く。其勢を顯はして。シテ「何をかさのみ。ワキ「あらそひの。地「蝸牛の角の上にして。はかなや何事を。爭ひは人の身も。替はらぬ物を世の中の。習ひなればや畜類の。戰ふ事も理や。ワキ詞「猶々竜虎の戰ひの有樣委しく御物語り候へ。地クリ「ろれ

内の清きを中の空虛なるを心の清きに比して云ふ。

四睡　豐干禪師と虎と寒山と拾得との熟睡したる體を世に四睡と云ふ。虎ハ豐干禪師の愛獸なり。

生を受くる者。其身の威勢を爭ふ事。人間以て是に同じ。必ず龍虎に限るべからず。シテサシ「然れば金龍雲を穿ち。猛虎深山に風を起す。地「何れも勢妙にして。互の勢を爭ふ事。畜類といへども位高く。雲井に住めば龍虎の紋。シテ「帝の御衣にも之を織り。地「殊に天子の御顏を。龍顏と申し御乘物を。龍駕とも又名付けたり。クセ「扨又虎はかりうめに。住むも千里の道しめて。住家と定むとか。本來竹は直にして。内の清きを我友と。頼む千尋の陰清く。曇らぬ法の道を知る。羅漢に仕へ奉る。又は四睡の一つにも。顯はれけると聞く物を。龍吟ずれば雲起り。虎嘯けば風生ずと。聞きしもまのあたり。見るこう不思議なりけれ。シテ「是ゞ和國の物語。地「委しく猶も見給はゞ。此山陰のうばづたひ。竹の林の此方なる。巖の陰に立ちよりて。身を隱し見給へと。夕日も傾きぬ。暇申さんと結ふ柴の。薪を肩に打ち懸け

煙葉蒙籠侵夜色。風枝蕭颯欲秋聲　白氏文集にあり。煙葉ハ竹の葉の靄の如く見ゆるを云ふ。蒙籠ハ茂り合ひてほのぐらき事。侵夜色ハ空から夜の如く暗き事。風枝ハ風に吹かるゝ枝。蕭颯ハそよ〳〵と音のする事。

一方に雲を吹き返し　金龍を敵せ來たる雲を片隅の方へ吹きよする事。

て。谷の下道はる〴〵と。家路をさして下りけり。

ワキ「扨も不思議や山人の。敎へのまゝに山路を分け。竹林を遥かに見渡せば。煙葉蒙籠として夜の色を侵す。風枝蕭颯として秋の聲より冷ましや。地「あれ〳〵嶺より雲起り。俄に降りくる雨の音。鳴神稻妻。天地に耀く光りの内に。顯はれ出づる金龍の勢。遥かによろめも肝を消し。身の毛もよだつばかりなり。

地「かくて黑雲竹林におほひ。おほひかゝると見えつるが。竹林の岩洞にこもれる虎の。顯はれ出づれば岩屋の内より。惡風を吹き出だし。一方に雲を吹き返し。敵を追手にいきほひ勇む。恐ろしかりける氣色かな。

地「かゝりける所に。金龍雲より下つて。惡虎を取らんと飛んでかゝり。飛龍の戰ひ隙もなし。シテ「もとより虎亂の勢猛く。地「もとより虎亂の勢猛く。左も右も劒の如くに。竹枝を折

竹枝を折つて　虎がなり。
おほひかゝるを　龍がなり。

前シテ　老翁
ツレ　男
後シテ　三返翁
ツレ（面なし）　天女
同（同）　龍神
ワキ　勅使
從ヘ　信濃

信州寐覚の床の由來を述べ。壽命長久の神藥を勅使に奉る事を作れり。三返の翁ハ三百年を經たると云ふ浦島子の事なり。
延喜の聖主　醍醐天皇の御事。

靡きて歸る　袖の靡ると雁の越路に歸るとを兼ねて云ふ。
行けば程なき旅衣　行きて見れば程なく近き旅なるを云ふ。
木曾の御坂　名所なり。
夜半の空　旅人の夜半に寐覺す

つて金鼓にかゝれば。惡虎を卷かんとおほひかゝるを。背けて追つつめ食はんとすれば。金龍雲井に遥かに上れば。惡虎はいきほひ巖に上り。はるかに見送り。無念の勢あたりを拂ひ。又竹林に飛び歸つて。其まゝ岩洞に入りにけり。

寐覚　ねざめ　古名　寢覺床

作者未詳

ワキ次第「賢き君の勅を受け。東の旅に急がん。詞「そも〳〵是は延喜の聖主に仕へ奉る臣下なり。扨も信濃の國木曾の郡に。寐覺の床とて在所あり。彼所に三返の翁と申す者。壽命めでたき藥を與ふる由君聞し召し及ばせ給ひ。急ぎ見て參れとの宣旨を蒙り。唯今信濃の國寐覺の里へと急ぎ候ふ。道行「思ひ立つ。空に重なる雲の袖。靡きて歸る雁金も。山又山を越え過ぎて。行けば程なき旅衣。木曾の御坂も近づくや。嵐に更くる夜半の空。

る意ふ云ひかけたり。

尾上の鐘　尾上へ山の峰と鐘の間を云ふ。りの山上なる寺の鐘を云へるなり。

老の坂　辛苦して老年み至るものなれば坂を登るみ比して云ふ。こゝへ珠ふ木曾の御坂み比したるなり。

木曾の麻衣　土地の物産なり。

寐覺の床は是かとよ。詞「急ぎ候ふ間。是ははや寐覺の床に着きて候ふ。此所にて彼翁を尋ねうずるにて候ふ。

シテツレ一聲「信濃路や木曾の御坂の春風に、行方も知らぬ花ぞ散る。ツレ「霞こめたる谷の戸に。二人「世を鶯の聲しげし。シテサシ「所から春立つ山路分け過ぎて。二人「取るや薪の尾上の鐘。朧々と聞き馴れて。たどるや老の坂ならん。歌「立ち上る。木曾の麻衣袖しをり。賤が家居の業なれば。崖路の橋も馴れ〳〵て。いくへ重なる白雪の。解けて落ち來る谷川の。水も岩根や傳ふらん。

ワキ詞「如何に是なる老翁に尋ぬべき事の候ふ。シテ詞「此方の事にて候ふか何事にて候ふぞ。見奉れば此あたりにては見馴れ申さぬ御姿なり。若し都よりの御下向にて候ふか。ワキ「實によく見て有る物かな。是は延喜の聖主に仕へ奉る臣下なるが。此所

山の端白き　山の端の松が白く見えて月の出づるを云ふ。

に三返の翁と申す者。壽命めでたき藥を與ふる曲君聞こし召し及ばせ給ひ。急ぎ見て參れとの宣旨なり。彼老翁が私宅を敎へ候へ。シテ「扨は勅使にて御座候ふぞや。あら有り難や候ふ。總じて此三返の翁と申すは。生所もあらず出所もなく。ツレ「唯おのづから其まゝにて。寐覺の枕松が根を。シテ「宿りと定むる翁なれば。定めてこゝに來るべし。ワキ「實に〳〵是はいはれたりと。岩根の枕寐覺の床に。シテ「暫く御待ち候へとよ。ワキ「暫し休らふ。シテ「其内に。地「日も夕暮に程もなく。なるや彌生の空なれば。月も朧にさし出でゝ。山の端白き松の風。枝を鳴らさぬ木の下に。暫し休らふ旅居かな。

ワキ詞「なほ〳〵寐覺の床の謂委しく御物語り候へ。地「そも〳〵此寐覺の床と申すは。役の行者暫く御座をなし給ひて。觀念の眠りを覺まし給ふ。シテサシ「然るに彼三返の老翁は。生所も知

弊名人。夏の代に在りしと云ふ弓の名人。雲出蓋と云ふ周の代の弓の名人。愛染明王　佛の名。弓矢を手に持ちたる像なり。　釋迦佛法を立つるに。弓の矢。弓定。智恵の三法を以てす。之を弓矢として惡魔を調ふ道具に用ふるの意。

天つ風　雲の通路云々　古今集僧正遍昭の歌を引し。本歌は五節の舞姫を天女に見なしてよめるなり。　霜鐘調の樂名。

らず出所もなく。地「唯おのづから怒然と。顯はれ出でゝ寐覺の床に。千年を送る其内に。壽命めでたき藥を服し。三度若やぐ故により。三返の翁と名づけたり。ツレ「或る時翁申すやう。弊養射術を傳へて。其名を雲の上にあげ。されば愛染明王は。定の弓惠の矢にて。惡魔を從へ給ふなり。我は又御藥の。威德を以て大君の。代を治めんと思ふなり。勅使に申し上げゝれば。勅使喜悅の色をなし。汝如何にと宣へば。シテ「今は何をか包むべき。地「我此所に年經たる。三返の翁なるが。目前に來りたり。勅使暫く待ち給へ。夕月の夜もすがら。舞樂を奏し見せ申し。又御藥を與へんと。いふかと見れば老翁は。岩陰に寄ると見えて。行方知らずなりにけり。行方も知らず失せにけり。地「天つ風。雲の通路吹きとぢよ。少女の衣色々に。糸竹も音を添へて。波の皷聲澄むや。海青樂を奏しけり。

醫王佛　藥師如來の尊。

後シテ「そも〳〵是は醫王佛の化現。無病息災の方便の爲め。三返の翁假に顯はれ出でたるなり。地「其時老翁扉を開き。青天遥かに見渡しければ。シテ「東南に雲晴れ。西北の風も吹きをさまつて。地「花降り異香音樂の響き。舞樂の數々少女の袂。返す返すも面白や。

地「夜遊の舞樂も時過ぎて。有明方の月も落ちくる折からに。不思議や川波はげしく荒れて。二龍の姿は顯はれたり。

地「兩龍王は川波に浮かび。彼御藥を捧ぐる氣色。汀に坐してぞ見えたりける。シテ「老翁悅びの思ひをなして。彼客人の御慰みに。神通自在の秘術を顯はして。夜遊の戯むれなし給ふ。

シテ「かくて時移り頃去れば。地「かくて時移り頃去れば。彼御藥を君に捧げ。勅使に與へて是までなりと。木曾の棧ゆらりと打ち渡り。歸り給へば。龍神も東西に飛行の翔り。波に戯むれ巖

に上れば。夜も白々と明方の空に。夢の寐覺は覺めにけり。

空蟬　うつせみ

作者未詳

ワキ詞「是は諸國一見の僧にて候ふ。我いまだ都を見ず候ふ程に。此度都に上り。寺社古跡をも一見せばやと思ひ候ふ。道行「身の憂きを。思ひ知らずは如何にせん。厭ふながらも廻る世は。かかる旅寐の浮枕。野に臥し山を分け過ぎて。とゞ見つ　急がるゝ。月の都に着きにけり。

ワキ詞「我都に上りこゝを問へば。三條京極中川の宿りとやらん申し候ふ。實にや昨日今日秋の始めの庭の面に。まだなつかしき水の心ばへ。田舍家だつ柴垣して。そこはかとなき虫の聲。梢の蟬の聲々まで。實にあはれなる氣色かな。古言の思ひ出でられたるぞや。空蟬の葉に置く露の木隱れて。忍び〳〵に濡る

源氏物語に逢ひ。法華經の功德を受くることを作れり。空蟬は中川を過ぎて伊予守の家に云ふ。光源氏の逢ひしより。常夏の心を慰けられたる女なり。

三條京極中川の宿り　三條の京極を中川と云ふ。其流るゝ川なり。此川は東の鴨川。西の桂川の間にして中央なる意にて名づけしなり。今は絶えて其跡なし。

まだなつかしき水の心ばへ　云々　源氏物語の光源氏この中川の家を至られし時の文に「水の心ばへなどされるかたをかしう愛なしたり。田舍家だつ柴垣して植えたり。風雅なるなども心とゞめて植えすゝしくてうこはかとなき虫の聲々まで」とあり。此原文はかとなきを文はとなり。

夏の事なれば。秋の事なれば。もまだ未遠の記しなるゝ意なり。「まだなつかしき」とこゝに。末文句の意なり。空蟬の名を鎖ある蟬の事を入れたり。「心ばへ」は心を氣なり。水の注意とゞきたる作りかたを云ふ。「田舍家だつ」はおかやらしきの意。「うこはかとなき」は若許とも無きの意なり。多く聞ゆるを云ふ。

空蟬の葉を置く露の木がくれてしの音をよみたる袖かなの歌なり。空蟬の名は此歌などを云ふ。源氏物語の名なり。依りて源氏物語者の附けたる名なれば。この文句は自身の名を云へるなり。蟬の羽を見るべからず。蟬の羽を葉を云ひかけて。本の葉がくれの如くひろかを袖をおくなり。

空蟬の本心をの意。空蟬の身をかへてげる木のもとを人がのなつかしきかな光源氏の空蟬をおくられたる歌なり。此歌を見て前の述懷をばよみたるなり。「身をかへてげる」とは。源氏の再度の空蟬を逢へんとせられし時。空蟬は我衣を脱ぎおきて身を隱したる事あり。是を蟬のぬけがらを殘して身を替へたる事を譬へてよめるなり。「人がら」とは人品を云ふ。「から」は脱けがらの意を含めたり。一首の意は蟬のもぬけとなりて逃げたれど人品のよかりしと忘れがたしとなり。前の出だせる歌を指す。御返歌の心持はこれなり。但し御返歌の歌を指す。

る袖かなと詠じけんも。此所にての事なるべし。あら面白や候ふ。

シテ詞「のう〳〵あれなる御僧に申すべき事の候ふ。ワキ詞「此方の事にて候ふか何事にて候ふぞ。シテ「唯今口ずさび給ふ言の葉ぐさの末の露。本の心を思し召さば。光る源氏の御歌をば。何とて詠じ給はざらん。ワキ「いや是は唯所から。梢の蟬の聲に催され。唯何となく思ひ出でたり。扨々源氏の御歌は如何に。

シテ「空蟬の身を替へてげる木の本に。猶人がらのなつかしきかなと。詠じ給ひし御返事は。ワキ「忍び〳〵に濡るゝ袖。扨は空蟬の御歌よのう。シテ「中々なれやあはれ實に。こゝぱはかなき中川の。御方違の跡ぞかし。よく〳〵吊らひたまふべしと。地「夕暮に。命かけたる蜻蛉の。有りやあらずや問ふ人も。無き世なりけり。あはれと思し召されよ。實にや名殘をば。庭の淺

と。源言の述懐なりし事すでに云へる如し。御方遠き時に何をするも方角を忌む風俗ありて。朝廷より退出するも我家が遠き方角なる日へ。暫けて他の家に行くを云ふ。源氏は其れが爲めに紀伊守の家に一泊せられし中川の家に一泊せられしなり。

夕暮に命かけたる網代の「かげろふ」の「とんぼう」の小さきを云ふ。此虫朝に生まれて暮に死ぬると云ひ伝へしたれば儚なき譬に用ふ。源氏物語にも「あり」と見て手に取られず見れども又ゆくへも知らず消えしかげろふ」とあり。

葛城に云々　ひかし役行者が鬼神を使役して葛城と大峯との間に橋をかけたり。之を久米路の岩橋と云ふ。此寺久しき音がたりさ昏りたれば。「遠き世語り」の序の神のかけるなり。

彼中神のかげと故　しき方角に立ちふさがりて。神祟に人を與る。たゆ方違へするなと恐る。「かごと」に「れこつけ」の意。中神の方塞に假託して實へ空蟬に逢へんがために再び中川に行かれしを云ふ。

其夜やうかりけん　空蟬の心の何打ちとけざりしを云ふ。

何心なき空までも云々　空蟬に別るゝところの文に「月に有明にて光をさまれる物から。影さやかなる有明の。曙なるかしき。空蟬の心なき空までも。見る人ゆゑ。何心なき空なりけん。見たる人知れぬ御心に見たるなりなり。

茅に留めて。物すごき夕べなりけり。

地クリ「實にや葛城に。かゝる久米路の岩橋や。絶えにし跡は白雲の。遠き世語り申すべし。シテサシ「光る源氏中將と申せし頃ほひかや。地「彼中神のかごと故。此中川の御宿り。忍ぶの亂れ淺からず。クセ「其夜や憂かりけん。何心なき空までも。見る人からの天の原。月の光りさへ收まれる物から。影さやかなる有明の。シテ「つれなさを。恨みもはてぬ東雲の。地「取りあへぬまで驚かす。衣々の御名殘。いかゞあるべき身の憂さを。歎くにあかで明くる夜も。うれのみならず空蟬の。もぬけも汝馴れし。いにしへを訪はせ給へや。

ロンギ地「昔語を聞くからに。いとゞ心も法の門。出づる名殘を如何にせん。シテ「旅人の。着るてふ笠のすげなくも。一村雨と降り捨てゝ。何方に日も暮れぬ。此宿りにも留めまほし。地「星

の逢瀬も程近き。御住家とは是やらん。シテ「恥づかしながら中川の。地「宿りはこゝも。シテ「軒荒りて。地「數ならぬ伏屋に。生ふる名のみは篠木の。梢に鳴くは空蟬の。あるかと見れば其まま。道にあやなくなりにけり。

ワキ詞「扨は此世別れし空蟬の。現に顯はれ給ひけるぞや。いざや御跡弔らはんと。歌「夜もすがら。思ふや法の苔衣。袂に月の隈もなき。此妙經を讀誦して。彼御跡を弔ふとかや。

後シテ「あら有り難の御弔らひやな。此御經は有情非情も。漏るゝ方なき妙典の。功力に引かれて空蟬の。うつゝなき世を恰れ草。菩提の種となりたるぞや。有り難や。ワキ「不思議やなまどろむとしもなき東雲に。夢か現か空蟬の。姿顯はし給ふ事。

シテ「唯是れ法の不思議なれば。ワキ「即ち歌舞の菩薩の舞。シテ「恥づかしや。聲も佛事をなす蟬の。地「羽袖を返し舞ふとかや。

すげなくも　人づきわろくの意。

一村雨と云々　今わが情なく振り捨てたらば。御僧は何方にか旅宿を尋ねん。日もはや暮れぬれば一泊させ申したしの意。星の逢瀬も云ぞ　中川を牽牛織女の相逢ふ中の天の川ふ比して云ふ。

敷ならぬ伏屋ふ生ふる名（の）の葵さふ　あるふもあらで憎ゆる葛（水）の空蟲の歌なり。源氏より「葛木の心も知らで園原の道ふあやなくまどひぬるかな」とよみかけられたる歌ふ答へて云ふ。伏屋は園原の地名なるを賤が屋の事ふかけて。賤しき身を耻ぢて身をかくしたるよしみよめるなり。はゝきゝは遠方から見れば箒を逆さまふ立てたる如くふ見えて。近よりゆけば何れの木なりしか分ちぬものと云ひ傳へたり。委しくは第四卷木賊ふ見えたり。

道ふあやなく　前ふ引ける源氏の歌の詞なり。こゝふは迷中ふて行方を失ひたるの意。「あやなくは」「わけもなく」「無分別ふ」などの意なれど。こゝふ「あやめも知らず」などの意ふ用ひたり。

妙經　法華經の事。

忘れ草　浮世を忘るゝの意ふ云ひかけたり。草の文字は種と蓋るの句ふつゞきたり。

聲も佛事　鐘の鳴聲も讀經するの意。

遠近人ふ　遠國より出でたる僧を云ふ。

隔てなき軒端の荻　隔てなきと云へり。こゝは唯冠前の荻の事なり。

空蟬　空蟬のさゝ子ふ當る人を軒端荻と云ふふよりて。

月影の地上ふ敷かれたるを　月影ふ空蟬の地上ふ敷かれたるを趣ふ見なし。涼風の頭を拂ひて心地よきを枕ふ取りなして云ふ。

前シテ　里女
後シテ　後の精
ワキ　旅僧
ツレ　武藏
ツレ　楓の精

六浦の稱名寺ふ　稱名寺ふ感じて。秋の紅葉ふ相の詠歌ふ感じて。

木の名なる由　木の名なるとやなめたる由ふ來ふよりて成候。

法華の功德ふ　法華の功德ふ作れり。

シテ「山の端に。雲のよこぎる宵の間は。地「出でゝも月の待たれころすれ。シテ「待たれし月も遠方の。地「待たれし月も遠近人に。言葉をかはす法の縁も。隔てなき軒端の荻の。露うちはらふ風に亂るゝ。蟬の諸聲こゑ〳〵に。鷄の音も明け行く空の。月の小莚敷妙の。風の手枕袖觸れて。月のさむしろ風の手枕の。夢は覺めてゞ明けにける。

六浦　ひつら

安清作

ワキ次第「思ひやるさへ遥かなる。京の旅に出でうよ。詞「是は洛陽の邊りより出でたる僧にて候ふ。我いまだ東國を見ず候ふ程に。此秋思ひ立ち陸奥の果てまでも修行せばやと思ひ候ふ。道行「逢坂の。關の杉村過ぎがてに。ゆくへも遠き湖の。舟路を渡り山を越え。幾夜なゝの草枕。明け行く空も星月夜。鎌倉山を越え過ぎて。六浦の里に着きにけり。

ワキ詞「千里の行も一歩より起るとかや。はる〳〵と思ひ候へども。日を重ねて急ぎ候ふ程に。是ははや相模の國六浦の里に着きて候ふ。此渡りをして安房の清澄へ參らうずるにて候ふ。又あれに由ありげなる寺の候ふを人に問へば。六浦の稱名寺とかや申し候ふ程に。立ちより一見せばやと思ひ候ふ。のう〳〵御覽候へ山々の紅葉今を盛と見えて。さながら錦をさらせる如くにて候ふ。都にもかやうの紅葉の候ふべきか。また是なる本堂の庭に楓の候ふが。木立餘の木に勝れ。唯夏木立の如くにて。

思ひやるさへ　想像しやるさへ遥きの意。

逢坂の關の杉村　山城近江の境なり。杉村は逢坂の名所。

過ぎがてふ　過ぎがたの長き事。

いく夜なゝの旅枕　東海道を經過し來れる事。

鎌倉の枕詞。

是月夜　鎌倉山を越え過ぎて　相模より武藏ふかゝるなり。

六浦の里　金澤の地ふあり。

此渡りをして　是より舟ふ乘り渡りしての意。

安房の清澄　日蓮上人の剃髮せしと云ふ大寺のある山。

稱名寺　金澤八景の一ふ稱名晚鐘と云へるは是なり。

のう〳〵御覽候へ　聞行の情ふ云ふ詞。

一葉も紅葉せず候ふ。如何さま謂のなき事は候ふまじ。人來りて候はゞ尋ねばやと思ひ候ふ。

シテ詞「のう〳〵御僧は何事を仰せ候ふぞ。ワキ詞「さん候ふ是は都より姑めて此所一見の者にて候ふが。山々の紅葉今を盛と見えて候ふに。是なる楓の一葉も紅葉せず候ふ程に。不審をなし候ふ。シテ「げによく御覽じとがめて候ふ。いにしへ鎌倉の中納言爲相の卿と申しゝ人。紅葉を見んとて此所に來り給ひし時。山々の紅葉いまだなりしに。此木一本に限り紅葉色深くたぐひなかりしかば。爲相の卿とりあへず。如何にして此一本に時雨れけん。山にさきだつ庭の紅葉ばと詠じ給ひしより。今に紅葉をとゞめ候ふ。ワキ「おもしろの御詠歌やな。われ數ならぬ身なれども。手向の爲めにかくばかり。舊りはつる此一本の跡を見て。袖のしぐれぞ山にさきだつ。

爲相の卿　定家の孫にて爲家の子なり。寛西三年本す。

如何ふして此一本ふ時雨れけん山ふさきだつ庭のもみぢ葉　時雨は紅葉を染むるものなれば云ふ。紅葉は山から先ふ色づきて里は後なるが習ひなるを。ふ反したるを賞美せしなり。

舊りはつる此一本の跡を見て袖の時雨ぞ山ふさきだつ　由來を聞いて有りがたさふこぼす涙が。山の時雨ふも先だちて袖ふ降るの意。

シテ詞「あら有り難の御手向やな。いよ〳〵此木の面目にてこそ候へ。ワキ「さて〳〵先に爲相の卿の御詠歌より。今に紅葉をとどめたる。謂は如何なる事やらん。シテ「實に御不審は御ことわり。さきの詠歌に預かりし時。此木心に思ふやう。かゞる東の山里の。人も通はぬ古寺の庭に。われ先だちて紅葉せずは。いかで妙なる御詠歌にも預かるべき。功成り名遂げて身退くは。是れ天の道なりといふ古き言葉を深く信じ。今に紅葉をとゞめつつ。唯常盤木の如くなり。ワキ「是は不思議の御事かな。此木の心をかはどまで。しろしめしたる御身はさて。如何なる人にてましますぞ。シテ「今は何をか包むべき。我は此木の精なるが御僧たつとくましますゆへに。唯今顯はれ來りたり。今宵はこゝに旅居して。夜もすがら御法を說き給はゞ。重ねて姿を見え申さんと。地「ゆふべの空も冷まさしく。此古寺の庭の面。霧の籬の露

功成名遂身退天道　老子の文句。一たび賞美せられしゆふ滿足して此上の欲を卷ハ口の意。

遠から云々　る越ふ云ふ。　稱名寺ふて稱名す

眺られんものかてゝに眺りがたしの歌。　此葉書を見す

心なしとは誰ぬいふ　草木おの心やふ喚き揚ぶる花もの定りの榮ゆる樂もあるものを。無常の草木なりと云はるべきなれしとの意。心あれば即ち成佛も出來べき理なり。

かつ咲きそめて　傍よりの一聯ブ二聯ブ、咲き出ブるを云ふ。

深き。千草の花をかき分けて。ゆくへも知らずなりにけり。

ワキ歌「所から。心にかなふ稱名の。御法の聲も松風も。はや更け過ぐる秋の夜の。月澄み渡る庭の面。寂られんものかなもしろや。

後シテ「あら有り難の御吊らひやな。妙なる千々の緣にひかれて。二度てゝに來りたり。夢ばしさまし給ふなよ。ワキ「不思議やな月澄みわたる庭の面に。有りつる女人とおぼしくて。影の如くに見ゆ給ふぞや。草木國土悉皆成佛の。此妙文を疑ひ給はで。なほ〳〵昔を語り給へ。

シテクリ「夫れ四季をり〳〵の草木。おのれ〳〵の時を得て。地「花葉さま〴〵の其姿を。心なしとは誰かいふ。シテサシ「夫れ青陽の春の初め。地「色香たへなる梅が枝の。かつ咲きうめて諸人の。心や春になりぬらん。シテ「又は櫻の花盛。地「唯雲とのみ三見吉野の。千本の花にしくはなし。クセ「月日經て。移れば變はる詠めかな。櫻は散りし庭の面に。咲きつゞく卯の花の。垣根や雪にまがふらん。時移り夏暮れ。秋も半になりぬれば。空定めなき村時雨。きのふは薄き紅葉ばも。露しぐれ洩る山は。下葉殘らぬ色とかや。シテ「さるにても。東の奥の山里に。地「あからさまなる都人の。あはれも深き言の葉の。露の情にひかれつゝ。姿をまみに數々に。言葉をかはす値遇の緣。深き御法を授けつ。佛果を得しめ給へや。

シテ「更け行く月の夜遊をなし。地「色なき袖をやかへさまし。

シテ「秋の夜の。千夜を一夜に重ねても。地「言葉のこりて鳥や鳴かまし。

シテ「八聲の鳥も數々に。地「八聲の鳥も數々に。鐘も聞こゆる。

シテ「明方の空の。地「所は六浦の浦風山風。吹きしをり吹きしを

霜時雨もる山ゝ云々　集貫之の歌ふ「霜も時雨もいたく降る山ゝ下葉殘らず色づきぬ」とあるを引く。但し是は近江の守山ふてよめるなれば。三の句ゝ洩る山と守山とを兼ねしなれど。こゝふゝ洩る山の意のみふ用ひたり。

あからさまなる　假初ふ逢ひたるを云ふ。初對面の意。

あれも深き昔の葉の　前によみたる歌を指す。

姿をまみに　眺の姿をあらはす。

値遇の緣　逢ひたるも不思議の緣なりとなり。緣の深きと云ひかけたり。

佛果を得しめ　成佛させての意。

色なき袖をや　青葉の殘りなる故ふ云ふ。色なきゝ當時多くゝ紅色を交へぬ事ふ云ひ習はせり。

翻し歸ふ事。

秋の夜の千夜を一夜ふ重ねても　伊勢物語のこりて鳥や鳴かまし　歌なり。秋は夜の長き時なるが。其れを千夜ふつめたる程の長き夜ふして語り明かしても。青葉の殘きぬ内ふ曉の鶏が

鳴かんとの意。但し結句に「鳥や鳴きなん」とあり。晩の鐘に八撞八度ふなく故ふ云ふ。これを一番鳥二番鳥なと稱ふるなり。鐘も鶏とゆる所なり。稱名寺に鐘の名所に六浦の今の六時なり。明方大つ時の意ふ吹きしをり水を吹きたわます事。

から〜れなの明けなば恥づかしかげろふ姿と　紅に蜂國より渡りたる染色なれば云ふ。魂魄殺の類に喪を隱るなり。影の如くなりて稱ゆるを云ふ。

り。散る紅葉ばの月に照り添ひて。韓紅の庭の面。明けなば恥づかし暇申して。歸る山路に行くかと思へば。木の間の月の。かげろふ姿となりにけり。

シテ　狂女
ワキ　狂言　夫
ツレ　里人
ハ　京都

夫の行方を尋ねて狂ひ出でたる女。賀茂の名越祓の日めぐりあひたる物語を作れり。下京　京都の四條通より南を云ふ。

名越の祓　六月晦日に身の罪穢を祓ひ捨つる神事。又水無月祓とも稱ふるなり。祓を行ふのみならず別れし女に逢はん事をも祈らんの意。

水無月祓　みなづきばらひ

安清作

ワキ詞「是は下京邊に住居する者にて候ふ。我さる子細あつて播磨の國に下り。久しく室の津に逗留の間。相馴れし女の候ふにて都にのぼりなば。必ず迎へ妻となすべき由堅く契約申して候ふ。されば此程室の津へ迎へを遣はし候ふ處に。彼女居候はぬ由申し候ふ間。今は尋ぬべきやうもなく候ふ。又今日は名越の祓にて候ふ程に。賀茂の明神に參詣申し。彼逢瀬をも願はばやと存じ候ふ。

狂言「是は此あたりに住居仕る者にて候ふ。今日は水無月祓にて候ふ程に。紀へ參らばやと存じ候ふ。ワキ詞「のう是なる人は紀へ御參り候ふか。某も御供申し候ふべし。狂言「見申せば都の人にてありげに候ふが。不知案内なるやうに仰せ候ふよ。ワキ「仰せの如く都の者にて候へども。久しく田舍に候ひてまかり上り候ふ故かやうに申し候ふ。狂言「實に〳〵さやうの事も候ふべし。さらば御供申し候はん。ワキ「此頃都には如何やうなる珍らしき事の候ふ。狂言「御存じの如く都は廣き事にて候ふ程に。いろいろめづらしき事も多く候ふ。先づ此御手洗に參りておもしろき事の候ふ。ワキ「如何やうなる事の候ふぞ。狂言「若き女物狂の候ふが。巫のやうなる有樣にて。水無月祓の輪を持ち。人々に茅の輪の謂を申してくゞらせ候ふが。是非もなくおもしろう舞ひ

乱　下賀茂の地を云ふ。

御手洗　神社を流るゝ川を云ふ。賀茂ふてゝ川の名と見るべし。

巫　女ふて神ふ仕ふるものを云ふ。

水無月祓の輪　茅の輪とて茅ふて作りたる輪なり。是をくゞれば疾病ふ祓らぬよし云ひ習はせり。

行く水に数書くよりもはかなきは。思はぬ人を思ひ夫

思はぬ人を思へばなり）古今集の歌。水面に一二三などの文字を書きても直に消えて其功なきを。こちらから思ひても向ふから思はぬ人の心に愛へてよめるなり。

思ひ夫の　我慢しと思ふ夫を云ふ。

のぼり瀬の　夫を頼ひて船に上るを云ひかけたり。水上の方の川瀬を云ふ。

中賀茂の　御手洗川へ上賀茂と下賀茂との間ある故に云ふ。

此事。　越えさせ　越ゆるばくゝるゆふしでかくる　祓ふ用ひたる幣を川に流す事あり。波をうつの幣の白きに見立てゝいへるなり。

御祓川　名越の祓へ水邊にて執行すること。なれば其川を云ふ。「みそぎ」は身うゝぎの意にて祓ふ同じ。

身ふもたゝへは　我身の如き例に古人ふ在りと云ひかけたり。

在原の云々　伊勢物語に我慢を

遊び候ふ。是を見せ申し候ふべし。ワキ「さらば其物狂を見うずるにて候ふ。狂言「何かと物語申して参り候ふ程に。はや糾へ参りて候ふ。御覧候へ殊の外群集にて候ふ。彼物狂を待ちて見せ申し候ふべし。

シテ一聲「行く水に數書くよりもはかなきは。思はぬ人を思ひ夫の。跡を慕ひてのぼり瀬の。清き流れや中賀茂の。御手洗川につどふ君。今日の名越の祓して。此輪越えさせ給へとよ。愧づかしや人は何とも白波の。地「木綿しでかくる御祓川。シテ「戀路をたゞす神ならば。地「などか逢瀬のなかるべき。シテサシ「實にや數ならぬ。身にもたとへは在原の。跡は昔に業平の。此河波に戀せしと。かけし御祓も大麻の。引く手あまたの人心。頼むかひなきかねことかな。とは思へども我は又。浮世に明かす水鳥の。地「賀茂の河原に御祓して。逢瀬をいざや祈らん。夏と秋。

止めしめ給へと祈りつゝ御手洗川にせしに御祓神受けずもなりにけるかな一茶平の御祓をしてみたるに。神納受給はれるゝまで祈りしに。見えて猶も難しく思はるゝの意。

大麻の云々　同書に或る女の歌に一大麻の平に引く手あまたに頼こゆれば思へと猶こゆれば思へと猶大きは作れる幣に大きは作れる方に幣に引きて來て人々の四方の事を撫ぶる事なり。之を其如く四方を撫ぶる事なり。

夏と秋　夏の末かけて秋ゆきかふ風（やゝ吹くらん）空の通路の古今集の歌なり。夏の一方より來る空の通路なれば。中は涼しき風の吹くなり。

涼しき風　夏の一方より來る空の通路なれば。中は涼しき風の吹くなり。

是れ傳き神の岩身

是れ傳き神の岩身の光明あり。照りかゝやきし賤しき神は其光ねブかふて發の如くなりしを云ふ。祓神のこゝかしこに小さき光を放ち居る形容なるべし。

天孫降臨以前の國土の主宰たりし大國主神の御子なり。

螢火の如く

行きかふ空の通路は。かたへ涼しき風ゞ吹く。御手洗川は濁れども。澄みてます賀茂の宮。誓ひ糾の神ならば。頼みをかけて憂き人に。めぐり逢ふべき小車の。賀茂の河原に着きにけり」

狂言「唯今申す女物狂はこれにて候ふ。言葉をかけてせて聞こし召され候へ。ワキ詞「承り候ふ。さらば言葉をかけて謂を聞かばやと思ひ候ふ。如何にこれなる狂女。見れば茅にて作りたる輪を持ちて。人々に越えよと承り候ふ。名越の祓の謂こう聞きたう候へ。シテ詞「妾は狂人なれども。祓の謂を申して聞かせ参らせ候ふべし。ワキ「さらば懇に語られ候へ。

シテ詞「忝くも天照太神皇孫を。蘆原の中津國の御主と定め給はんと有りしに。荒ぶる神は飛び滿ちて。螢火の如くなりしを。事代主の神なびめはらひ給ひしこう。今日の名越の始めなれ。されば古き歌に。五月蠅なす荒ぶる神もおしなべて。今日は名

なごめはらひ　なごめい惡心を落心に和らげ圓へさしむる事。はらひ逐ひ掃ひ滅ぼし除く事。一柔一剛の所作なり。「はらひ」を祓の世語とするの意。「なごめ」を名越の起原とし「はらひ」をする荒ぶる神もおしなべて今日は名越の祓（なりけり）澄渠長能歌の意。おしなべて悉くしの祓にて皆和らげなごしの意。今日はなごしの意。

廻物　人物を遣る。

此輪をくゞれば　此輪を越ゝる時は。六人遣の世界をめぐりて止まざる者を。女ゝ五箇條の罪障ある女ゝ五箇條の罪障の意。

五障の雲霧　すでに名越の祓する人八千年の命のぶとそきけり此古歌を判ゝしたる紙を六月の水無月を雲霧ゝしばらへて云ふ。今も神社の祓ゝ配るところあり。

眞如の月の輪の圓き形を月ゝ比したるなり。茅輪の圓き形を月ゝ比したるなり。

曇らぬ心知ちで人なる笑ひそ　狂女なりと知て嘲り笑ふ人を戒むる詞。

千早ぶる神のいがきも越えぬべし（今ハ発名の祓しけゝもなし）萬葉集の歌なり。いがきは齋垣の意ゝて神社の垣を云ふ。越ぬべしは清淨なる社の垣をも今ハ踏みゝ越ゆべき勢なりと詠ぬる意。こゝは輪を越えよと勧むる歌きて引ける古歌なりと知るべし。

越のはらへなるらん。詞「さてさばへなすとは夏の蠅の飛びさわぐが如くに。さはりをなす神を云へり。かゝるかしこき祓へとも。思ひ給はで世の人の。ワキ「祓へをもせず輪をも越にず。シテ「越ゆればやがて輪廻を遁る。ワキ「すはや五障の雲霧も。シテ「今皆盡きぬ。ワキ「時を得て。地「水無月の。名越の祓ひする人は。千年の命のぶところ聞け。輪は越にたり。御祓の此輪をば越にたり。眞如の月の輪の謂を。知らで人な笑ひうよ。もし惡しき友あらば。祓ひのけて交へじ。身に祓ひのけて交へじ。輪越えさせ給へや。此輪こえさせ給へや。名を得てこゝぞ賀茂の宮に。參らせ給はゞ。御祓河の波よりも。此輪をまづ越にて。身を清めおはしませ。千早ぶる。神のいがきも越えつべし。もと來し方の道を尋ねて。迷ふ事はなくとも。異方な通り給ひう。今日は名越の。輪を越えて參り給へや。シテ「神山の。二葉の葵年

異方な通り給ひう　此輪をくゞらずゝ他の道を遁り給ふなとなり。

神山の二葉の葵　四月の賀茂祭にハ其神山の二葉葵を取りて用ふるなり。

雲こうかゝれ　葵ハ人々の髪に懸くる事なるを雲に見立てゝ云へり。

水縹かづら　水縹しでを葵と共に髪に懸くる事。

波の白和幣　波を白色の幣に見なして云ふ。

麻の葉の青和幣　祓に用ひたる麻の葉を流すを青色の波に見なして云ふ。

臨時の祭にハ云々　賀茂臨時祭ハ十一月下の酉の日に行ハる。此日内裏より遣ハさるゝ舞人にかざしの花として冠に挿して舞ふべき作花を賜ふなり。

かも川の後瀬しづかに云々　古今六帖ゝ「若狭なる後瀬の山の後も逢ハん我思ふ人ゝ今日なら一とあるを枕へて引く。ずとも今逢ふ事を急ぐとも後つひゝ逢ハるべしとの意。

舊りて。地「雲こうかゝれ木綿髮の。神代今の世おしなべて。今日は名越の。祓ひなごめしづめて。心ゝ清き御祓河の。波の白和幣。麻の葉の青和幣。何れも流し捨衣の。身を清め心すぐに。本性になりすまして。いざや神に參らん。此加茂の神に參らん。ワキ詞「如何に申し候ふ。此烏帽子を召されて。おもしろう舞うて御見せ。あれと人々の御所望にて候ふ。シテ詞「實にや臨時の祭には。かざしの花を賜はるとかや。妾も烏帽子をうち着つゝ。神の御前に狂はまし。賀茂河の。後瀬しづかに後も逢はん。妹には我よ今ならずともと聞く時は。祈る願も頼もしや。ワキ「實に濁りなき此神の。御心なれや賀茂の河。ワキ「今此水に影をうつす。舞の袖こういろゝの。ワキ「心を種の手向草。シテ「さるにても。ようには何と御祓河。シテ「御祓河。水も緑の山陰の。地「賀茂の宮居の御手洗河に。うつる面影。シテ「あさましや。も

うづる雲は　水ふうつる意とも。流のうつり過ぎゆく意とも兼ねる。

はこね　箱ガ根の事。

歩みよるべの　歩みよると云ひかけたり。よるべの水は社頭の水を云ふ。

くれはとり　彼の文字を受けて「くれ〳〵」を呼び出す詞。あやはとりくれはとりとて古へ渡來せし織工女二人の名。調だけにて意には必用なし。

くれ〳〵と　心の暗みて氣を失ふさまなり。

うつゝなき身の　狂氣せし故に云ふ。

室の戸　播州室の港を云ふ。故郷の氏神にて賀茂と同体の神なり。

室君　室の遊女を云ふ。こゝに狂女の室君なりし事知られたり。かゝる賤しき身の接を心得て夫を尋ねる。氏神の恩德ぞとなり。來たるも。

ふたゝび伏し拜みて　再拜する事。神社の丁寧なるもの。

とより狂氣の我身なれば。地「見しにもあらずおのづから。うつる姿は愧づかしや。はこねも眉も亂れ髪の。賀茂の社へすごすごと。歩みよるべの水の綾。吳織くれ〳〵と。倒れ伏してぞ泣き居たる。

ロンギ地「不思議や扨は別れにし。其妻琴のひきかへて。衰ふる身ぞ痛はしき。シテ「聲は其。人と思へど我ながら。現なき身の心ゆゑ。たゞ夢としも思ひかね。胸うちさわぐばかりなり。地「實にや思へば影頼む。惠み普き室の戸に。シテ「立つ神垣も隔てなき。地「御名も替はらぬ。シテ「賀茂の宮居。地「實にまことと有り難や。誓ひは同じ名にしおふ。室君の操を知るも。たゞこれ紅の御神の。御惠みなりと同じく。ふたゝび伏し拜みて。妹背うちつれ歸りけり。

前シテ　白桃王母ツレ　國王千秋ツレ　昭君里人ワキ　唐土ワキ　胡國

漢の勅命に依り殯り胡國ふ遣はされて。昔秦を受けたる王昭君の墓を作れり。

かうにの里　畔なりず。昭君の姉婦と云ふ里の人なるよしの歌。

白桃王母　出塞畔なりず。王母は王昭君の母の意なるべし。父の名を王嬢と云ひたるよしは同書にあり。

胡國　ひびすの國なり。

散りかゝる花の木陰ふ云々　貨之の「櫻ちる木の下風は寒からで空ふ知られぬ雪ぞはりける」を少し替へて引く。夫婦の身の上を今ふも散ちゝとする花ふ壁へて嘆息するなり。

明妃と其名を改めて　王昭君の昭の字は漢の文帝の諱なる故。王昭君を呼び替へられたり。されば明妃とも云ふなり。

昭君

せうくん

氏信作

ワキ詞「是は唐土かうほの里に住居する者にて候ふ。扨も此所に白桃王母と申す夫婦の候ふが。一人の息女を持つ。其名を昭君と名付く。帝に召されて御寵愛限りなかりし所に。さる子細あつて胡國へ移されて候ふ。夫婦の人の歎きたゞ世の常ならぬ近所の事にて候ふ程に。立ち越にとむらはゞやと思ひ候と。

シテツレ一聲「散りかゝる。花の木陰に立ち寄れば。空に知られぬ雪ぞ降る。シテサシ「是は唐土かうほの里に住居する。白桃王母と申す。二人「夫婦の者にて候ふなり。ツレ「かほどに賤しき身なれども。美名を顯はす娘あり。二人「昭君と彼を名付けつゝ。容顏人に勝れたり。されば帝都に召されて後。明妃と其名を改めて。天子にまみえはします。シテ「かほどいみじき身なれども。

諸人の中ゆ　あまたの美人の中よりの意。

漢宮萬里の　明妃曲ゆ王昭君の歌ゆて。胡角一聲新怨夢。漢宮萬里月前魂とあるを引きて云ふ。流の朝廷を離れて万里の遠國なるを云ふ。

供奉の官人　王昭君を送りゆく官吏なり。

馬上ゆて琵琶　王昭君の常ゆ馬上ゆて琵琶を弾き怒みたるを云ふ。是が後世の軍歌などの手本なりとの意。

緑の色ゆ云々　緑の緑を柳ゆ比し。柳の糸を亂るゝ恋ゆ云ひかけたり。白氏文集ゆ。昭君村柳黛三於眉「など見ゆ。

風もろともゆ　風ハ常に柳の葉を吹き揺へて。我も諸共ゆ其落葉を拾ひゆ行かんとなり。

祖父ハ　老人を云ふ。昭君が祖父の意ゆハ非ず。

さゝがゆの　蜘蛛の事。故に糸と云ひかけたり。

たゞ世の常の　我等が落葉を拾ふハ子細ありてなるを。人ハ常の恋の男がしわざなりと答問ゆ見過ぐすならんとの意。

猶も前世の宿縁。離れやらざる故やらん。二人「諸人の中に撰ばれて。胡國の民にうつされ。漢宮萬里の外にして。見馴れぬ方の旅の空。思ひやるこゝろ悲しけれ。シテ「されども供奉の官人ども。旅行の道の慰めに。絃管の數を奏しつゝ。二人「馬上に琵琶を彈く事も。此時よりと聞く物を。歌「畫圖にうつせる面影も。今こゝろ思ひ知られれ。彼昭君の黛は。緑の色に匂ひしも。春や繰るらん糸柳の。思ひ亂るゝ折毎に。風もろともに立ち寄りて。木陰の塵を掃はん。

シテ「いざ〳〵庭を清めんと。祖父は箒を携へたり。ツレ「實にや昔の春。老の姿もさゝがにの。いと苦しとは思へども。風結ぶ。涙の袖の玉だすき。斯かる思ひも子故なり。シテ「たゞ世の常の賤の男と。人もや見るらん恥づかしや。ツレ「日は山の端に入相の。シテ「兼ねて知らする夕嵐。ツレ「袖さむしとは思へども。

シテ「子の爲めなれば。ツレ「寒からず。二人次第「落葉の積る木陰にや。嵐も塵となりぬらん。地「落葉の積る木陰にや。嵐も塵となりぬらん。實に世の中に憂き事の。心に懸かる塵の身は。掃ひもあへぬ袖の露。涙の數や積るらん。風に散り。水には浮かぶ落葉をも。暫し袖に宿さん。涙の露の月の影。うれかと見れば。さもあらで。小篠の上の玉霰。音もさだかに聞こわず。シテ詞「あまりに苦しう候ふ程に。休まばやと思ひ候ふ。

ワキ詞「いかに此屋の内に白桃の渡り候ふか。シテ「誰にて御入り候ふぞ。ワキ「いや某が參りて候ふ。シテ「此方へ御出で候へ。ワキ「如何に申し候ふ。扨も昭君の御事御心中察し申して候ふ。シテ「御とむらひ有り難う候ふ。ワキ「又申すべき事の候ふ。此柳の木の本を立ち去らずして清め給ふは。何と申したる御事にて候ふぞ。シテ「昭君胡國へうつされし時。此柳を植ゑ置き。我胡

うれかと見れば　さもあらで　月影かと見れば忽ゆ消えて跡なきの意。

小篠の上の云々　篠の上をつたふ玉霰かと見れば。音ハうれと聞こゆぬの意。涙ゆ月のやどりたるなれば色ハ露ゆ似て。音の無きだけが異なるなり。

天下を治めし始めなり　漢と胡國と代々戰ひ怨みありしが。元帝の時に至り和睦するやうに爲りて。其しるしに漢の羅たちんと請ひしかは。昭君を遣わさるる事になりしなり。

漢王　元帝なり。

紅色高位の姿を　容貌よゝ品格高きを云ふ。

賢聖の障子に　漢の宣帝の時忠臣の像を障子に畫かしめ給ふ。賢聖障子と云へり。今その例にて「似せ畫」の云ひかけたり。

似せて畫　似顔肖像の意。

中に劣れる　三千人の中に容色のわるきものあらばの意。

畫かける人を語らひ　畫師に我も／＼と頼よゝ寫してもらわん。

御約束の有りしに　官女の畫師に約束するなり。

國にて空しくならば。此柳も枯れうずると申しつるが。御覽候へ早片板の枯れて候ふ。ワキ「實に〳〵御歎き尤にて候ふ。扨々昭君は何しに胡國へはうつされ給ひ候ふぞ。シテクリ「扨も昭君胡國にうつされし。其いにしへを尋ぬるに。地「天下を治めし始めなり。シテ「然れば胡國の軍強うして。從ふ事期し難し。地「されば互に和睦して。其しるし一つなからんやとて。美人を一人遣はすべき。御約束の有りしに。ツレ「そも漢王の宣旨には。三千人の寵愛。いづれをわくる方もなし。もろ〳〵の宮女の。紅色高位の姿を。賢聖の障子に。似せ畫に是を顯はし。中に劣れる樣あらば。即ち彼を撰みて。胡王の爲めにつかはし。天下の運を靜めんと。綸言ならせ給へば。數々の宮女たち。是を如何にと悲しみ。畫かける人を語らひ。皆賂を贈りつゝ。御約束の有りし故。シテ「されば寫せる其姿。地「いづれを見るも妙にして。柳髪風にたをやかに。桃顔露を含んで。色猶深き姿なり。中にも昭君は。ならぶ方なき美人にて。帝のおぼえたりしなり。それを頼める故やらん。たゞうちとけて有りしに。畫圖に寫せる面影の。あまり賤しく見えしかば。さこうは寵愛。甚しゝとは申せども。君子に私の。言葉なしとやおぼしけん。力なくして昭君を。胡國に贈り遣はさる。

シテ詞「昔し桃葉といひし人。仙女と契り淺からざりしに。仙女空しくなりて後。桃の花を鏡に寫せば。即ち仙女の姿見えけるとなり。此柳もさながら昭君の姿。いざさせ給へ鏡に寫して影を見ん。ツレ「それは仙女の姿なり。いかで是には譬ふべき。シテ「いやそれのみならず鏡には。戀しき人の寫るなり。ツレ「夢の姿を寫しゝは。シテ「しんやうが持ちします鏡。ツレ「故郷を鏡に寫しゝは。シテ「とけつといひし旅人なり。ツレ「うれは昔に年

それを頼める　賂せずとも我は絶世の美人なれば。惡しく寫さるゝ事あるまじと自信せし故みやの意。

嘸うちとけて　裝飾もせず常のまゝにて寫させたるを云ふ。

さこそ寵愛　昭君に君の御寵愛入りたる美人なれども今更せんかたなきなり。

桃葉云々　田舍詞なるべし。

しんやう　これも。

とけつ　これも。年を經て花の鏡となる水に散りか

かるをや曇るといふらん。古今集の伊勢の歌なり。水に花の姿を寫す鏡なるが。誠の鏡に曇るといふ事あれど水に無りれば。花の散りてその見えずなる時を曇るといふなるらんの意。

を經て。シテ「花の鏡となる水は。地「散りかゝる花や曇るらん。思ひはいとゞます鏡。もしも姿を見るやと。鏡に向つて泣き居たり。

昭君「是は胡國にうつされし。王昭君の幽靈なり。扨も父母別れを悲しみ。春の柳の木の本に。泣き悲しみ給ふ痛はしさよ。急き鏡に影を寫し。父母に姿を見に申さん。春の夜の。朧月夜に顯はれて。地「曇りながらも影見ばこん。ツレ「恐ろしや鬼とやいはん面影の。身の毛もよだつばかりなり。いかなる人にてましませば。鏡には寫り給ふらん。後シテ「是は胡國の夷の大將。呼韓邪單于が幽靈なり。ツレ「胡國の夷は人間なり。今見る姿は人ならず。目には見ねども音に聞く。冥途の鬼か恐ろしや。シテ「呼韓邪單于も空しくなる。同じ王昭君が父母に。對面の爲めに來りたり。ツレ「よしなかりける對面かな。姿を見るも恐ろしや。

呼韓邪單于　胡國の王なり。昭君を得たる人。

よしなかりける對面かな　逢ひ來ずともよきものを無用なりしの意。

おどろをいたゞく　いばらなどの如き髪を云ふ。主を離れて　單于の身を離れずして虛空に放立つの意。元結さらふたまらねば　元結ふて結びても髪の鬱に押されて持たぬを云ふ。

誠ふ寫す鏡　鏡玉のわろきを云ふ。

誠に氣躁き　五味と云ふ詩にてしばるを云ふ。耳金を入るゝ耳ふいくさりを云ふ。胡國の風なり。我身か人かと其身かあらぬか單于自身も恐るゝとなり。

唯昭君の此くの如く恐ろしき姿なるに。昭君のみにもとの美人のまゝふて。替へらぬを云ふ。罪を顯はす浮玻璃に在りて此世の罪を照らし寫す鏡の名。

單于の影の寫りたるのみならず。彼閻魔國の鏡ふも現業の發ちす寫るを云ふ。

昭君單于の影それも隱れの花かと見えて　昭君の姿の寫り

シテ詞　うも恐るべき謂はいかに。ツレ「心に知らぬ我姿。鏡に寄りて見給へどよ。シテ「いで〳〵鏡に影を寫さん。誠に氣躁き姿かと。鏡に立ち寄りよく〳〵見れば。恐れ給ふもあら道理や。地「荆棘をいたゞく髪筋は。シテ「主を離れて空に立ち。地「元結さらにたまらねば。シテ「さねかづらにて結び下げ。地「耳には鎖を下げたれば。シテ「鬼神と見給ふ。地「姿も恥づかし。鏡に寄り添ひ立ちても居ても。鬼とは見れども人とは見にず。其身かあらぬか我ならば。恐ろしかりける顏つきかな。面目なしとて立ち歸る。

地「唯昭君の代業は。柳の色に異ならず。罪を顯はす浮玻璃は。ろれも隱れはよもあらじ。花かと見にて曇る日は。上の空なる物思ひ。影もほのかに三日月の。曇ら心人の心こそ。誠を寫す鏡なれ。

たる形容。花咲とて花の咲く頃なる事あるを云ひかけにより。昼る日の沢ふ咲りて。たしかふ見とめられぬを云ふ。上の空なる見しふも非ず見ざるふも非ずして。影もけのかふ見たるのみの意。昼らぬ人のかふ見たるのみの意。虚空ふ物のうかれかをしむを云ふ。昭君の父母を忘れずして降り來たるこを歎めたるなり。形ある鏡よりも人心の明らかなるこう。鏡を照らし見すべき至宝の寶なれとの意。

前シテ　宮人
ツレ　同
袋シテ　杵築大神
ツレ　龍神天女
同　龍神臣下
ワキ　出雲
ハ　世間ふ神無月と稱ふる十月を。出雲ふては神々の集まり給ふ月とて神有月と稱へ。殿取なる神事あり。此時ふ合ひて奇特を目撃する事を作れり。

神有月　十月を神無月と云ふに神管祭の有る月なれば「かむなもあづき」の略語なるべしとの說もあり。其文字を神築と書くふ依りて。神々の出ず大社ふ集まり給ふと云ふ事ふ附會し。遂ふ出雲ふては神有月の稱を起すふ至りしなられん。

諸神妙向　神々の形をあらはして出雲ふ來會し給ふ事。

入梁立つ云々　梁茨明集　柳歌を引く。此國の古事なる右の神詠ありし宮殿ふ選ばの事を今大社の宮ふ掛けて云ふ。

大社

おほやしろ

長俊作

ワキ次第「誓ひ數多の神祭。出雲の國を尋ねん。詞「そも〳〵是ハ當今に仕へ奉る臣下なり。扨も出雲の國に於て。今月ハ神有月とて諸神影向成り。御神事さま〴〵の由承り及び候ふ程に。此度參詣仕り候ふ。道行「朝立つや。旅の衣の遥々と。行方しぐる雲霧の。山又山を超え過ぎて。神有月も名にしおふ。出雲の國に着きにけり。

シテツレ一聲「八雲立つ。出雲八重垣妻こめし。宮路に運ぶ歩みかな。ツレ「尾上の松の梢まで。二人「神風誘ふ聲ならん。シテサシ「實にや濁世の人間と。生まれ來ぬれど誓ひある。二人「神に仕ふる身にしあれば。漏れぬ惠みにかゝりきて。心のまゝの春秋を。送り迎へて年月の。盡きせぬ世々を頼むなり。歌「いざや歩みを運ばん。いづくにか。神の宿らぬ影ならん。嶺も尾上も松杉も。山河海村野田。殘る方なく神のます。御蔭を受けて隔てなき。宮人多き往來かな。

ワキ詞「我出雲の國大社に參り。案内をうかゞふ所に。宮人あまた來れり。如何に方々に申すべき事の候ふ。シテ詞「是ハ此あたりにてハ見馴れ申さぬ御事なり。何處よりの御參詣にて候ふぞ。ワキ「さん候ふ是は朝に隙なき身なれども。當國に於て今月は神有月とて。諸神殘らず影向の地と承り及びて候へば。此度若に御暇を申し。遥々參詣申したり。ツレ「實に有り難や神と君との。ワキ「隔てなき世のしるしとて。シテ「歩みを運ぶ此神の。ワキ「惠み普き。シテ「月影も。地「神の世を。思ひ出雲の宮柱。ふとしき

大社　杵築大社を云ふ。出雲郡にあり。幽冥界の主宰ときします大國主神を祭る。

朝ふ隙なき　朝廷ふ出仕して閑暇の無きを云ふ。官人ぞと名のるなり。

思ひ出雲の　思ひ出づると云ひかけたり。

ふとしき　柱を太く作りて立つるを云ふ。

敷島の大和島根まで　大和の枕詞。宮柱の丈夫なるのみならず日本國までも動かぬの意。實ふや紅も　紅とは紅葉の色を云ふ。

三十八社の數。　大社附屬の摂社末社勸請　神靈を招きて祭る事。大國主神の御子を五人の王子云ふ。但し古事記日本紀などの傳說とは替れり。俗說ふ從ひて作れるなるべし。

あしかの大明神　この社を古へ開受筏（あぢき）とも開式（あしき）とも云へり。今へ出雲郡遠紫村ふあり。大國主神の御妻味鉏高彦根神（あぢすきたかひこね）をまつれるなるべし。

淡の大明神　美形（みたみ）神社を說りて「みなと」とせしふや。然らば大國主神の御子和加布都奴志命（わかふつぬしのみこと）を祭れる社なり。

宗像の明神　筑前ふあり。但し祭るところへ右の神ふ非ず。傳と知るべし。

伊奈佐の速玉の神　出雲郡ふて速玉の御前神天鳥船神を祭り。速玉社へ意宇郡ふて速玉男神を祭る。何れも大國主神の御子ふ非ず。

常陸鹿島の明神　すなへち右の

立ちて敷島の。大和島根まで。動かぬ國ぞ久しき。實にや紅も。深くなり行く梢より。しぐれて渡る深山邊の。里も冬立つ氣色かな。

ワキ詞「不知案内の事にて候へべ。當社の神秘委しく御物語り候へ。地クリ「そもく出雲の國大社は。三十八社を勸請の地なり。シテサシ「然るに五人の王子おはします。地「第一はあしかの大明神と顯はれ給ふ。山王權現是なり。シテ「第二には淡の大明神。地「九州宗像の明神と顯はれ給ふ。第三は伊奈佐の速玉の神。常陸鹿島の明神とかや。クセ「第四には鳥屋の大明神。信濃の諏訪の明神と。即ち現じおはします。第五には出雲路の大明神。伊豫の三島の明神と。顯はれ給ふ御誓ひ。實に曇りなき長月や。月のみうかにとりわきて。シテ「住吉一所は影向なる。地「殘りの神々は。十月一日の寅の時に。悉く影向なり。さまくいろい

御宮（たけみかづち）神ふて。勅使ふ天上より降り來り。大國主神をして此國土を天孫ふ讓りしめし神なり。

鳥屋の大明神　出雲郡戸の北鳥屋村にあり。坂部大明神と云ふ。大國主神の御子建御名方（たけみなかた）神を祭る。

出雲路の大明神　出雲神社へ神門郡ふあり。八束水臣津野（やつかみづおみづぬ）命を祭る。出雲國を開きたる神なり。

伊豫の三島　大山祇神にて大國主神ふ關係なき神。

すべての神　十月朔日の朝參會し給ふふ。住吉一神へ九月晦日の夜ひそかに來臨し給ふと云ひ傳へたり。

「みうか」へ「ひうか」ふ同じ。あらぶる神達の　荒ぶる神の意なるべ。こゝふへ「有」と云ひかけて神とつゞけたるまでなり。「荒」の意なし。

白木綿かくる玉垣ふ　榊を掛け裝飾せる神社の垣を云ふ。

出雲の御崎に　出雲郡ふ御崎神社あり。祭神へ八束水臣津野命なり。是を略省せしにや。本地云々　日本ふて美しき神と現れて所を示れ給へど。もとへ十羅刹女と云ふ鬼神ぞと云ふ佛者の說なり。

ろの神遊び。今も絶にせぬ此宮居。語るも中々愚かなる譬ひなるべし。

ロンギ地「實に有り難き物語り。末世ながらも隔てなき。神の威光ぞあらたなる。シテ「なかくなれや年々に。今日の今宵の神遊び。地「其役々も。シテ「數々に。地「あらぶる神達の舞歌の袖。引くや御注連の名は誰と。白木綿かくる玉垣に。立ち寄ると見えつるが。神の告げぞと云ひ捨てゝ。社壇に入りにけり。社壇の内に入りにけり。

地「しぐるゝ空も雲晴れて。月も輝く玉の御殿に。光りを添ふる氣色かな。

天女「我は是れ。出雲の御崎に跡を垂れ。佛法王法を守りの神。本地十羅刹女の化現なり。地「容顏美麗の女体の神。光りもかゝやく袂のかんざし。かざしも勾ふ袂を返す。夜遊の舞樂はおも

しろや。

地「實に類ひなき舞の袖。靡くや雲の絶間より。諸神は殘らず顯はれ給ひ。舞樂を奏し神前に飛行し。早とく姿を顯はし給へと。夕べの月も雲晴れて。光りも朱の玉垣かゝやき。神体顯はれおはします。

ロンギ地「實にや貴き御相好。まのあたりなる神德を。受くるも君の惠みかな。シテ「とても夜遊の神祭。委しくいざや顯はし。彼客人を慰めん。地「扨神樂の役々は。シテ「住吉鹿島。地「諏訪熱田。其外三千世界の諸神は。こゝに影向なり。とりぐの小忌の袖。返すぐも面白や。

地「舞樂も今は時過ぎて。更け行く空もしぐるゝ雲の。沖よりはやて吹き立つ波は。海龍王の出現かや。

龍神「うもく是は。海龍王とは我事なり。扨も毎年龍宮より。

小忌の袖　舞人の装束。

大社にて十月に行はるゝ神事の内に。祝文の小忌を捕へて神殿に納め奉る儀式ある是なり。

黄金の箱に小龍を入れ。神前に捧げ申すなり。地「龍神即ち顯はれて。波をはらひ潮を退け。河に上り御箱をすゑ置き。神前を拜し渴仰せり。其時龍神御箱の蓋を。忽ち開き。小龍を取り出だし。即ち神前に捧げ申し。海陸ともに治まる御代の。實に有り難き惠みかな。

シテ「四海安全に國治まり。地「四海安全に國治まつて。五穀成就福壽圓滿に。いよく君を守るべしと。木綿四手の數々。神々とりぐに御前を拂ひ。神あげの御山に上らせ給へは。龍神平地に波浪を起こし。逆卷く潮に引かれ行けば。諸神は虛空に徧滿しつゝ。げにあらたまる神は社内。龍神は海中に入りにけり。

神あげの御山に　神あげとは神盟を山上に近り給ふを云ふ。十月の參會すべて神々大社の神山にのぼりて各わかれ去り給ふなり。

げにあらたなる神は社内　客神を送り終りて主神は杵築の社内に歸り給ふなり。

前シテ　老翁
ツレ　男　伊弉諾尊
後シテ　伊弉諾尊
ワキ　臣下
地ハ　淡路
伊弉諾尊の神德を述ぶるを主とし。例の書時神道家ふ行はれし俗說を適合して作れり。

住吉玉津島　攝津なり。紀州なり。共ふ和歌の神なれば參詣せしなり。伊弉諾尊も歌のお原を愛し給ひし神なれば緣故あり。

波吹上の　吹上ハ紀伊の名所。波ふ風の吹きあぐると云ひかけたり。

移りきて　舟路の移りかはりて淡路ふ近づく事。

ようふ霞みし　遠方から霞か霧かの間ふ詠めしの意。

種を收めし　稻を植ゑて既ふ收納を得し國なるを云ふ。種より生えたる稻を苗代と云ひ。苗代を生長せしむる田を苗代田と云ひ。うれふ引く水を苗代水と云ふ。五月田植の

淡路

あはぢ

古名　楪　ゆづるは

清女作

ワキ次第「治まる國の始めもや。淡路の神代なるらん。」詞「そもそも是ハ當今に仕へ奉る臣下なり。さても我宿願の子細あるにより。住吉玉津島に參詣仕りて候ふ。又よきついでなれば。是より淡路の國に渡り。神代の古跡をも一見せばやと存じ候ふ。」道行「紀の海や。波吹上の浦風に。跡遠ざかる沖つ舟。汐路程なく移りきて。よそに霞みし島影や。淡路潟にも着きにけり。」詞「急ぎ候ふ程に。是ハはや淡路の國に着きて候ふ。此所の人を待ち。神代の古跡を尋ねばやと存じ候ふ。」シテツレ一聲「神の代の。跡を殘して海山の。のどけき波の淡路が」シテサシ「種を收めし國なれば。二人「苗代水も豐かなり。」シテサシた。ツレ「夫れ陰陽の神代より。今人界に至るまで。二人「山河草木國土

陰至ちゞ拔き取りて他の田ふ植へ植ゑんための蹟なり。陰陽の神代　諸冊二尊はじめて夫婦の道を開き給ひしかゞ。其時代を云ふ。陰陽ハ男女の事。

心の池の云ひがたき　心のひろきを池ふ喩ふ。池の鏡の事を「いひ」と續ふれゞそれふ云ひかけたり。

春の田を人ふまかせて我ハたゞ花ふ心（をつくる頃かな）の歌を引く。　金葉集

あこがるゝ事。　魂の浮かれて身を離るゝ事。

根田　紀伊なりとも屋張なりとも云ふ。こゝハ名の面白き爲めふ引けるのみ。　落花の雪を拂ふ雪をもかへす　の意。

水口　田ふ水を引き入るゝ口なり。

みてぐら　こゝハ幣の事を云ふ。

五十串　齋串（いみぐし）の意ふて清淨なる幣を云ふが本なり。それを五十と借字ふ書きたる爲め。後世いろ〳〵ふ勿体つけて云ひなせるなり。串ハ幣を挾む竹の事。

御供田　神ふ供ふる米を作る田なり。

ハ皆。神の惠みに作り田の。雨つちくれを濕ほして。千里萬里の外までも。皆たのしめる時とか。歌「頃しも今ハのどかなる。心の池の云ひがたき。春のけしきもさまぐに。春の田を。人にまかせて我ハたゞ。花に心のあこがるゝ。盛りにひかれて苗代の。水に心の種蒔きて。散れべこゝもや櫻田の。雪をもかへすけしきかな。」

ワキ詞「いかに是なる翁に尋ぬべき事あり。れことの風情を見るに。小田を返しながら水口に幣帛を立て。誠に信心のけしきなり。いかさま是は御神田にて候ふか。」シテ詞「さん候ふ春の田を作らんとては。よろづ悅ぶ事の候ふ程に。あの水口に五十串として五十の幣帛を立て。神を祭り候ふ。然れべある歌に。谷水をせく水口に五十串たて。苗代小田の種まきにけり。」其上此御田ハ。當社二の宮の御供田にて御座候ふ程に。殊には內外清淨に

國中一二の云々　國の中ふ第一の宮ある故ふ第二の宮もあるの意ふい非ずとなり。

神い一きう　一休の文字を一休と無學釈みあせしふい非ぬか。一宮ふても聞こえぬ事なり。

伊弉諾と書いて云々　俗神道者の俗人を眩惑せんとて。斯くの如き無稽の說を作りて勿体らし

て御田を作り候ふよ。ワキ「さては當社二の宮にてましまさば。國の一の宮はいづくにてましますぞや。若し楪葉の權現にて御坐候ふやらん。シテ「恐れながら惡しく御心得候ふ物かな。當社は二の宮にてましませばとて。國中一二の次第にあらず。ツレ「御覽候へ當社の神達。二柱の社の御殿なれば。シテ「ふたつの宮居を其まゝにて。二の宮とあがめ奉るなり。二人「是は即ち伊弉諾伊弉冊の尊二柱の。神代のまゝに宮居したまふ淡路の國の。神は一きう宮居は二つの。二の宮とあがめ申すなり。ワキ「よく聞けば有り難や。さて〳〵かゝる國土の種を。あまねく受くる御恩德。只此神の誓ひよのう。シテ詞「事あたらしき御諚かな。國土世界や萬物の。出生あまねき御神德。唯是れ當社の誓ひなり。シテ「然れば開けし天地の。伊弉諾と書いては。シテ詞「たねまくとよみ。ツレ「伊弉冊と書いては。シテ詞「たねををさむ。

〳〵云ふい當時の風なり。今日その理を詞めん必要なし。

水うらゝふて　うらゝい美麗の意なれど。こゝは「澄か」と云ふ程の意ふ見るべし。

天よりくだれる　稻種い天照大神の作り始め給ひしを國土ふ傳へなりとなり。

富草　稻の異名。

村早苗の秋　群がりて生ゆる早苗の意。其實のる秋の時節至らばの意。

渾沌未分云々　一つふ樂まり居てまだ二分せざりし天地が。次第々々ふ分れて來る時を云ふ。

おのころ島　二神の始めて天上より降り給ひし地。

ツレ「是れ目前の御誓ひなり。シテ「其上神代は遠からず。ツレ「今目の前にも。シテ「御覽ぜよ。地「種を蒔き。種を收めて苗代の。水うらゝにて春雨の。天よりくだれる種蒔きて。國土も豐かに。千里榮ふる富草の。村早稻の秋になるならば。種を收めん神德。ワキ詞「なほ〳〵當社の神秘ねんごろに御物がたり候へ。地クリあら有り難の誓ひやな。

「夫れ天地開闢の昔より。渾沌未分やうやく分れて。清く明らかなるは天となり。重く濁れるは地となれり。シテサシ「然れば天に五行の神まします。木火土金水是なり。地「既に陰陽相分れて。木火土の精伊弉諾となり。金水の精凝り固まつて伊弉冊と顯はる。シテ「然れどもいまだ世界ともならざりし先を伊弉諾といひ。地「國土治まり萬物出生する所を伊弉冊と申す。即ち此淡路の國をはじめとせり。クセ「さればにや。二柱の御神の。れのこ

四つの海岸　四海の國と云ふ程の意なるべし。

日神云々　日神云々　此四神ハ共ゐ當社の御子なり。

地神五代　巻首玉井ゐ云へり。

只今の國土　只今の國土　神代の流跡ハ現然存し居るの意。

天の浮橋　神代ゐ掛かり居しと云ふ天地間の通路なり。

御客人　案詞せし臣下を指す。

うば玉の云々　當社の御神歌と云ひ傳へし歌なるべし。

ろ島と申すも。此一島の事かとよ。凡そ此島はじめて。大八島の國をつくり。紀の國伊勢志摩日向並に。四つの海岸を作りいだし。日神月神蛭子素盞嗚と申すは。地神五代のはじめにて。皆此島に御出現。中にも皇孫は。日向の國に天降り給ひて。地神第四の。火火出見の皇子を御出生。實に有り難き代々とかや。

シテ「天下をたもち給ふ事。地「すべて八十三萬。六千八百餘歳なり。かゝるめでたき皇子達に。御代を楪葉の權現と顯はれおはします。伊弉諾伊弉冊の神代も。只今の國土なるべし。

ロンギ地「實に神の代の道直に。今も妙なる秋津州の。君の御影ぞ有り難き。シテ「御影ぞと。夕日がくれの雲の端に。たなびく天の浮橋の。いにしへを顯はして。御客人をなぐさめん。地「うも浮橋のいにしへと。聞くはいかなる言の葉の。シテ「其神歌は烏羽玉の。我黑髪も。地「亂れずに。結び定めよ小夜の手枕の。

わたつみのかざしゐさせる白(妙)の波もて結へる淡路島(山)　古今集の歌なり。わたつみハ海を也。海神をも云ふ。其頭の飾ゐ用ひたる白波ゐて淡路島を結ひ包みたりと。面白く見立てゝよめるなり。

八島の國を求め得し　二神浮橋ゐ立ちて海中ゐ鉾をおろし。探り試み給ひしかば。此時はじめておのごろ島を得給ひしを云ふ。是れ日本の起原なり。

國常立の神　伊弉諾尊より以前の神なり。治さる國と云ひかけたり。

七つ五つの　天神七代地神五代を云ふ。巻首玉井ゐ委し。

和光守護神　光を和らげ人ゐ交りて國を守る神の意。

扶桑　日本の異名。

ふりさげし　浮橋より下げおろしたるの意。

歌の種蒔きし。神とも今は白波の。淡路山を浮橋にて。天の戸を渡り失せにけり。

ワキ歌「實に今とても神の世の。御末はあらたなりけりと。いへば虛空に夜神樂の。月に聞こにて光さす。けしきゐあらたなりける。

後シテ「わたづみの挿頭に刺せる白玉の。波もて結へる淡路島。月春の夜ものどかなる。緑の空も澄み渡る。天の浮橋の上にして。八島の國を求め得し。伊弉諾の神とは我事なり。治まるや國常立の始めより。地「七つ五つの神の代の。シテ「御末は今に君の代より。地「和光守護神の扶桑の御國に。風は吹けども山は動ぜず。

ロンギ地「げに有り難き御誓ひ。そもゝ天の浮橋の。其御出所はさるにても。いかなる所なるらん。シテ「ふりさげし。鉾の滴

淡路よと「あれよ」と云ふべきを「あハ」と云ふハ古言なり。それを淡路ゐ云ひかけたり。こゝぞ浮橋の下ならん　天より借かりし橋の端ハ此淡路の地ならんとの意。

さすハ手風。　鉾を振る手より生ずる風。

引く　舞の手の名。それを閣の引くゐ云ひかけたり。

千秋の秋津島　秋の文字を頂ねて云ひかけたり。

シテ（女）子方　侍従　中将姫　男　従者　ワキ　横佩右大臣　トモ（一同）従者　ハ　大和

中将姫幾母の讒ゐかゝりて雲雀山ゐ捨てられしを。侍従と云ふ乳母もりたてゝ庵を作りて住ませ置き。春ハ木草の花を里ゐ持ち出で、賞りつゝ慰動を盡したるが。遂ゐ拘當ゆるされて家ゐ歸る事を作れり。継母の事をあらハゐさる人の發言せぬ讒言の事なり。奏の文字は當らぬ使い方なれど。無學時代ゐハかゝる誤用文字も行われしと知るべし。

雲雀山日張山とも鴻山とも書く。字陀郡の字賀志村ゐあり。

山中ゐ書寺尼寺あり。

是を代なし　花を賞りて代價とすでし申し候ふ　生活さするの意。かふる事。

閑窓ゐ煙絶て云を家貧ゐして云云　共ゐ古語を引きて身の上を嘆息するなり。

孤もきゐも疎くなれば　父母ゐさへ捨てられたればの意。

さらばゐの有りもせで　ゐも謂ゐ入りて無きが如きの意を。必ず無く夏草の茂る事にかけていふ。

露いつまでの云々　草葉の露の如く今ゐも消ゆべき身を云ふ。

かくて煙も絶ねくの　露の煙も立てかぬるの意。

よるの情を　里人に花を買うて

り露凝りて。一島となりしを。淡路よと見つけし。こゝゐ浮橋の下ならん。地「げに此島の有樣。東西は海漫々として。シテ「南北に雲風をつらね。地「宮殿にかゝる浮橋を。シテ「立ち渡り舞ふは波の蘆原の。國富み民も豊かに。萬歳をうたふ松の聲。千秋の秋津島。治まる國ゐ久しき。

雲雀山　ひばりやま

元清作

男詞「かやうに候ふ者は。奈良の都横佩の右大臣豊成公に仕へ申す者にて候ふ。扨も姫君を一人御持ち候ふを。さる人の讒奏により。大和紀の國の境なる。雲雀山にて失ひ申せとの仰せにて候ふ程に。是まで御供申して候へども。如何にして失ひ申すべきと存じ。紫の巷を結び兎角いたはり申し候ふ。さる程に侍從と申す乳母。春は木々の花を手折り。秋は草花を取りて里に出で。往來の人に是を代なし。彼姫君をすでし申し候ふ。今日も侍從を呼び出だし。里へ下さばやと存じ候ふ。如何に申すべき事の候ふ。シテ詞「何事にて候ふぞ。男「今日もまた里へ御出で候へ。シテ「さらば姫君に御暇を申し候ふべし。男「やがて御暇を申し里へ御出で候へ。シテ「如何に申すべき事の候ふ。今日も里へ出でてやがて歸り候ふべし。姫サシ「實にや閑窓に煙絶にて。春の日いとゞ暮らし難う。シテ「弊室に燈消にて。秋の夜猶長し。家貧にしては親知少く。賤しき身には故人疎し。親しきだにも疎くなれば。地「よそ人へいかで訪ふべき。さなきだに狹き世に。隱れ住む身の山深み。さらぬ心の有りもせで。唯道せばき埋草。露いつまでの身ならまし。かくて煙も絶えぐの。光りの影も惜しきまに。よるの情を頼まんと。草の扉を引きたてゝ。又里

へこそ出でにけれ。

ワキ次第「傾く嶺の雲雀山。上るや雲路なるらん。」詞「これハ横佩の右大臣豐成とハ我事なり。一同「それ狩場は四季の遊びにて。時折節の興を增す。歌「梓の眞弓春くれバ。霞む外山の櫻狩。雨は降り來ぬ同じくハ。濡るとも花の木陰に宿らん。扨又月は夜を殘す。雪には明くる交野の御野。禁野につゞく天の川。空にぞ雁の聲ハ居る。

シテサシ「五月待つ花橘の香をかげバ。昔の人の袖の香ぞする。

詞「實にや昔も君の爲め。故ある木の實を集めつゝ。常世の國まで行きしぞかし。我も主君の御爲めに。色ある花を手折りつゝ。葉末に結ぶ露の御身を。殘しやすると思ひ草。いろ〳〵の頃を得て。咲く卯の花の杜若。地「紫染むる山草の。シテ「色香にめでて花めされ候へ。地「月ハ見ん。月には見えじながらへて。憂き

世を廻ぐる影も恥づかしの。森の下草咲きにけり。花ながら刈りて賣らうよ。日頃經て。待つ日は聞かず時鳥。勾ひもとめて尋ねくる。花橘や召さるゝ。

トモ詞「如何に尋ね申すべき事の候ふ。其花をば何の爲めに持ち給ひて候ふぞ。シテ詞「さん候ふ是は故ある人に參らせん爲めに持ちて候ふ。いづれにても候へ色香にめでゝめされ候へ。花檻前に笑んで聲いまだ聞かず。鳥林下に鳴いて涙盡き難し。實にも盡きぬは花の種。色々なれや紅は。いづれ深百合深見草。御心寄せにめされ候へとよ。トモ「實におもしろき賣物かな。扨其花を賣る事は。分きて謂のあるやらん。シテ「あらむつかしと御尋ねあるや。めされまじくは御心ゆとよ。地「色々の。人の心は不知白露の。枝に霜ハ置くとも。猶常磐なれや橘の。目覺草の戲むれ。其方の身には何事も。包む事はなくとも。來し方なれやいにし

思ひを云ふ。草の名。我夢カきて主君の御命をながらへしめんと思ふの意。卯の花の垣根と云ひかけたり。卯の花の垣根と紫染むる山草の云々　古今集の一云ふ歌あり。紫の草の生える所へ。紫の草も土岩紫なる色ハ染まると云ひ習ハしたり。故に紫をゆかりの色と云ふ。と云ふ歌あり。紫の草を召さるゝと云ふ。と云ふ意を含みて縁あるべし。然れども未だ實ハ知らぬなり。月をハ我詠めんとなり。月ハ見んと夢ハ知らぬ。月ハ我家を見ぬ。月ハ見にたくなしとなり。月ハ見にたくなしとなり。はづかしの森。山城の名所。時鳥も其花をとめて鳴くると云ふ。橘を匂ひもとめて來ると云ふ。橘を買ひ給へとなり。牡丹の事。御心ふかひたるも御心寄せのを寄せの意。

夜ふ語ハ盡くとも云々　橘ハ露ふも霜ふも結れずして四時青々としたるを云ふ。目覺草　橘の芽と云ひかけたり。草の名ふハ非ず。目を慰むる材料を云ふ。これを草の名の

へをも。忍ぶ草を召されよや。シテ「朝もよい。地「朝もよい。紀の關守が手束弓。入るさか歸るさか。何れにてもましませ。などや花は召されぬ。あら花すかずの人々や。花すかぬ人ゞをかしき。

トモ詞「さらば此花を買ひ取り候ふべし。又御身のこしかたを懇に御物語り候へ。シテ「春霞。立つを見捨てゝ行く雁は。地「花なき里に住みや習へると。心うらなる疑ひかな。シテサシ「歎冬あやまつて暮春の風に綻び。地「又躑躅は夜遊の人の折りを得て。驚く春の夢の中。胡蝶の遊び色香にめでしも。皆是れ心の花ならずや。シテ「實におもしろき優花の友。地「春の心や惜しむらん。クセ「思へ櫻色に。染めし袂の惜しければ。衣替へ憂き今日にゞ有りける。うれのみかいつしかに。春を隔つる杜若。いつ唐衣遥々の。面影殘るかほよ鳥の。鳴きうつる聲まで。身の上に聞くあはれさよ。斯くてゞ花にめで。鳥を羨む人心。思ひの露も深見草の。茂みの花衣。野を分け山に出で入れども。さらに人は白玉の。思ひは内にあれど。色になどや顯はれぬ。シテ「さるにても。馴れしまゝにていつしかに。地「今は昔に奈良坂や。このて柏の二面。兎にも角にも故郷の。よそめになりて葛城や。高間の山の嶺つゞき。こゝに紀の路の境なる。雲雀山に隱れ居て。霞の網にかゝり。目路もなき谷陰の。鵑の草ぐきならぬ身の。露に置かれ雨に打たれ。斯くても消ぬやらぬ。御身の果ゞいたはしき。シテ「遠近の。地「たづきも知らぬ山中に。ねぼつかなくも呼子鳥の。雲雀山にや待ち給ふらん。いざや歸らん。

ワキ詞「やあ如何に御事は乳母の侍從にてはなきか。豐成をば見忘れてあるか。扨も我姫よしなき者の讒奏により失ひしかども。科なき由を聞き後悔すれども叶はず。まことや御事がはからひ

とふもかくふも（侯人の友）萬葉集の歌を引く。このてがしは萬葉集の歌に兩面ふ爲りたる故ふ。あちへもこちへも如ひ詞ふ小人を譬へたり。

よそふのみなりて　新古今集の「よそふのみ見てや止みなん綾の城や苔閉の山の丹雲」の歌を引きて。故郷のよそふなりて再び歸られぬ事を云ふ。

霞の網ふかりし　霞の深く立ち隱すを網ふ見なし。中將姫の世間ふ出られぬ事を魚姫の網ふかゝるふ譬へて云ふ。

目路もなき　網の目の意ふ云ひかけたり。目前ふ見わたす遠の場所も無く狹き意。但し次の歌より出でたる詞なり。

鳴の草もを　「草くもり」の意ふて鳴が野の草を分けくゝるを云ふ。其草くゝるを鳴ふ有らねど。我等も山中ふて苦をするの意。續古今集後嵯峨の「訪へかし玉くしの葉の鳴ふ身がくれて鳴の草もき目路なしとあり。

遠近のたづきも知らぬ山中ふおぼつかなくも呼ぶ子島（かな）　古今集の歌なり。たづきも知らぬ山中ふ人の通ふ便りも無きふ。我を呼ぶ鳥の聲よとなり。

乳母いつかなき鳥の聲よとなり。古歌を吟じて歸らんとする人のかどとを　無鼎の者を罪あり。

茂みふ交じる姫百合の　草ふ隱れて花の見えぬを。死したる人諸天の逢ひ慈きふ譬へて云ふ。

有らゆる天神を云ふ。

として。此雲雀山の谷陰に。柴の巷を結び隱し置きたるとは聞きしかども。誠しからぬ所に。今御事を見てこそ扨はと思へ。姫は何處にあるゾ包まず申し候へ。シテ詞「是は仰せとも覺ぬものかな。人のかどとを御用ひありて。失ひ給ひし中將姫の。何しに此世にましますべき。如何に御尋ねありとても。地「今は御身も夏草の。茂みに交じる姫百合の。知られぬ御身なり。何をか尋ね給ふらん。ワキ詞「實に〳〵うれはさる事なれども。先非を悔ゆる父が心。涙の色にも見ゆらん物を。はや有りどころを申すべし。シテ「まこと左樣に思し召すか。ワキ「中々諸天氏の神も。正に照覽あるべきなり。シテ「さらば此方へ御出であれと。其處とも知らぬ雲雀山の。草木を分けて谷陰の。栞を道ふ足引の。地「山ふところの空木に。草を結び草を敷きて。四鳥のねぐらに親と子の。思はず歸り逢ひながら。互に見恰れて。唯嬉く

氏の神　我家の鎮神を云ふ。

そことも知らぬ　道も分かぬを云ふ。

草の中なれば云ふ。

栞を道ふ　木などを立てゝ道の案内ふする。「しをり」と云ふ。

こゝに唯我心覺えの木や草などを目じるしとしての意をるべし。

足引の　山の枕詞。

山ふところの　山ふ圍まれたる谷間の邊を云ふ。

うつぼ木　うろふ爲りたる木の洞を云ふ。

四鳥のねぐら　一つ巢のもとふ有らたる鳥の子が生長して。四鳥四方ふおのゝ飛び別れたる古事を引きて。いま鳥の巢のやうなる伏屋ふて。飛び別れし鳥の歸りし如く父ふ再會せしを云へるなり。古事ハ第二卷隅田川を見るべし。

定めなきこそ定めなれ　世ふハ實ふ不定の事のみ多し。不定の事のみ起るが世の定めなりとの意。徒然草ふも「不定のみ眞ハず」と云へり。

奈良の都の八重櫻　伊勢物語の「古への奈良の都の八重櫻けふ九重ふ匂ひぬるかな」の詞を用ひて云ふ。

咲きかへる道　親子の再會を花の再び春ふ逢ひて咲くふ譬へて云ふ。

のみの心かな。實にや世の中ハ。定めなきこそ定めなれ。夢ならべ覺めぬまに。はやとく〳〵と有りしかば。乳母御手を引き立てゝ。御輿に乘せ參らせて。御悅びの歸るさに。奈良の都の八重櫻。咲きかへる道ぞめでたき。

戀重荷

ひのおもに

元清作

ワキ詞「そも〳〵是は白河の院に仕へ奉る臣下なり。さても我君菊を御寵愛有つて。毎年あまたの菊を植ゑられ候ふ。又こゝに山科の荘司とて賤しき者の候ふ。いつも菊の下葉を取らせられ候ふ間。申しつけばやと存じ候ふ。又承り候へば。彼者

山科荘司　シテ
同　侯シテ
女御　ツレ
宮人　ワキ
宮ふ　狂言
ハ　鳴

貴女を戀慕せし　殿上の。其れが爲めに苦役を受けて遂ふ空しくなる事を作れり。此一曲ハ赤く後世大花園天皇の御作なるを。後世ふ第二世の結綿阿彌元清ふ脚夫にて一番の能とせしめられし。同家の家傳ふあり。

いかなるをりにか。添くも女御の御姿を拜み申し。勿体なくも戀と爲りたる由承り候ふ間。彼者を召し出だし尋ねばやと存じ候ふ。いかに誰かある。狂言「御前に候ふ。ワキ「山科の莊司に此方へ來れと申し候へ。狂言「畏つて候ふ。いかに山科の莊司の渡り候ふか。シテ詞「誰にて渡り候ふぞ。狂言「いそぎ御參りあれとの御事にて候ふ。シテ「畏つて候ふ。ワキ「いかに莊司。何とて此間は御庭をば清めぬぞ。ワキ「さん候ふ此程所勞仕り候ひて。さて怠り申して候ふ。シテ「尤にて候ふ。さて汝は戀をするといふは誠か。シテ「さやうの事をば何とて知ろしめされて候ふぞ。ワキ「いや〳〵はや色にいでゝあるぞとよ。さる間此事を添くも女御きこしめし及ばれ。急ぎ此荷を持ちて御庭を百度千度まはるならば。其間は御姿を拜ませ給ふべきとの御事なり。なんぼう有り難き御諚にてはなきか。シテ「何と此事をきこしめし及ばれ。其荷を持ちて御庭を百度千度とはれとかや。百度千度とは百度も千度も持ちてまはらば。其間に御姿を拜まれさせ給ふべきと候ふや。ワキ「げにより心得て有るぞ。なんぼう有り難き御事にてはなきか。シテ「さらば其荷を御見せ候へ。ワキ「此方へ來り候へ。是こそ戀の重荷よ。なんぼう美しき荷にてはなきか。シテ「げに〳〵美しき荷にて候ふ。たとひ叶はぬ業なりとも。仰せならばさこそあるべけれ。ましてや是は賤しき業。さのみは隔てじ名を聞くも。地「重荷なりとも逢ふまでの。戀の持夫に爲らうよ。シテ「誰踏みそめて戀の路。地「ちまたに人の迷ふらん。シテ「名もことわりや戀の重荷。地「げに持ちかぬる此身かな。シテサシ「夫れ及びがたきは高き山。思ひの深きはわたづみの如し。地「いづれ以てたやすからんや。げに心さへ輕き身の。塵の浮世にながらへて。よしなく物を思ふかな。

たとひ叶はぬ云々　力及ばず。なまじ勿論ならば是非無きふ。賤者が力役に手を入りたるものなれば。の意。さのみは隔てじ　親しく手を取りて運ばんの意。戀の持夫　戀を重き物体を見なして云ふ。持夫に持ち運ぶ人夫の意。ちまたに人の　街に道あまた出逢ふ爲ふて人の迷い易ければ云ふ。千々色々ふの意をも兼ねたり。

わたづみ　海の事。

露のかごとを　てゝの「かごと」は假の言葉を云ふ。人のつれなきを恨むなり。

夕顔の云々　源氏物語の古事。光源氏の黄昏時に夕顔の宿を訪へれしこと。委しくは第四卷夕顔を見るべし。

唐國の虎と思へば石にだに　今昔物語に「昔士に李廣と云ふ人あり。一の虎を射て母を殺せり。人ありて李廣に告げ。李廣弓矢を取りて。虎のあるを尋ねて山野に分け入りて。虎に逢ひて見るに虎臥したり。李廣喜びて之を射ち。見れば虎に似たる石なり。李廣が念力強き故に石なりと。矢の立ちたるなり」とある古事。

いかに　持つや前の運ぶなる　持つや前の運ぶなる　荷前の意。諸國の貢米の初荷を奉らるゝ事にあるまじの意。

精神一到せば輕く　精神一到せば輕く持たれぬ事はなし　の意。

天皇の御陵を拂へ　天皇の御陵を拂へ　の意。

席を奉ちる　席を奉ちる　の意。

行く勅使を　行く勅使を　の意。

二月十三日　二月十三日　の意。

又其幣帛　又其幣帛を入れたる故の意。

「逆さ」　「逆さ」を云ひかけたり。

懇の奴　懇の奴　の意。

せらるゝを　せらるゝを　の意。

無き世なるを　無き世なるを　の意。

我身の使役　我身の使役　の意。

死亡しても　死亡しても　の意。

唯たのめ云々　唯たのめ云々　の意。

湖水顔の歌　湖水顔の歌　の意。

「たゞ頼めしもとさ我世の中」　「たゞ頼めしもとさ我世の中」　の意。

ちが原　ちが原　の意。

下繰の地名。　下繰の地名。　の意。

此歌の解は第一卷田村に詳らるゝものかの意。

ロンギ地「思ひや少し慰むと。露のかごとを夕顔の。黄昏時もはや過きぬ。戀の重荷を持つやらん。シテ「重くとも。思ひは捨てし唐國の。虎と思へば石にだに。立つ矢の有るぞかし。いかにも輕く持たうよ。地「持つや荷前の運ぶなる。心ゑ君が爲めを知る。重くとも心うへて。持てや〳〵下人。シテ「よしとても。此身は輕し徒らに。戀の奴に爲りはてゝ。亡き世なりと憂からじ。地「なき世に爲すもよしなやな。げには命ゑ唯頼め。シテ「しめぢが腹立ちや。地「よしなき戀を菅蓑。伏して見れども寝らればこそ。苦しや獨寝の。我手枕の肩替へて。持てども持たれぬ。ろも戀は何の重荷ゑ。シテ「あはれてふ。言だに無くは何をさて。戀の亂れの。束緒も絶えはてぬ。地「よしや戀ひ死なん。報はぐれゑ人心。亂れ戀になして。思ひ知らせ申さん。

ワキ詞「何と荘司が空しくなりたると申すか。言語道斷近頃不便

同巻へて　同巻へて　の意。

手枕の　手枕の　の意。

荷を持つ　荷を持つ　の意。

あはれてふ　あはれてふ　の意。

無くは何を　無くは何を　の意。

「かの歌」　「かの歌」　の意。

束緒の　束緒の　の意。

今束の　今束の　の意。

なれの　なれの　の意。

束緒ゑ　束緒ゑ　の意。

せんたる　せんたる　の意。

心古を　心古を　の意。

怨むるに足るもの　怨むるに足るもの　の意。

あいかの　あいかの　の意。

いうような　いうような　の意。

先方の人が　先方の人が　の意。

一言いうてくれる　一言いうてくれる　の意。

ふあるとの　ふあるとの　の意。

「亂れ」　「亂れ」　の意。

一と云ふに　一と云ふに　の意。

よりて。　よりて。　の意。

衣類など　衣類など　の意。

取りなして。　取りなして。　の意。

東緒も　東緒も　の意。

其の事ゑ　其の事ゑ　の意。

れをつゝろ　れをつゝろ　の意。

ろへする　ろへする　の意。

よしみ云へり。　よしみ云へり。　の意。

報へゝ　報へゝ　の意。

我慢の女　我慢の女　の意。

御ゑ取り　御ゑ取り　の意。

人心　人心　の意。

つかゞ。　つかゞ。　の意。

其れとも　其れとも　の意。

自葉　自葉　の意。

自得よと　自得よと　の意。

慢みの極度を　慢みの極度を　の意。

迷ぶる釣。　迷ぶる釣。　の意。

亂れ戀に　亂れ戀に　の意。

なして。　なして。　の意。

我慢ゆゑ　我慢ゆゑ　の意。

亂れる心を　亂れる心を　の意。

移して。　移して。　の意。

先方の心を　先方の心を　の意。

狂はしめて　狂はしめて　の意。

見せんの　見せんの　の意。

なる事にて候ふぞや。總じてこひと申す事は。高き賤しき隔てぬ事にて候へども。さりながら。彼者の戀の心を止むとの御方便にて。重荷を作つて上を綾羅錦繡も以て美しく包みて。いかにも輕げに見せて持たせなば。彼者思はんにハ。かほど輕げなる荷なれども。戀の叶ふまじき故に持たれぬぞと心得。戀の心や止るべきとの御事にて候ふ處に。賤しき者のかなしさハ。是を持ち御庭をめぐらば。御姿をまみゑさせ給はん事を悦び。勢力を盡し候へども。もとより重荷なれば持たれぬ事を恨み。嘆きてかやうに身を失ひ候ふ事。かへすゞも不便にこそ候へ。此由を申し上げうずるにて候ふ。いかに申し上げ候ふ。山科の荘司重荷を持ちかねて。御庭にて空しく爲りて候ふ。かやうの賤しき者の一念ハ恐ろしく候ふ。何か苦しう候ふべき。そと御出であつて。彼者の姿を一目御覽ぜられ候へ。

戀よ戀云々　當時行われし古歌なるべし。戀をするならば中途半端なる戀をするなよ。戀の爲め死ぬる先方の死ぬる事い多き例なれば之の意。

報いい常の世の習ひ　因果應報い世の常理ぞとなり。

吉野川岩切り通し行く水の音ゐい立てじ（死ぬじ）。古今集の歌なり。岩切り通しい急流の形容。「行く水の」い「音」を呼び出すまでゐて「立てじ」までい かゝらず。水の如く音ゐ立てゝ人ゐ知らずまじの意。音よせ　言葉を寄する妻の意。荷を持たば逢いんとの言葉を寄せたるの意。もとい萬葉集より出でたる詞なれど用方い違ひたり。

空だのめ　頼みゐせし事のゐひなきを云ふ。重荷を持たば見られんと思ひし女御の遂ゐ見られずして止みしを云ふ。

浮寐のみ云々　此古事ゐもひ得ず。

恨めしや葛の葉の　葛の葉い風ゐ吹き返るものなれば。葛見を恨ゐ云ひかけて常ゐ用ふるより。「恨めしや」とも續けたるなり。「玉」ゐ云ひかけたるい。其葉の山はじめ玉のやうゐ美しき意なるべし。

歌傍の枕詞。是い別ゐ古事あるゐい非ず。山守の如き力ある山人ゐてもの寄「葛の玉」「玉がずき歌傍」「歌傍の山守」「山守も留荷い」と。續いゐる所取文句ゐて一つ〳〵續けたるまでなり。

業合地獄　兩山の間ゐ挾みつぶされ。業ゐて押し碎かれなどする地獄の名。

立ちわかれ云々　行平の歌を引く。姫の立つと云ひかけて「吹き亂れ」を云いん爲めなり。

吹き亂れ　心の亂るゝに云ひかく。

歌傍の山守　死後を佛事もて用ちひ賜いちば。其功德ゐて前世の罪業い消え失すべしの意。此ゐ於て初めて迷を翻へしたるなり。

是までぞ姫小松の　さらば姫君よの意。女御は姫ならねど小松ゐつゞける故の詞を知るべし。

葉守の神　我は前世の御庭守なれば。以後も又經の守護神と爲りて千代の陰を守り。合はせて君の千年を守り奉らんとなり。

ツレ「戀よ戀。我中空に爲すな戀。こひにい人の死なぬものかい。無慙の者の心やな。ワキ詞「是いあまりに忝き御詞にて候ふ。はや〳〵立たせおはしませ。ツレ「いや立たんとすれば盤石に押されて。更に立つべきやうもなし。地「報いい常の世の習ひ。後シテ「吉野川岩切り通し行く水の。音には立てじ戀ひ死にし。一念無量の鬼となるも。唯よしなやな誠なき。言絲妻の空だのめ。地「げにもよしなき心かな。シテ「浮寐のみ。三世の契の滿ちてこそ。石の上にも座すといふに。我はよしなや逢ひがたき。巖の重荷持たるゝものか。あら恨めしや葛の葉の。玉だすき。歌傍の山の山守も。地「さのみ重荷は持たればこそ。シテ「重荷と いふも思ひなり。地「淺間の煙あさましの身や。歌合地獄の重き苦しみ。さて戀り給へや戀り給へ。地「思ひの煙立ち別れ。いなばの山風吹き亂れ。戀路の闇に迷ふとも。跡弔はゞ其恨みは。

霜か雪か霰か。終には跡も消えぬべし。是までぞ姫小松の。葉守の神となりて。千代の陰を守らんや。千代の陰をも守らん。

前シテ　里人（女郎もの精）
後シテ　白菊の精
ツレ（一同）　草花の精
ワキ　都人
ツレ　同行
ハ　京都

女郎花の精あらわれて。白菊ひとり籠を專ふする恨を述べ。同心の花をかたらひて菊を征伐せしむる事を作れり。作者い何か當時を驅課する心ゐても作りしなちん。

花の會　活花の競技會なるべし。

名殘を惜ふ　春を惜しみ秋を惜しむも。つまり花を惜しむ心より出づるなりとの意。

花軍

はないくさ

作者未詳

三人次第「野澤いく〳〵の山かけて。千草の花を尋ねん。ワキ詞「是は都方に住居する者にて候ふ。扨も洛陽に於て。遊樂の瓊筵つきせぬ中に。殊にもてあうび候ふは花の會にて候ふ。今日は伏見の深草に分け入り。草花を尋ねばやと思ひ候ふ。サシ「面白や實に一年の詠めにも。皆草木の花に知る。三人「名殘を思ふ心の

山路幾野ふ　花をしむ心い幾ばくの野山まで踏ひゆくらんとなり。

び ふ住みすてし云々　古今集葉平の歌ふ「年を經て住み來し里を出でゝいなばいとゞ深草野とやなりなん」とあるを引きて云ふ。

花染の云ふ。　花の色ふ染めたる衣をうつろふ　花の中ふ青花と云ふ草ふて染めたる色い。さゆやすき物なれば色のうつる意ふて「うつろふ」ふ云ひかけたり。うつろふ姿とい色の日影ふ映じて美しき事。

心あてふ折らばや折らん　古今集の歌。霜ふ同じ色ふ置いて白菊折る人を惑へしたれば。こゝらあたりとあて推量ふて折る外ふいすべなしの意。

女郎花ふちらの　ちらい「綠のある」と云ふ程の意。

くねる姿い　くねるい「じれる」「すねる」などの意。女と云ふ文字ふ付きて花のあちらこちらと靡きたわむ樣を形容せしなり。古今集の序ふ「女郎花の一時をくねる」など見ゆ。

吉野山　よしやの文字ふ吉の字を重ねたるまでなり。

ふかみ草　牡丹の異名。

未。山路幾野に行きかふ色の。こや九重の情なる。立ち入る雲も遠近の。はや秋深き夕時雨。濡れつゝも。鶉なくなる深草や。誰を忍ぶの淺茅原。げに住み捨てし故郷の。野となりてしも露しげき。草のはつかに暮れ殘る。伏見の澤田水白く。薄霧迷ふ夕べかな。ワキ詞「急ぎ候ふほどに。伏見の里に着きて候ふ。やがて草花を尋ねばやと存じ候ふ。

シテ詞「のうのうあれなる人々。見奉れば都人と見にさせ給ふが。草花をめされ候ふは。いかさま此ほどもてあそび給ふ。下草を尋ね給ふやらん。ワキ詞「實によく御覽ぜられて候ふ。さやうの爲めに人を誘ひ。唯今こゝに來りたり。處の人にてましまさば。花のあるべき處をも悉しく敎へてたび給へ。シテ「先づ此伏見の菊の花は。翁草とて名草なり。其外おほき草花なれば。此方へ入らせ給へとて。ワキ「人の心も花染の。シテ「うつろふ姿も色ふかき。ワキ「日もくれなゐの。シテ「山陰に。地「それぞとばかり心あてに。折らばやや折らん初霜の。置きまどはせる白菊の。花も色うふ夕暮に。猶露しげき野分かな。

シテ詞「いかに申し候ふ。此花どもを召され候はゞ。先づ女郎花を手折り給へ。ワキ詞「是は不思議の仰せかな。處の名草白菊をこそ。先々折るべきことわりなれ。女郎花を手折れとは思ひもよらぬ御事なり。シテ「よしよし承引し給はずい。女郎花に値遇の花をかたらひ。夢中にまみえ花軍を。はじめて白菊うち散らし恨みのほどを晴らさんと。地「くねる姿は女郎花。かりにあらはれ來りたり。今宵の月に待ち給へと。夕暮の花の影に。立ちよりて失せにけり。立ちよると見えて失せにけり。

ツレ一同一聲「思ひ出づる身は深草の秋の露。ちるともよしや吉野山。牡丹「扨も草花の大將よ。牡丹は情もふかみ草。淺からざり

ませ　盛ふ詞に。天つ星　古今集歌行の歌ふ「久方の雲の上ふて見る菊ハ天つ星とぞあやまたれける」とあり。菊を星ふ見なして云へるなり。白髪の老人　白菊を見立てゝ云ふ。翁草の意をも含めたり。

菊の盃　重陽の宴ふ菊を浮して飲む酒を云ふ。

由人の折る袖ふはふ　山人ハ仙人の事。花鳥のたハむるゝ如く楽しみ遊ぶを云ふ。

伏見の竹の　名高なれば云ふ。竹の真直なるを政道の真直なるふかけたり。

千草の花を　もとハ「御代の千代」とありて御代の千代と云ひかけたるふハ非ぬか。こゝの「ふ」文字ハ鬼ふ角耳ざハりのやうなり。

し花の名の。眞先かけて咲き亂れ。地「扨其外の草花の精。四季をり〳〵の時を得て。數をつくせる花の顔。亂れあひたる花軍風にたゞよふ有樣かな。其時芭の内よりも。姿もかゝやく天つ星。照りかゝやける光の内に。白髪も老人顯はれたり。

ツレ「そも〳〵是は伏見の翁草とて。幾年經たる白菊なり。地「實にも心は若草の。位を爭ふ花軍。ことわりなれども翁にゆるし。たがひの軍をやめつべしと。夕日も輝く久方の。雲間の星の光を添へて。菊の盃とり〳〵なり。

地「花の和睦をなし給ひ。勇み悅ぶ草花の心。千代のためしは山人の。折る袖匂ふ菊の露。花鳥の戯むれ。翁は弱々と立ちあがり。伏見の竹の直なる御代に。千草の花を押し分けて朝の。露より此夜は明けにけり。

ツレ　亡母
ワキ　子方　ツレ　姉弟
ワキ　墨津父

出家せし母　亡母の後世を吊らひしか。亡母の名樂をせざりしとて。亡母の事を作れり。爲世は有名の歌人なれば。之を引き合ハするあらハれて。定家卿の曾孫にて。嘉暦四年の制裁し法名を明禪と曰ひし人の事なるべし。

柞の森　山城の名所。はゝそのの木ハ紅葉を常設するものなれば「もろき」と云ひかけ。母の文字を含めり。

殘えても殘る　母ハ殘えても子ハ生き殘るの譬。

後の世の　後世の爲めふの意ふ云ひかけたり。

水無瀬

ミナセ

作者未詳

ワキ詞「是は高野山より出でたる僧にて候ふ。我いにしへは攝津國水無瀬の里に。爲世といはれし者にて候ふが。さる子細候ひて元結切り。かやうの姿と罷りなりて候ふ。女第に故郷もなつかしう候ふ程に。唯今思ひ立ち水無瀬の里へと急ぎ候ふ。是はや故郷水無瀬の里に着きて候ふ。此所に暫く休まばやと思ひ候ふ。

子二人一聲　花散りし嵐も寒き秋風に。もろき柞の森の露。消えて殘る命かな。姉「是は津の國水無瀬の里に。爲世の卿といはれし人の。二人の子にて候ふなり。二人「扨も我父後の世の。爲世は遁世し給ひて。母も我等も捨小舟の。水無瀬の川の小夜千鳥。共音に鳴きて過ぐせしに。母さへ空しくなり給ひて。我等れと

人へ語らで　父へ此世ゑ居ても家ゑ歸らぬなり。見る夢の　父の事を夢ゑ見るなり。別れとゞまる物ならば　夢の如く父ゑ生別せし事が。万一せずにすむものでありしならばの意。現ゑ逢へんども。現在に夢覺めて逢ひたきものぞとなり。

どひ花水を。手向の爲めに立ち出づる。歌「かほどまで。便りなき身を我父の。捨て置き給ふ思ひ子の。戀ひ悲しめるあはれさよ。人は歸らで見る夢の。別れとゞまる物ならば。現に逢はんよしもがな。

ワキ詞「不思議やな是なる幼き者を見れば。いにしへの某が子に聖の御通り候ふ御留め候へ。姉「實によく仰せ候ふ御留め候へ。て候ふ。さらぬ樣にて過ぎ行かばやと思ひ候ふ。弟「いかに姉上。二人「いかに御聖聞こし召せ。往來の利益の御爲めならば。我等が母の空しき跡。吊らひてたばせ給へのう。ワキ「無慙やな父とも知らでおとゞひは。利益をなさんと往來の。僧を供養し給ふぞや。さらば留まり申すべし。二人「うれしや今日は母上の。空しき跡の其日なり。御經讀みてたび給へ。ワキ「うれてそ易き御事なれと。落つる涙をおさへつゝ。御經を讀まんと志せば。

よそのあはれゑ　我身の上ならぬ他人の悔みを云ふ如くの意。

洩る月影　風の洩るると云ひかけて。月さへさしこむやうゑ荒れはてし樣を述ゑ。

畢廻の業　今こゝに思ひ切つて恩愛の羈絆を去らずに。いつまでも悟を得る妨害物と爲らんの意。

孤兒　二人を指す。

埃子正覺　成佛ゑ同じ。

更たけ　夜のふくる事。

帳門開かざるゑ　帳に閉ゑ遮らしたる幕。門に其入口の意。

二人「我等が母の亡き跡を。吊らひ給ふ御聖を。ワキ「父とも知らで。二人「今は又。地「よそのあはれにいひなして。さらば留まりて。跡を吊らひ申さん。

二人「うれしの今の仰せやと。おとゞひ共によろこべば。地「見れば昔に變はりたる。庭の桂木窓の梅。主忘れぬしるしぞと。匂ひを留めて吹く風の。洩る月影も冷ましや。見苦しけれど此方へと。御僧を請じ入れければ。ワキ「千度百度親子ぞと。地「名乘らばやとは思へども。輪廻の業の目を塞ぎ。念佛申し撫子を。吊らふ法の結緣に。正覺ならせ給へや。

ワキ「南無幽靈成等正覺。シテ「念佛衆生無量壽如來。ワキ「一代教主釋迦牟尼法號。シテ「來迎引攝。地「あら有り難や。

ワキ「更闌け夜靜かに帳門開かざるに。影の如くに見え給ふは。此世には亡き古へ人の。姿顯はし給へるか。シテ「恥づかしや猶

も輪廻に歸り來て。見に參らするは憚りなれども。親と名乘らで情なく。ようがましげにれはします。恨み申しに參りたり。

ワキ「尤それはさる事なれども。捨つる浮世の身を恥ぢて。親と名乘らぬばかりなり。シテ「のう包むも事による物をと。亡者は子供の手を取りて。ワキ「草の枕の夜の宿。シテ「夢に相逢ふ親と子の。子二人「袂にすがれば。ワキ「兎も角も。地「爭ひかねて捨人は。いとゞ心の迷ひ子に。親と名乘らんは。よその人目もいかならん。シテ「羨ましや父も子も。地「同じ浮世の身にあれば。逢瀬の便もあるぞかし。我は冥途に歸りなば。いつ又夢にも逢ふべき。

地「緑子は三界の。首かせに繫がれて。娑婆にも行かれず冥途にも。歸りかねて悲しやな。苦しみは受くれども。恰るゝ隙なきは。娑婆に殘る妄執。愛着纏慕の妨ぐる。心の鬼の身を責めて。烏

我れ冥途ゑ　母の夢。

心の鬼の業が我身を責むるを云ふ。それを地獄の鬼ゑ云ひかけたり。我心ゑ招きたる罪

羽玉の黑髮を手に繰りからまき。引つ提げ引きする左右に引き分けて。立つも立たれず居るも居られぬ。因果の車の廻り來て。問へども何かは答ふべき。叫べども叫はず。シテ「されどもかやうの吊らひに。地「されどもかやうの吊らひに。今こそ親子に鷄鶏の袖を。振り切りがたき糸竹の。紫雲たなびき音樂聞こえて。成佛するこそ有り難けれ。成佛するぞ有り難き。

吉野天人

よしのてんにん　安清作

ワキ次第「花の雲路をしるべゑて。吉野の奥を尋ねん。詞「是ハ都方ゑ住居する者ゑて候ふ。扨も我春になり候へば。こゝかしこの花を一見仕り候ふ。中にも千本の櫻を年々に詠め候ふ。此千本の櫻は。三吉野の種取りし花と承り及び候ふ間。若き人々をも伴なひ。此度和州に下向仕り候ふ。道行「此春は。殊に櫻の花

前シテ　里女
後シテ　天人
ワキ　都人
ツレ　大和

吉野の花見ゑ行きて見る事を作れり。是ハ天人の舞樂を吉野ゑおはしましける時。天武天皇の人降り來て。舞ひ遊びしと云ふ古事ゑ依りて。藤手社の上ゑ袖振山と云ふ山の名も殘り。朝廷ゑ御簾式と爲りたる五節舞も始まりたれば。それら十一月を取り合へ。せたる作と知るべし。

花の雲路をしるべゑて　花を雲ゑ見立てゝ。其雲の行く方角を案内ゑして吉野ゑ入らんとの意。

千本の櫻　吉野ゑあり。下の千

黑の枕詞。是より鬼の責苦ゑあゑ樣きり。

因果の車　前世ゑて罪業を作りたる因ゑより。後生ゑて斯かる苦痛の結果を受くる事。

されどもかやうゑ經があの世ゑ屆をたるを云ふ。鷄鶏の袖　鷄鶏の鶏を縫りたる衣。遊仙窟などゑも出で、美服の形容なれども。こゝ唯一逢ふ一と云ひかけて袖の文字ゑつゞけたるのみ。實際の縁を云へるゑ非ず。袖ハ又「振り」の文字ゑつゞけたるのみ。「切り」まで。へつゝかず。

振り切りがたき糸竹ハ淨土の音樂を指すなり。

父法師の謂

切りがたき糸竹ハ淨土の音樂を指すなり。

本上の千本などゝ今に稱ふ。花の色香の深きを深みどり緑ともいふ。

糸よりかけて　柳を糸に見なしたる故に云ふ。古今集遍昭の歌に「青柳の糸よりかけて白露を玉にも貫ける春の柳かな」などと見ゆ。

氣色たつ　花の咲くべき徴候に云ふ。

やどとなる　貴きの意。貴女らしき姿なるを云ふ。

心。色香に染むや深緑。糸よりかけて青柳の。露も亂るゝ春雨の。夜ふりけるか花色の。朝じめりして氣色立つ。吉野の山に着きにけり。詞「急ぎ候ふ程に。是は早吉野の山に着きて候ふ。御覽候へ峯も尾上も花にて候ふ。猶々奥深く分け入らばやと思ひ候ふ。

シテ詞「のう〳〵あれなる人々は何事を仰せ候ふぞ。ワキ詞「さん候ふ是は都の者にて候ふが。此三吉野の花を承り及び。始めて此山に分け入りて候ふ。又見申せばやどとなき御姿なるが。此山中に入らせ給ふは。如何なる人にてましますぞ。シテ「是は此あたりに住む者なるが。春立つ山に日を送り。さながら花を友として。山野に暮らすばかりなり。ワキ「實に〳〵花の友人は。他生の縁と云ひながら。我等も同じ其心。シテ「所も山路の。ワキ「友なれや。地「見もせぬ人や花の友。知るも知らぬも花の陰

花衣の袖ふれての意。　花やかなる衣の意。袖と袖とすりよせて

花下忘レ歸依二美景一　白氏文集の句。

其いにしへの　天武天皇の古事を指す。

五節の舞　公事根源に「中の丑（十一月）をば五節帳臺試と云ふ。常平殿に出て主上御覽あり。五節舞姫は五人なり。參りの儀式あり。内々參るをば晩座と云ふ。皆參りとゝのほりて帳臺に出御なり。云々。帳臺とは御しきすはだと亂舞あり。びんだらこ歌曲の名）など謠ふ。大歌小歌など云ふ事あり。宴日は殿上の酒醉（酒を賜ふ式）あり。明珠今接など歌ひて。三獻はてゝ亂舞なり。柳などを舞ふ。今は大嘗會の時より外は無きなり。昔は年々おこなはれき。今日五節所ふ賜

に。相宿りして諸人の。いつしか馴れて花衣の。袖觸れて木の本に。立ちよりいざや詠めん。實にや花の下に。歸らん事を忘るゝは。美景によりて花心。馴れ〳〵初めて詠めん。いざ〳〵馴れて詠めん。

ワキ調「如何に申すべき事の候ふ。かやうに家路を忘れ花を詠め給ふ事。いよ〳〵不審にてこそ候へ。シテ詞「實に御不審は御理。今は何をか包むべき。誠は我は天人なるが。花に引かれて來りたり。今宵はこゝに旅居して。信心を致し給ふならば。其いにしへの五節の舞。小忌の衣の羽袖を返し。月の夜遊を見せ申さん。暫くこゝに待ち給へと。地「夕ばえ匂ふ花の陰。月の夜遊を待ち給へ。少女の姿顯はして。必ずこゝに來らんと。迦陵頻伽の聲ばかり。雲に殘りて失せにけり。

ワキ「不思議や虚空に音樂聞こえ。異香薫じて花降れり。地「是れ

いらんためふ。交野の雉子などを召されしみ。使のありしを符の使とハ申すなり。卯日ハ童女の舞覽。清涼殿ふ召して御覽ず。下つかへ殿上ふ召す。そも〳〵五節の舞ハ天皇吉野宮ふましく〳〵て琴を彈き給ひし時。前の峰より天女あまくだりて。天の羽衣の曲を五度返して。少女ども少女さびすも一度玉を袂ふきて少女さびすも一度と謠ひけるとかや。然るを天平五年五月ふ。まさしく内裏ふて五節の舞ありけるとぞ一とあり。此巻の國栖をも見合わすべし。

小忌の衣　舞人の裝束。

タばえ　花色のさかる事。

夕方の空ハ映とあひて　俳の國や天國などふ迦陵頻伽住みて聖の美しき島。いひもあへぬ　いひも終らぬふの意。

海でし殿も云々　拾遺集ふ「君ハ代ハ天の羽衣まれふ來(着)て撫づとも盡きぬ殿なるらん」とあるを引く。此歌を奥儀抄ふ註して「經ふ日〳〵四十里四方の岩を三年ふ一度充天より下りて。三銖の衣ふて撫で盡したるを一劫と云へり。蓬萊ハ代ハかやうふ旗でいも〳〵盡させぬ殿なりんとなり」と云へるふて明らかなり。「盡させぬ春」と下の句ふつゞけたり。天つ風雲の通路云々　古今集遍昭の歌を引く。五節の舞姫を見てよめるなり。

とゞさる春の　「しばしとゞめん」の文句を用ひて云ふ。今の世ふも天人の姿が此世ふとゞまりて見らるゝの意。

うつろふと見ねしが　花の散るをうつろふと云ふ依りて。天人の雲上ふ乘りうつる意ふ云ひかけたり。

シテ　妻　三郎
ワキ　錦戸　秦衡
ツレ
ハキ　藤原秦衡主君義經に背きて頼朝ふ附かんとせしを。弟の三郎同心せざりしかば。兄として討手ふ向ひ。遂ふ弟を誅ぼす事を作れり。
秀衡　鎮守將軍陸奥守ふて文治三年卒す。

金打する法。　刀のつばを鳴らして誓をする法。

更ふ御對面もなく候ふ間ハ秦衡ふ面會せぬを云ふ。　義經此上ハ力及ばぬ事と　もはや義經の勘氣ハ免さるまじと決心せしなり。

三男　秀衡の三男ふて秦衡の弟なり。名ハ忠衡。

錦戸

にしきと

宮增作

治まれる御代とかや。いひもあへねば雲の上。琵琶琴和琴笙篳篥。鉦鼓羯鼓や糸竹の。聲澄み渡る春風の。天つ少女の羽袖を返し。花に戯むれ舞ふとかや。

地「少女は幾度君が代を。撫でし巖も盡きせぬや。春の花の梢に舞ひ遊び。飛び上り飛び下る。實にも上なき君の惠み。治まる國の天つ風。雲の通ひ路吹きとづるや。少女の姿とゞまる春の。霞も棚引く三吉野の。吉野の山櫻。うつろふと見ねしが。又咲く花の雲に乘りて。行くへも知らずゞなりにける。

ワキ詞「かやうに候ふ者は。奥州の住人秀衡が子に。錦戸の太郎にて候ふ。さても頼朝義經御中不和にならせ給ふにより。判官殿は親にて候ふ者を御頼み有り。是まで御下向候ふ間頼まれ申し候ふ處に。御運の盡きさせ給ふにや。親にて候ふ者死去仕りて候ふ。うのきはに我等を近づけ。君に心替り申すなと。堅く申しつけ金打させて候ふ。尤其儀違變なく候ふ處に。いかなる者の申し候ふやらん。我等君に心替り申す由を聞こしめし。日々に出仕申すといへども。更に御對面もなく候ふ間。此上は力及ばぬ事と存じ候ふ處に。頼朝より御教書をなされ。いろぎ參るべき由を度々仰せられ候ふ程に。泰衡我等は同心仕り。はや頼朝へ參るべきに定めて候ふ。いまだ此由を三男泉の三郎に申さず候ふ間。唯今泉が舘に行き。かやうの事をも談合せばやと存じ候ふ。